

スロウスタートアップ!

nao gran

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

中学3年生の一之瀬花名は高校入試の前日に病気（おたふく風邪）にかかり受験できずに高校に進学できず、高校受験浪人になってしまう。中学卒業から1年後、花名は自分を知る者が誰も居ない高校（星尾高校）に進学し、浪人していたことを秘密にしたまま高校生活をスタートさせるのだった。

# 目次

STEP 1	「はじまりのどきどき」	1
STEP 2	「うんどうのはあはあ」	35
STEP 3	「なみだのぼろぼろ」	71
STEP 4	「2階のプレミア大会」	111
STEP 5	「かむりのふわふわ」	137
STEP 6	「うなぎのぬるぬる」	168
STEP 7	「ぐるぐるのてくび」	201
STEP 8	「はなのともだち」	231
STEP 9	「ゴリラのみずぎ」	259
STEP 10	「サメのいとこ」	296
STEP 11	「トマトのまつり」	325
LAST STEP	「スロウのスタート」	364



## STEP 1 「はじまりのどきどき」

そして高校の入学式の日が来た。花名は母に『とうとう入学式です。行ってきます』とメールを送った。

花名「ふう・・・」

すると返信が来た。

花名「え？」

メールを見ると、『いつてらっしやい。お母さん』と母からの返信が来た。

花名「お母さん・・・あ、お父さんからも。」

今度は父からメールが来た。すると。

花名「またお母さん!?!」

今度は父から。

花名「また!?!」

今度は母から。それが何度も続いた。

花名（お父さんが消されていく・・・）

星尾高校。以前までは女子校だったが、今年から共学になった。男子生徒は少ない。先生『それでは、入学式を終わります。』

入学式を終えた。新1年生は教室へ向かう。

花名「緊張した・・・これで本当に高校生かあ・・・」

すると後ろから小柄な女子生徒が通り過ぎた。

花名「ん？」

小柄な女子生徒は、1人の女子生徒に向かって走って、後ろから抱き付いた。

??????? 「ぐはっ！」

??????? 「栄依子!」

横に居た女子生徒がびっくりした。

??? 「だ、大丈夫？」

栄依子「大丈夫・・・ん？」

後ろを振り向く栄依子。

栄依子「えつと・・・冠ちゃん？」

すると女子生徒の頭のリボンがピヨンと跳ねた。

栄依子「ああごめんね。知ってる子に凄く似てて・・・」

???「栄依子・・・」

栄依子「え、本人!？」

???「栄依子・・・」

栄依子「だってこんな・・・あの時のままで・・・」

???「栄依子!」

栄依子「冠ちゃん!」

再会を果たした2人が抱き合った。

???「冠って・・・冠なの!？」

冠「侑李!」

侑李「冠!」

2人も抱き合った。どうやらこの3人は昔からの友達らしい。

栄依子「ほんとに変わってないね。小学生の時以来なのに。」

侑李「本当だねえ。冠変わってないねえ。」

冠「むー。」

怒った冠が背伸びする。そして威張った。

冠「急成長！育ち盛りだから！」

栄依子「あはは！本当だ！凄い伸びてる！」

侑李「大きくなったね冠。」

花名（そつか・・・皆小学校や中学校からの友達が・・・皆もう仲良くなってる・・・）

孤独になつてしまった花名。

???「見く付けた。可愛い女の子。」

1人の女子生徒が誰かを発見した。

一方花名は、誰とも話す事が出来ず教室へ向かう。すると後ろから。

???「おはようございまーす！」



花名「ひやつ！お、おはよう・・・あれ？」

後ろに向いて挨拶したが、誰も居なかった。今度は前を見ると。

???「おはようございます！」

女子生徒A「おはよう！」

???「おはようございます〜！」

女子生徒B「ああ。おはよう。」

テンションが高い女子生徒が次々と他の女子生徒達に挨拶する。その女子生徒が教室に入った。花名も入ると。

???「やや！十倉さんに億崎さんじゃないですか〜！」

花名（あ、さっきの・・・）

侑李「たまって！」

栄依子「あ！一緒のクラスだったんだ！」

たまた「今後とも宜しくお願いしますよ！」

栄依子「こちらこそ。初日で知ってる人居ると何だかほっとするわね。」

たまた「ほんとですよ。いや〜緊張しちやつて緊張しちやつて。逆に元気です！」  
栄依子「あく分かる分かる。」

侑李「よくあるよね〜。」

たまた「およよ？十倉さん、腰から何か生えてますよ？」

冠が栄依子の腰に隠れてる。

栄依子「ほら。かむも隠れてないで自己紹介。」

侑李「頑張つて冠。」

すると冠がヒョコつと顔を出した。

冠「千石冠です・・・宜しく・・・」

たまた「わ〜！ちっちや可愛い！」

しかし冠が膨れっ面になって怒った。

侑李「冠が怒ってる。」

栄依子「ねえ。小学生の時からサイズが全然変わってなくて。」

冠「大器晩成だから人より成長速度が遅いだけ。」

侑李「あれ？趣旨変わった？」

栄依子「あら？育ち盛りなんじゃなかった？」

冠「60年後に吠え面かくなよ。」

たまた「おお！長期計画！」

栄依子「75歳で身長の事気にしてる時点で、器ちっちゃいよね。」

冠「むー。」

たまた「あ！でもこれって60年後もお友達って事ですよ？その熱い友情に感動です！」

栄依子「ええ？何か無理矢理良い話にしたような・・・」

たまた「良い話に仕立て上げた己の力量に感動です！」

栄依子「そう言えば、何気に初めてよね？」

たまた「ですです！」

???「私もその仲間に入れてほしいな。」

3人「ん？」

そこに赤髪ポニーテールの女子生徒が立っていた。

たまた「おはようございます！」

???「おはよう！私松原美鈴！宜しくね！」

栄依子「こちらこそ。あなたもこのクラス？」

美鈴「そう。クラスメイトだよ。にしても・・・」

彼女は冠をじつと見る。

冠「？」

美鈴「ねえ、ちよつと抱いて良い？」

侑李「あなたいきなりどうしたの？」

美鈴「ここだけの話。私可愛い女の子が大好きなの。」

たまた「おお！それって百合って言う事ですか？」

美鈴「よく分かったね。」冠ちゃんだっけ？ちよつと良いかなく・・・ぐえっ！」

突然後ろからチョップを喰らった。

???「おい美鈴、初対面の人に何言ってるんだよ。」

茶髪の男子生徒と、金髪の男子生徒が居た。

???「ごめんね君達。この女好きの奴に付き合わせちゃって。」

栄依子「良いの。この子結構面白いね。2人の名前は？」

???「ああ、俺は佐野優輔。」

???「浪江貴之。宜しく。」

茶髪の男子生徒が「佐野優輔」。金髪の男子生徒が「浪江貴之」。

美鈴「そして私が松原美鈴です！」

侑李「さつき聞いたよ。」

花名（あの子達も同じクラスなんだ……凄いな。もうあんなに仲良くなってる……私なんて、挨拶一つ真面に返せないのに……）

1人遠くから見詰めてる花名は暗くなった。すると後ろから。

先生「おい。教室入れ。ホームルーム始めるぞ。」

ホームルーム。

先生「えーまずは入学おめでとう。このクラスの担任になりました榎並です。宜しくなー。」

クラス担当の「榎並清瀬」。

クラス生徒全員「宜しくお願いします！」

榎並先生「ん。それじゃ順に自己紹介してもらおうか。」

花名（やっぱりあるんだ！自己紹介……）

榎並先生「一之瀬ー。」

花名「は、はい！（出席番号1番、席も一番前。一之瀬って名字の宿命だけど辛い

なあ・・・」

勇気を出して立って自己紹介する。

花名「一之瀬花名です。宜しくお願ひします・・・」

榎並先生「入学初日から元気無いな・・・」

花名「え?・・・」

榎並先生「・・・お。一之瀬今日が誕生日じゃないか。」

花名「え!?!・・・」

何と入学式が花名の誕生日だった。花名は恥ずかしがる。すると拍手が聞こえた。たまたま「おめでとうございます!お誕生日1番乗りですね!」

栄依子「おめでとう!」

侑李「おめでとう!」

冠「おめでとう。」

優輔「おめでとう。」

貴之「おめでとう。」

美鈴「おめでとう!」

クラス全員が拍手して、花名の誕生日を祝った。

花名「あ・・・ありがとうございます!」

お礼を言つて席に座つた。

榎並先生「よし。じゃあ次今井。」

花名（あく恥ずかしかった！まさか入学初日にお誕生日をお祝いされるなんて・・・）

億崎侑李の自己紹介。

侑李「億崎侑李です。好きな事は読書で、小説や漫画を読んでいます。宜しくお願ひします。」

佐野優輔の自己紹介。

優輔「佐野優輔です。趣味はサイクリングで、休みの日は何時も自転車で何処かへ行つたりします。家はちよつと遠いので自転車通学しています。後実家が飲食店です。宜しく。」

千石冠の自己紹介。

冠「千石冠です。好きな事は寝る事と食べる事で特技は沢山食べる事…宜しく…」

十倉栄依子の自己紹介。

栄依子「え〜と…十倉栄依子です。特技は…敢えて言うなら手先が器用な方かな？友達百人じゃないけどみんなと仲良くできれば嬉しいかなって思ってます。宜しく。」

浪江貴之の自己紹介。

貴之「浪江貴之。優輔とは幼い頃からの幼馴染みです。ゲームが好きで家でずっとやっています。あ、運動とかもやっています。宜しく。」

松原美鈴の自己紹介。

美鈴「私は松原美鈴です。このクラスの皆と仲良くなれば嬉しいです。私は昔から人懐っこい性格です。宜しくお願いします。」



百地たまての自己紹介。

「たまて「百地たまてです！お気軽にたまちゃんとお呼び下さい！百地のたまちゃん！百地のたまちゃんでございます！1年2組の皆様！どうか百地のたまちゃんを宜しくお願いします！」

テンション高めで宣言した。

花名「選挙活動・・・？」

チャイムが鳴った。

榎並先生「じゃあこれで解散な。」

下校時間になった。

たまて「お誕生日の人さーん！」

花名「も・・・百地さん。」

たまて「気軽にたまちゃんの良いですよー！あのこれ。誕生日プレゼントです。」  
交通安全の絵馬のお守りをプレゼント。

花名「絵馬・・・？」

栄依子「誕生日プレゼント？じゃあ私からも。」

冠「私も。はい。」

侑李「私からも。」

同じお守りをプレゼントした。

栄依子「今朝駅前で配ってたのよね。」

たまた「あ！ちよっぱやでネタバレしましたね！お誕生日って知らなかったのですね！おめでとうございます！」

花名「え？」

栄依子「そりや知らないでしょ。さつき知り合ったばかりなんだし。」

たまた「おっとそうでした！」

栄依子「なあに？今分かったの？」

たまた「来年はもっと良い物用意しておきますね！」

栄依子「と言うか今度はちやんとしたものの渡すからね。」

花名「ええ!?!」

たまた「よーし！今日から何が欲しいのかりサーチですよ！」

栄依子「お！ハードル上げてきたわね。」

美鈴「何何？何の話？」

優輔と貴之と美鈴の3人も来た。

侑李「この子にあげる来年のプレゼントを考えてたの。」

美鈴「へえ〜！私達も入れて〜！」

優輔「おい美鈴落ち着けよ。」

栄依子「面白いねえ。3人も何か考えてみる？」

貴之「俺達も？そうだなあ・・・」

冠「ロールケーキが良いと思う。」

栄依子「それはかむが食べたいだけでしょ？」

美鈴「チョコケーキ！」

優輔「お前が食いたいだけだろ。」

花名「(さつき知り合ったばかりなのにもう来年の話なんて・・・)あ、あの！ありがとうございます！これ・・・大事にするから！」

プレゼントされた4つのお守りを携帯に吊るした。

優輔「4つ吊るしてる・・・」

栄依子「あはは！凄い事故りたくない人みたいになってる！」

花名「あれえ・・・」

たまた「これで登下校も安心ですね〜！」

冠「ありがたや。」

貴之「事故が起こつても万全になるかもな。」

美鈴「良かったね〜。」

花名「あ、あはは・・・」

冠「あ。」

栄依子「どうしたの？」

冠「交通安全の絵馬あげちゃったから私達が事故に遭う。」

花名「え〜！」

たまた「私達はその絵馬に守られていたんですね。」

美鈴「事故に遭つたらとんでもない事になっちゃうかも。」

花名「え〜！」

優輔「そんな大袈裟な・・・」

栄依子「じゃ、一緒に帰れば良いんじゃない？」

たまた「おお！名案ですね！駅までご一緒にしましょう！」

美鈴「私達もご一緒に良い？」

たまた「勿論です！」

花名「……」

栄依子「あ、もしかして用事あった？」

花名「あの私……学校まで歩きで来てて……」

栄依子「お！羨ましい！」

たまた「おお！徒歩圏内！」

侑李「歩きで来るなんて良いわね！」

冠「寝過ぐし放題。」

貴之「何でそれ？」

花名（このまま付いて行ったら変に思われるかな……でも……折角仲良くなれた気がするのに……）

栄依子「徒歩通学って事は、駅前の桜並木まだ見てないんじゃない？」

たまた「もうもう凄いんですよ！ブワーって桜のトンネルが！」

冠「凄い綺麗。」

侑李「今日良い天気だし見に行こうよ。」

優輔「満開だぞ。」

貴之「絶景が見れるぞ。」

美鈴「感動するよ！」

栄依子「ちょっと遠回りになるけど、駅まで一緒に行かない？」  
花名「う……うん。」

8人で下校する。優輔は自転車を押してる。

優輔「良い天気〜。」

貴之「日向ぼっこしたいな〜。」

たまた「入学式と誕生日が一緒だなんてめでたい事続きですね！はなちゃんさん！」

花名「あ……さんは付けなくて良いよ。えつと……百地さん。」

たまた「じゃあ私の事もどうぞたまちゃんとお呼び下さい！」

花名「たま、ちゃん。」

栄依子「やつぱり春生まれだから花名って名前なの？」

花名「う……うん。」

たまた「可愛いお名前ですね！」

栄依子「あら。たまでも。」

侑李「たまたって名前も可愛いわよ？」

たまた「私の事はお気軽にたまちちゃんとお呼び下さい！」

栄依子「拘るわね。たまたじゃダメなの？」

たまた「う．．．そこは気さくにたまちちゃんと．．．」

冠「たまたで。」

美鈴「たまたで。」

たまた「たまちちゃん！」

栄依子「たまゝ。」

たまた「おおお！」

栄依子「てゝ。」

たまた「がく。」

がっかりした。

栄依子「自分の名前嫌い？」

たまた「う．．．」

栄依子「あら。ドストレートに効いたわね。」

優輔「名前、気に入らないのか？」

たまた「いえ決して嫌いではないのですが．．．えつとですね．．．たまたって名前

は玉手箱が由来でして．．．」

栄依子「ああ。そうなんじゃないかと思つてたのよ。」

貴之「たまって名前、何か珍しいな。」

侑李「確かに。私もそう思つてたの。」

栄依子「でも綺麗な名前よね。たまって。」

するとたまって真っ赤になった。

美鈴「照れてる。可愛い。」

たまって「いやいやいやいや！玉手箱つてのはですね！玉手・箱と切るのではなく玉・手

箱！なんですよ！」

美鈴「へえ。そうだったんだ。初めて知つた。」

たまって「あくもう両親！名付ける前にもっとちゃんと調べろ！」

栄依子「てつきり玉手箱つて由来が嫌なのかと思つた。ほら、開けるとおばあちゃんになるから。」

たまって「うわ。嫌な理由が増えた気が。」

優輔・貴之「今まで何があつた？」

栄依子「あははは！ごめんごめん。でもたまって名前ほんとに可愛いと思うわ

よ。」

花名「うん！」



美鈴「そうだよ！元気出してたまでちゃん！」

たまで「あ、ありがとうございます・・・」

冠「わ・・・分かった。」

栄依子「分かったって何が？」

侑李「どうしたの冠？」

冠「玉手箱からたまでって名前を付けるのは。肉団子から名付けようとして肉団って付けるようなもの。」

花名「肉・・・団・・・」

栄依子「ぶふっ！肉団・・・それは確かに嫌だ・・・」

侑李「百地肉団。」

栄依子「あはははははは！」

たまで「栄依子ちゃんはツボり過ぎですよ！侑李ちゃんも何ですか！百地肉団って！」

優輔・貴之・美鈴「ブッ！」

たまで「優輔君に貴之君に美鈴ちゃんも!!」

栄依子「・・・ごめんごめん。かむがもの凄い例えだしてくるから。侑李が冗談言うてくるから。」

たまた「そう言えばかむちゃんも珍しいお名前ですね。」

栄依子「冠って書いてかむりだからね。」

たまた「冠!? ティアラ・・・これはさぞかしもの凄い由来が・・・まさか! やんごとなき王家の血筋であられせられたり!？」

冠『愚民どもがー。』

美鈴「DSの冠ちゃん・・・良いかも。」

優輔・貴之「おい百合女。」

侑李「王家って・・・」

栄依子「でも由来も私も聞いた事無いし、気になるわね。」

冠「多分冠鷲から取ってる。」

栄依子・侑李・たまた・優輔・貴之・美鈴「強そう!」

栄依子「冠鷲って冠被ってるの?」

冠「うんうん。冠羽って羽が頭に生えてる。つまりこれ。」

頭のリボンで例える。

たまた「リボン!? 鷺ですか。それに比べらた我々は小鳥ですね。栄依子鳥ちゃん。栄依子鳥ちゃん。」

栄依子「捕食対象だそれ！」

貴之「食われるぞ！」

たまた「栄依子ちゃんはどちらかと言うと、捕食する側の人ですけどね。」

侑李「確かにそうね。栄依子は完璧だもん。」

栄依子「ええ? そう? されてみる?」

たまた「ほらそう言う所ですよ! 栄依子ちゃんは中学の時学校中にその名を轟かせていましたからね。それはもうモツテモテのモテモテで!」

栄依子「そんな事無いわよ。」

冠・侑李「栄依子は小学校の時から凄かった。」

たまた「さらに有力な情報が! これは言い逃れ出来ませんね。」

栄依子「かむに侑李まで乗っからないの! 3人共大袈裟に言ってるだけだからね。」

花名「う・・・うん。」

優輔・貴之「お、おう。」

美鈴「はぁ〜い。」

花名（何か普通に楽しいかも・・・）

その後桜が満開の並木道に着いた。

花名「わあ〜！凄〜い！」

優輔「桜が満開だ〜！」

貴之「絶景だぜこれ！」

たまた「ギャルゲーだったらいベントスチル間違いないですね！」

美鈴「伝説の樹の下で？」

冠「お腹空いた。肉団食べたい。」

侑李「もう？」

たまた「かむちゃん。そこは肉団子で良いんじゃないですか？」

栄依子「ねえ。このへんでおすすめのカフェとかある？ほら今度皆でお茶でもしたいじゃない。」

たまた「教えてほしいです！甘味処とかパン屋さん！序でにお魚と野菜が安いスパ〜とか！是非！」

花名「ご……ごめんなさい……私去年……じゃなかった今年……今年に入ってから引越して来たばかりで教えられるような事は何も……何も……」

栄依子「ああ。だから桜並木の事知らなかったのね。親の転勤とか？」

花名「ううん……一人で。」

栄依子「一人暮らし？」

たまた「お。大人ですね。」

優輔「凄いな。」

貴之「一人暮らしとは遅しいな。」

美鈴「まさに大人！」

冠「アダルティ。」

花名「従姉が管理してるアパートだし、一人暮らしって言っても殆ど二人暮らしみたいな感じで……」

貴之「管理人さんが？」

たまた「お。二人暮らしですか！今度お邪魔してみたいです！」

花名「え……どうぞ。何時でもお邪魔して下さい。」

栄依子「良いの？たまり場にしちやうよ？」

美鈴「抱いても良い？」

冠 「じゃあ置き菓子して良い？」

花名 「それはもう・・・置きたいだけ置いてもらえれば・・・あ。」

桜の花びらが舞い散った。

栄依子 「遠回りして良かったでしょ？」

花名は舞い散る花びらを見て感動した。

栄依子 「じゃあ優輔と貴之と美鈴、何かおすすめのカフェとか探してよ。」

優輔 「ああ。今度教えてやる。」

美鈴 「勿論！」

貴之 「楽しみにしてろよ？」

その日の夕方の軽井沢駅。

たまた 「また明日ですー！」

栄依子 「またー。」

侑李 「じゃあねー。」

花名 「ま、また明日！」

冠「バイバイ。」

貴之「じゃあ俺達も帰るか。じゃあな花名。」

美鈴「花名ちゃんじゃあねー！」

優輔「気を付けて帰れよー。」

花名「う、うん。じゃあねー。」

3人も帰って行く。優輔は自転車に乗って帰って行く。

その日の夜のアパート。

花名（初めてだな・・・学校の友達にプレゼント貰うの・・・友達・・・）

志温「はなちゃん！ご飯よー！」

花名「あ、はい！」

今日の晩御飯はちらし寿司。

花名「わく！ごちそうだ！」

志温 「入学式と誕生日、ダブルでお祝いだもの。」

花名 「ありがとう志温ちゃん！」

志温 「うふふ。さあ食べましょ？」

花名・志温 「いただきます。」

ちらし寿司を頂く。

志温 「はなちゃん。違ってたらごめんね。もしかしてお友達が出来たの？」

花名 「え!? な、何で・・・？」

志温 「だってそんなに楽しそうにご飯食べてる顔、はなちゃんがうちに来てから初めて見たんだもの。」

花名 「そ・・・そんなに顔に出てたかな・・・？」

志温 「丸出しよ丸出し。」

花名 「うん・・・友達って言うかちよつと色々あつて、駅前の桜を見て来たの！」

志温 「良いわね。」

花名 「で・・・でもお話して桜見てそれだけって言うか・・・友達って言うって良いのかなこれって・・・」

志温 「良いに決まってるじゃない。」

花名 「そ、そうかな・・・」



志温「うふふ。私ですごく嬉しくなっちゃった。私も駅前桜見に行こうかしら。学生服で！」

花名「そ．．．そこは普通の服で良いと思うよ志温ちゃん．．．」

その後バスデーケーキを持って来た。

志温「おめでとはなちゃん。」

ロウソクを吹き消す花名。

花名「えへへ。ありがとう志温ちゃん。」

志温「はい。誕生日プレゼント。」

プレゼントが入ってるピンクの袋をプレゼントした。

花名「わあく！開けて良い？」

志温「勿論！」

プレゼントの中は。

花名「わく！傘！ありがとう志温ちゃん！」

志温「ネギそっくりで可愛いでしょ？」

花名「ネ．．．ネギ？」

志温「あ、はい。駅前で配ってたから貰って来ちゃった。これで登下校も安心ね。」  
栄依子と冠とたまと侑李から貰ったお守りと同じ。

花名「わ、わくく．．．ほんとだねく．．．」

風呂から上がった後、母親の葉月と通話する。

葉月『もう友達が出来たの？ 凄いじゃない！』

花名「うん．．．色々不安だったけど大丈夫そうかも．．．多分．．．」

葉月『大丈夫よ。花名は色々考え過ぎるんだから．．．あ。もうこんな時間。まだ寒いから温かくして寝なさいね。』

花名「うん。お父さんにも宜しくね。おやすみなさい。」

葉月『おやすみ。』

通話終了。

花名の実家では。葉月が夫の健と話をした。

葉月「お父さん。花名友達が出来たって。」  
健「お！そうか出来たか。良かったな・・・花名。」

翌朝。花名が学校へ行く。

志温「行つてらっしゃい！」

花名「行つて来ます！」

登校途中。後ろから自転車のベルが聞こえた。

優輔「よう花名。おはよう。」

花名「ゆ、優輔君。おはよう。」

優輔「そんなに緊張しなくて良いぞ。俺達もう友達なんだから。」

花名「そ、そうだね。」

すると誰かが花名の後ろから花名に抱き付いた。

花名「ヒヤッ!？」

美鈴「うーん、冠ちゃんも良いけど花名ちゃんも悪くないな。」

花名「み、美鈴ちゃん!？」

貴之「おい美鈴止めろ。」

美鈴「ぐへっ!」

頭にチョップが直撃。

貴之「おはよう花名。」

花名「お、おはよう。貴之君。」

貴之「おい美鈴、いきなり抱き付かれたらびつくりするだろ?」

美鈴「ごめんごめん。欲が制御出来なくて。」

優輔「はあ、まあ良いや。早く行こうぜ?」

1年2組に到着。

花名「あ。」

たまた「やや!昨日誕生日の!おはようですよ。」

栄依子「お。昨日誕生日の。おはよう。」

冠「ん。昨日誕生日の。おはよう。」

侑李「あ。昨日誕生日の。おはよう。」

優輔（昨日誕生日って何だ？）

花名（も・・・もしかして名前覚えられてない・・・？）

冠「お腹空いた。」

栄依子「えく？早くない？」

侑李「もう？」

たまた「お昼休みまでまだまだ・・・」

花名「あの！」

栄依子・冠・たまた・侑李「ん？」

花名「たまちゃん！栄依子ちゃん！冠ちゃん！い・・・一之瀬花名です！改めてどう

ぞ宜しく願います！」

たまた「そうでした。はなちゃん！」

冠「誕生日のインパクト。」

栄依子「いや、知ってるから。」

侑李「ごめんね花名。今の冗談だから。」

優輔「冗談かよ。」

貴之「完全に記憶消されたのかと思ったぞ？」

美鈴「そうだよ。花名ちゃん可哀想だったじゃない。」

栄依子「ごめんごめん。」

花名『一之瀬花名。17歳。中学浪人で1年遅れのスロウスタートだけど、私の高校生活が始まりました！』

「END」

## STEP 2 「うんどうのはあはあ」

花名が何故中学浪人になったのか、それは1年前の事だった。とある病院。

葉月「先生どうなんでしょうか？」

医師「そうですね・・・おたふく風邪ですね。」

おたふく風邪に掛かってしまった花名。

花名「おたふく!？」

葉月「あらまあ。花名掛かってなかったんだっけ？」

医師「まずは検査してみないとだけど・・・学校はしばらく休んでもらう事になるね。」  
それを聞いた花名が絶望した。

医師「おたふくはね・・・大人になってから掛かるとちよつと厄介なんだよね。感染する病気なので1週間から・・・」

花名「えー!?!あの!私!明日受験なんですけど!!」

医師「それは・・・まあ・・・」

葉月「諦めるしかないわよね。」

花名「っ!？」

その後花名は、部屋で眠った。

花名『翌日からすぐ高い熱が出て、それからの事はよく覚えてない・・・卒業式が終わって全ての高校の受験が終了して、その日を待ってたかのように私のおたふく風邪は完治した。』

そう。彼女は受験前日におたふく風邪に掛かってしまったのだった。これが切欠で浪人になってしまった。

完治されてから数日が経ったある日。花名がリビングの隅で泣きじゃくっていた。

花名「うつ・・・うつ・・・」

葉月「ほっぺの次は目が腫れるわよ。」

花名「だってだって！どうすれば良いか分かんないだもん！皆高校生になるのに私



だけこんなんです！」

葉月「開き直って時間を有意義に使いなさいよ。中学浪人なんて中々出来ない経験よ。」

花名「しなくて良いですそんな経験！」

葉月「自己紹介の時・・・拙者浪人でござる！って言えるわよ？」

花名「いらぬよそんな持ちネタ！」

悲しんでる娘に対して、母親はかなりポジティブ。

花名「来年も学校行きたくない・・・お外にも出たくない・・・」

葉月「バカな事言わないの。」

花名「だって、来年になったら友達皆先輩になっちゃって・・・私は皆の後輩になっ

ちやって・・・同級生も皆後輩で私だけ先輩で・・・」

葉月「先輩後輩ややこしいわね。」

花名「友達だって出来る訳無いし・・・兎に角もうお外にも学校にも行きたくない！引き籠もりになるの！」

泣きじゃくる花名に、葉月がある提案を話した。

葉月「花名。志温ちゃんって覚えてる？今年大学を卒業してね。お祖父さんのアパートの管理人してるの。花名。そのアパートで一人暮らししなさい。」

花名「え！それって引き籠もりはこの家にはいらなくて事ですか・・・」

葉月「そうじゃなくて。花名の事知らない人ばかりの環境ならやり直しが出来るでしょ？もう一回受験生からやり直すの。少しでもスタートが遅れたと思って。ね？」

花名「・・・うん・・・」

これが切欠で、花名は従姉の志温が管理してるアパートで一人暮らしする事となった。

そして現在に戻り、アパートで晩御飯を食べる。

志温「来週から午後も授業あるでしょ？お弁当作りましょうか？」

花名「え！良いの？」

志温「勿論。そう言うの好きだから。」

花名「志温ちゃん・・・」

志温「花名ちゃんって、好きなキャラクターとか居る？」

花名「キャ・キャラ弁じゃなくて良いよ！」

志温「うふ。お楽しみに。」

そして翌日の学校。たまてが教室の後ろの黒板に花名の名前を書いた。

たまて「はなちゃんつて、花の名前つて書いて花名なんですね。」

花名「うん。よくかなちゃんつて間違えられる。」

優輔「あるよなあ。名前間違えられるの。」

たまて「うくん残念。」

花名「え？」

たまて「かなちゃんだつたら私のたまと併せて・・・かなえたまえと言う素敵なお二ツトが爆誕すると思つたのですが。」

貴之「アイドル目指したいのか？」

美鈴「かなえたまえ・・・可愛いユニツトになりそう！」

たまて「はなですとく・・・はなれたまえ！」

花名「！」

優輔「おいたま、花名が可哀想だろ。」

たまた「あはは。冗談ですよ。はなちゃん。」

そう言つて花名を抱き締めた。美鈴がウキウキしながら見てる。

花名「た・・・たまちゃん・・・？」

たまた「よしよし。はなちゃん、良えんやで。」

美鈴「やっぱり百合・・・良いわね。」

優輔・貴之「・・・。」

引いてるこの2人。

栄依子「ほらほら。はなれたまえ。」

侑李「見事な使い方。」

栄依子「花名が苦しそうでしょ。」

花名（花名って呼ばれた・・・）

栄依子「あ、ごめん。どさくさで呼び捨てしちゃった。」

花名「ううん・・・全然大丈夫。」

栄依子「じゃあこのまま花名って呼んで良い？私も栄依子で良いから。」

花名「う、うん・・・。」

冠「これでクラス全員コンプリート。」

優輔「何がコンプリートだ？」

冠「栄依子の呼び捨て。」

花名「え！入学してまだ1週間も経ってないのに？」

優輔「栄依子、凄えコミュ力・・・」

昼になり、中庭で弁当を食べる。優輔と貴之以外はハンケチに座ってる。

栄依子「お待たせしました。この学校の購買、パンの種類がすごくて多すぎて悩んじゃった。」

貴之「そうなのか。」

たまた「やや！それは厚い情報ですね！私は明日パンにしてみますかね。ん？」

冠がでかい弁当を出した。

たまた「かむちゃんのお弁当でつかいですね。」

優輔「おせちかよ。」

花名「冠ちゃんそれ全部食べるの!？」

冠「このくらいは余裕・・・なんだけど・・・食べるの遅くて完食出来ないから、良

かつたら皆も一緒に食べて・・・」

たまで「それは切ない・・・」

美鈴「冠ちゃん、無理しないでね？」

たまでが弁当を開ける。

花名「わあ！」

栄依子「これってたまのお手製？」

花名「え？」

たまで「栄依子ちゃんよく分かりましたね。実は私は百地家の料理番です。」

貴之「料理上手だったのか。」

優輔「女子力高っ。」

美鈴「お嫁にしたい。」

優輔・貴之「黙れ。」

花名「たまちゃん凄ーい！」

たまで「そんな事ないですよ。はなちゃんはいとこさんと二人暮らしでしたよね？」

お弁当はいとこさんが？」

花名「あ・・・うん。」

栄依子「アパートの管理人してるんだっけ？いとこさん。」

花名「うん。料理上手でご飯も作ってもらって・・・」

栄依子「料理上手な管理人さんか。何かロマンを感じるわね。」

侑李「私も感じるわ。」

たまた「一体どんなロマン弁当なんでしょ。」

栄依子・侑李「ね。」

花名「普通だよ。普通のお弁当・・・」

蓋を開けると・・・

ハート型のおかずが沢山あった。

栄依子「え！何何このお弁当!？」

たまた「もしかしてそのいとこさんとお付き合いしてるんですか!」

花名「ち・・・違!そもそも志温ちゃんは女の子・・・」

たまた「大丈夫ですよ私達祝福しますから。」

美鈴「おめでとく花名ちゃん。」

後ろから冠が花名の背中を叩いた。

冠「ふっ。」

そしてドヤ顔。

花名「その笑顔は何!?!」

優輔「おいお前ら、花名の話を聞けよ。いとこさんは女の人?」

花名「う、うん。志温ちゃんって言うの。」

優輔（志温ちゃん?）

貴之「でも、花名を凄く大事に思ってるからハート型にしたんじゃないかねえのかな?ハートには恋愛以外にも、思いやりの意味も込められてるからな。」

花名「・・・志温ちゃん・・・」

栄依子が水筒に入ってる飲料をコップに注いでた。

たまた「おや?何ですかそれ?」



栄依子「スープ。妹が栄養偏るからって持たせてくれて。」

美鈴「妹ちゃん居るんだ。」

たまた「おお！妹ちゃん優しい！」

栄依子「名付けて・・・妹汁。」

優輔・貴之「ブッ！」

花名「妹汁って・・・せめて妹スープとか・・・」

たまた「それもどうかと思われまますよはなちゃん。」

侑李「新手下ネタ？」

栄依子「うーん・・・妹汁だと妹から分泌された何かっぼく聞こえるけど。」

貴之「何だよ分泌された何かって・・・」

栄依子「妹スープだと妹をそのまま煮込んだみたい聞こえるわね。」

優輔「豚骨スープみたいに言うな・・・」

栄依子「まあまあ。一杯どうぞ。」

たまた「では・・・」

スープを飲んでみる。

たまた「妹汁美味！はなちゃんも一口！」

花名「うん・・・はあ・・・美味しい・・・」

美鈴「私も飲ませて。・・・美味しい〜！」

たまた「栄依子ちゃんはまだ見ぬ妹を感じさせる味わいですね！」

優輔「何だよそれ・・・」

たまた「ではでは妹汁のお返しとして・・・はいあーん。」

栄依子「あーん。」

おかずを栄依子に食べさせた。

栄依子「う〜ん美味しい！流石たま！」

たまた「はなちゃんもどうぞ。」

花名「あ、ありがと・・・わ〜ほんとだ！」

貴之「何だろう、この微笑ましい光景は。」

美鈴「感服ですね〜。」

貴之「鼻血出てるぞ。」

花名「たまちゃん料理上手！」

たまた「えへへ〜、なまら照れますなあ〜。」

優輔「なまらって北海道かよ。」

栄依子「嬉しい〜。実は私ずっと憧れてたのよね。たまの手料理。中学の調理実習の時、何時もたまの居る班から特別良い匂いがしてきたのね。侑李も覚えてる？」

侑李「あ、それ私も覚えてる。」

栄依子「何時かこの子の味見をしたいってずっと思ってたのよ。」

たまた「まうごつ照れますなあ。」

花名「お・・・お料理の話だよね・・・？」

優輔「まうごつって熊本弁かよ。」

たまた「でも栄依子さんの妹さんもすつごくお料理上手じゃないですか！今お幾つな  
んですか？」

栄依子「14歳。今年中3。」

たまた「と言う事は受験生ですか。」

栄依子「そうなのよ。同じ学校に入りたいて言ってるね。」

たまた「おっ！妹汁が後輩汁に！」

栄依子「そうそう後輩汁。」

貴之「何だよ後輩汁って。」

優輔「また新手の下ネタか？」

栄依子「でもね。夜遅くまで勉強してるのに妹汁を毎日作るって聞かないのよ。体調崩さないか心配で・・・」

花名「ほんとだよ！」

突然花名が大声で言った。

栄依子「は、花名？」

花名「今から受験に備えて努力してるのは素晴らしい事だと思えます！でもね！受験にはまず体力！だけど健康でも安心しちや駄目なんだよ！どんな出来事が潜んでるか分からないんだからね！」

栄依子「え・・・？」

花名「その辺り肝に銘じておくように！」

栄依子「は・・・はい。伝えておきます・・・」

侑李「花名いきなりどうしたの？」

花名「ご・・・ごめん・・・」

侑李「大丈夫？」

たまた「いや、はなちゃんの受験に掛ける熱い思いが伝わりましたな。ね。かむちゃん！」

花名「冠ちゃん？」

冠はずつと弁当を食べてる。

たまた「そう言えばさつきから一言も喋ってないのでは？」

栄依子「お食事中のかむは無心なのよね。」

美鈴「へえ〜。」

冠「う・・・」

突然顔が真っ青になった。

花名「あ！喉詰めてる！」

優輔「冠!？」

美鈴「冠ちゃん大丈夫!？」

背中を叩く。

貴之「飲み物を誰か！」

たまた「妹汁！妹汁を〜！」

栄依子・侑李「じゃなくてお水〜！」

その日の夜のアパート。

花名「志温ちゃん。お弁当ありがとう・・・」

志温「いえいえ。美味しかった？」

花名「うん。とつても。でも・・・ごめんなさい！折角ですがお付き合いは出来ませ

ん！」

志温「え……？ええ〜!?」

水曜日。スポーツテストの日。

女子更衣室。

たまた「1日授業無しって最高じゃないですか〜。」

栄依子「週1ぐらいでやってくれても良いのにね。スポーツテスト。」

侑李「それは流石に無理でしょ。」

美鈴「それだったら私干からびるよ〜。」

たまた「そんな頻繁にテストされたら調べ尽されちゃいますよ。」

栄依子「そうね。余す事無くね。」

たまた「いやらしいですな〜。」

侑李「いやらし過ぎるでしょ。」

花名（皆運動が得意な訳じゃないって言ってたよね……私は運動苦手だけど……一

緒に居ても目立たずに済みそうかな……）

男子更衣室。

優輔「スポーツテストかあ。」

貴之「腕が鳴るな。」

優輔「美鈴の奴、中学のスポーツテストで筋肉痛になつてたよな。」

貴之「あゝあつたな。けど女の子を追い掛ける時は痛みすら無いって言つてたな。」

優輔「どんな基準だよ彼奴の体力は。」

スポーツテストテスト。グラウンドで持久走。

花名「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

持久走でビリになつてしまった花名。物凄く疲れ果ててる。

優輔「花名・・・？」

そしてようやく走り切った。

たまた「はなちゃん！大丈夫ですか!？」

花名「だ・・・だい・・・だめ・・・」

たまで「大駄目です！最初に持久走は失敗だったんですかね・・・」

栄依子「この前スポーツテストの話になった時普通って言ってたよね？この状態で普通って言い切ったの逆に凄いなって。」

たまで「ああ。成る程。」

侑李「言えてるかも。」

花名「3人共酷い・・・」

美鈴「花名ちゃん、向こうで休も？」

花名「う、うん・・・」

休憩する。

花名（中学校の頃はそれなりに普通だったんだけどな・・・）

たまで「どうしましたか？」

花名「中学校卒業してから、全然運動してなかったからこんな体力落ちちゃったんだな〜って。」

たまで「そんな一月で落ちちゃいますか？」



花名「あ……だよね！そっだよね！あはは……」  
優輔（……）

ホイッスルの音が聞こえた。

冠「あ。ソフトボール投げ始まる。」

花名がゆっくと立つ。

たまた「立てそうですか？」

美鈴「無理しないでね？」

花名「う、うん……大丈夫……」

すると冠が花名の横に立った。

花名「冠ちゃん？」

冠「掴まって。」

花名「ありがとう……」

肩を貸してくれた。歩き出した瞬間。

花名・冠「わ~~~~!!」

滑って斜面を滑り落ちてしまった。

貴之「花名!?!冠!?!」

美鈴「大丈夫!?!」

ソフトボール投げ。

クラスメイトの椿森幸が投げる。

女子生徒「14mです！」

千尋「去年より伸びてた〜。」

榎並先生「次、十倉。」

次は栄依子の番。力一杯ボールを投げる。

女子生徒「7mです！」

榎並先生「次、佐野。」

栄依子「コントロールが良いのよ私。」

次は優輔の番。

優輔「よつと！」

力一杯投げた。

女子生徒「15mです！」

優輔「こんなもんか。」

榎並先生「次、一之瀬。」

次は花名の番。ボールを投げたが、真上に投げてしまつて、ボールが頭に当たつた。優輔（運動神経悪い芸人かよ・・・）

次は走り幅跳び。

たまた「はい！」

全速力で走り、ジャンプして着地した。

次は貴之の番。

貴之「おっと！」

たまたよりちよつと超えた。

次は花名の番。

花名「あううう・・・」

着地したが、バランスを崩して倒れた。

たまた「大丈夫ですか花名ちゃん？」

真秀「凄ーい！」

周「小さいのに速ーい！」

50m走に速い生徒が居た。

冠だった。俊足で他の生徒を追い抜いた。

美鈴「冠ちゃん速！」

優輔「もう追い越しちゃったよあの子。」

グラウンドの蛇口場。

花名「ううう・・・」

すると横から。

周「ねえ千石さん！今の50m凄かったね！陸上部入らない？仮入部でも良いからさ！あ、まずは見学からでもどう？」

クラスメイトの大谷周あまねから陸上部のスカウトを受けてる冠が居た。

花名（陸上部からスカウトされてる冠ちゃん凄い……！）

周「千石さんのその足は才能だよ！県大会でも良い成績狙えると思うの！ねえ、中学生の時何の部活入ってた？」

冠「あ……あの……」

泣き出してしまった。

冠「え、栄依子……侑李……」

栄依子「はい。」

侑李「来たよー冠ー。」

もう来た。

周「あ、栄依子、侑李。」

侑李「ヤッホー周。」

栄依子「ごめんね。この子すつごく人見知りだから。」

冠「ちよ、ちよつとびつくりしただけ……」

周「ご……ごめんねびつくりさせて……」

真秀「もう周は！いきなり来てわーわー言われたら困るでしょ！」  
クラスメイトの小鹿野真秀が周に注意した。

冠「今日は……栄依子と侑李来てくれた……」

栄依子・侑李「？」

体育館でシャトルラン。

美鈴「もうダメ……」

優輔「いや去年より多く走ったぞ。」

貴之「それで、花名はと言うと……」

花名は疲れ果てながら走ってた。

たまた「はなちやくん！頑張った！よく頑張りましたよ！」

疲れた花名を膝枕で休ませた。

侑李「くっ……！はあ……」

握力を測ってた侑李。

侑李「花名、握力で終わりよ。」

花名「お、終わり・・・」

握力計を持つて力を振り絞って握る。

栄依子「えーと・・・右26。平均だ。」

たまた「やりましたね！普通の成績です！」

花名「普通・・・」

たまた「はい！普通です！」

花名（普通・・・良かった〜！輝かしい普通の成績も残せたとし辛く苦しかったスポーツテストもこれで終わり！今は体が軽〜い。）

すると何かが身体中に走った。

花名（あ・・・）

そして倒れた。

花名「あ……足つった……」

冠「はな？」

栄依子「どうしたの大丈夫？」

たまで「私、保健室で湿布貰って来ます！」

侑李「待つてたま！私も行く！」

湿布を取りに行く。

花名「あ……ありがとうたまちゃん……侑李ちゃん……」

たまで「良いって事ですよ！」

侑李「困った友達を放っておけないしね。」

花名「たまちゃん……侑李ちゃん……優しい……」

たまで「あ！アイスの自販機を発見しました！」

花名「あ、あれ……？」

アイスの自販機を発見した。

たまで「おお！学校内に存在してますよ！アイスの自販機！」



花名「あの・・・湿布・・・」

侑李「私が取って来るよ。待ってて。」

保健室へ向かう侑李。

優輔「アイスの自販機かあ。」

貴之「学校にもあるんだな。」

栄依子「ストロベリーチーズケーキ。」

アイスを購入。

たまた「早く！もう折角学校でアイスが食べられると言うのにく！お2人共情緒がな  
いですね。まず一句詠んでからでも。」

貴之「何で一句？」

美鈴「一句？えつと・・・」

優輔「乗るな。」

花名「いたたたた！」

たまた「またですか！」

栄依子「癖になつてゐるみたいね。」

優輔「腓返りか？」

花名「うん・・・」

侑李「お待たせ花名。湿布貰って来たよ。」

湿布を花名の足に貼る。

侑李「これで大丈夫。」

花名「侑李ちゃんありがとう・・・」

たまた「そう言えばおばあちゃんから聞いたのですが、腓返りはバナナやキウイを食べると良いそうです！」

冠「こむら？」

栄依子「バナナ・・・」

自販機を見ると、バナナチョコミントがあった。

栄依子「バナナチョコミントハワイアンってのがあるけど。」

たまた「それです！」

バナナチョコミントを買って、花名に食べさせる。

たまた「ささ。ぐいっとどうぞ。良えんやで。」

花名「え？あ、うん・・・」

バナナチョコミントを食べる。

たまた「どうですか？治りましたか？」

花名「たまちゃん・・・バナナが良いってこう言う事じゃないと思う・・・」

たまた「何と。」

花名（後これ不味い・・・）

榎並先生「うわ。もうこれ見付けたのか。」

優輔「榎並先生。」

榎並先生「凄いな。お前らアリか？」

栄依子「アリって・・・」

美鈴「私はバイオリン弾いてます。」

優輔・貴之「アリとキリギリスか。」

榎並先生「何見てんだよ。」

栄依子「先生は何買うのになくって。」

たまた「大人だからラムレーズンとかですか？」

侑李「何買うのく先生？」

榎並先生「増えたよ・・・何でも良いだろ別に。」

バナナチョコミントを買った。

栄依子「！」

たまた「！」

侑李「！」

花名「！」

美鈴「！」

優輔「！」

貴之「！」

冠「ペろ。」

榎並先生「さっさと食って帰れよ？」

7人「はくい。」

たまた「バナナチョコミントハワイアンを買って行きましたね。」

栄依子「先生も足つつてるのかしらね・・・」

侑李「それは無いでしょ流星に。花名、足は治った？」

花名「あ・・・うん。もう大丈夫。」

たまた「それは早速バナナ効果がく！それでは午後のスポーツテスト張り切ってやり

ましょー！」

花名「まだやるの!？」

優輔「待って待てたま。さつき先生が食って帰れよって言われただろ？」

たまた「あれ？」

その後全員着替えた。

下駄箱。

花名「もく。たまちゃんの嘘付きく。」

たまた「あはは。午前で終了でしたねく。」

花名「たまちゃんったら、酷いなく。」

美鈴「何で笑顔で言ってるの？」

そこに遅れた冠が来た。

栄依子「かむ。遅かったじゃない。」

冠「お待たせ。」

たまた「はっ! かむちゃん生足じゃないですか!？」

何と冠が生足になってた。

冠 「ん。もう帰るだけだし。」

優輔 「まさかの生足・・・」

貴之 「おいおい・・・」

たまた 「良いですね生足！新鮮で！」

美鈴 「生足の冠ちゃん、良いね！」

栄依子 「何でそんなテンション上がってるの・・・？」

たまた 「え！分かりませんか!? 普段タイツの子が生足になってる！そのギャップが良  
いんですよ！」

美鈴 「皆も分かるでしょ？」

栄依子 「うくん・・・ごめん分かんない。」

侑李 「私も分かんない。」

優輔 「分からなくも無いが・・・」

貴之 「分かりたくない。」

たまた 「例えばですよ？私<sup>が</sup>普段から全裸で生活している裸族だと仮定しましょう！  
それがある日突然制服を着たら!? そのギャップに興奮しませんか!?!」

栄依子 「いや・・・理解から更に遠のいた。」

優輔 「何で裸族なんだよ。」

貴之「普段から裸族ってアカンだろ。」

たまた「はなちゃん分かりませんか？」

しかし花名は笑顔のままだった。

たまた「あ、ダメだこの人。」

冠「たまたの裸には興奮しないって話？」

たまた「そんな話でしたっけ？」

栄依子「ほら裸でも生足でも良いから帰りましょ。」

侑李「ダメでしょ。」

優輔「自転車取りに行かなきゃ。」

たまた「生足ー!!」

その日の夜のアパート。花名は笑いながら晩御飯を食べてる。

志温「・・・美味しい？」

花名「んふふふ。」

志温「おかわりいる？」

花名 「んふふふ。」

志温 「学校で何か楽しい事でもあったの？良かったわね。」

花名 「んふふふ。」

志温 「そう言えば明日はお弁当いるのよね？」

花名 「あ・・・それなんだけど志温ちゃん。」

志温 「大丈夫。お友達に誤解されないようにしとくから。」

花名 「ごめんね志温ちゃん・・・」

志温 「良いのよ。はなちゃんが面倒臭いのはこの1年で分かっているから。」

花名 「・・・」

毒舌発言された。

翌日の昼。花名がギクシャクしながら中庭に来た。

たまたま「お茶を運ぶからくり人形さんの趣がありますね。」

冠 「風流。」

優輔 「筋肉痛か？」



花名「うん・・・全身筋肉痛で・・・春休みの間に体鈍ってて・・・」

栄依子「一体どれだけ自堕落な春休みを過ごしたらそんな事に・・・」

たまた「まあまあ。いとこさんの愛妻弁当でも食べて元気出しましょう！」

花名「だからそんなじゃないって・・・」

弁当の蓋を開けると。

たまた「栄依子「っ!!」

ハート形のおかずにはビビが入ってた。

たまた「栄依子「は・・・破局!?!」

花名「し・・・志温ちやうん！」

優輔「面白いところさんだね。」

貴之「個性ありそうだな。」

「  
E  
N  
D  
」

## STEP 3 「なみだのぼろぼろ」

後日の学校。

たまた「ゴールデーン・・・ウイंक！」

優輔「たま、テンション高いな。」

たまた「はい！連休超楽しみですね。はなちゃんは何か予定とかがありますか？」

花名「私は志温ちゃんと毎朝ジョギングを・・・」

たまた「う！そうですか・・・」

栄依子「ああ、走るの良いかも。はなの体力の無さは何て言うかこう・・・」

冠「言葉にならない。」

花名「そんなレベル!？」

侑李「まあ、冠の言葉に一理ある、かも？」

花名「そんな！」

たまた「かむちゃんは連休何してるんですか？」

冠「ピアノの発表会。決まってるのはそれくらい。」

栄依子「え！そうなの？見たかったなくかむのピアノ。」

花名・たまで・美鈴「私も！」

冠「え・・・じゃあ・・・次は・・・誘う・・・」

美鈴「弱気になってる冠ちゃん可愛い。」

貴之「止めろ美鈴。」

たまで「栄依子ちゃんは、やっぱデートですか？」

栄依子「何よやっぱりって。普通に皆と遊ぶだけ。ほら。」

予定のメモを見せた。

貴之「相手は全員女子ばかり・・・」

たまで「ハーレムルート攻略チャート見たいですね・・・」

栄依子「なあにそれ？」

たまで「選択肢を一つ間違えると刺される奴です！」

栄依子「ええ・・・何それ怖い・・・」

優輔「スケジュールめっちゃあるな。芸能人かよ。」

侑李「何時もの栄依子ね。」

優輔「何時もなのか？」

侑李「うん。」

里香乃「栄依子」。1組の子が呼んでるよ。」

クラスメイトの佐藤里香乃が栄依子を呼んだ。

栄依子「おお本当？ありがと〜！ちよつと失礼。」

呼ばれた栄依子が行った。

たまた「栄依子ちゃんつてば、もう別の組の子に手を出してるじゃないですか〜！」

侑李「あ、私ちよつとお手洗い行つて来る。」

優輔「ああ。」

お手洗いに向かった侑李。

すると冠が元気を無くした。

優輔「冠？どうかした？」

貴之「リボンが悄気てる？」

花名「冠ちゃんつて他にも習い事してるの？」

冠「え！い・・・色々・・・」

たまた「乗馬とかですか!？」

冠「う、うん・・・」

たまた「マジですか！あくお嬢様っぽいですな〜。」

美鈴「他に何かやってるの？」

冠「・・・マリンバ。」

花名・たまたまて・優輔・貴之・美鈴「マリンバ!？」

優輔「マリンバとは、凄いな。」

花名・たまたまて・美鈴「可愛い〜！」

花名（まだあまり気を許してくれてないのかな・・・つてちよつと寂しい気もするけど榮依子ちゃんと侑李ちゃんが居ない時の冠ちゃん可愛い!）

榮依子「ただいま〜。」

そこに榮依子が戻って来た。

冠「おかえり榮依子！」

榮依子「はいはい。」

戻って来た榮依子に抱き付いた。

花名（あ、戻った。）

侑李「ただいま。」

すると今度は侑李に抱き付いた。

冠「侑李おかえり！」

侑李「ただいま冠。」

花名「栄依子ちゃんと侑李ちゃんと冠ちゃんって仲良しだよね。小学校の時からずっと一緒なの？」

栄依子「ううん。小学校も中学校も違う所。」

花名・たまたま・優輔・貴之・美鈴「え!?!」

栄依子「小6の時に何日か遊んだぐらいよね？」

冠「うん。」

侑李「栄依子覚えてるね。」

冠の顎を撫でる。

たまたま「それでこの懐き様ですか。」

優輔「人懐っこい猫みたいだな。」

たまたま「流石ハーレムルート爆進中の人は違いますね。」

栄依子「だから何なのよそれは。」

貴之「たまたまがゲーム脳に支配されてる。」

美鈴「栄依子ちゃんのハーレムルート見てみたいなく。」

栄依子「え〜?」

花名「そう言えば、たまちゃんはゴールデンウィーク何してるの?」

たまたま「私は! イベントに行ったり、絵画を鑑賞したり、本を買ったり、遠方の友人

とお会いしたり〜！」

花名「盛り沢山だね。」

たまた「まあ、人によってはこれ全部同じなんですけどね。」

花名・栄依子・冠・侑李・優輔・貴之・美鈴「同じ？」

優輔・貴之（コミケかな？）

たまた「侑李ちゃんはゴールデーンウィークは何してるんですか？」

侑李「私は図書館や本屋へ行って本を読んです。本を読んでする時が一番落ち着く。」

たまた「文学少女ですね！」

侑李「ええ、まあ。」

栄依子「優輔は何してるの？」

優輔「俺は自転車でサイクリングしてる。たまに姉ちゃんと一緒にやってる。」

栄依子「へえ〜。お姉さん居るんだ。貴之は？」

貴之「ゲーセン行ったり、ゲームやったり、ゲーム買ったりの連続だな。」

侑李「お金尽きるわよ？美鈴は？」

美鈴「私は〜、家では恋愛ゲームやったり、散歩しながら可愛い女の子を見てるの。」

侑李「それ、下手したら捕まるんじゃない？」

花名（そっか、皆忙しいんだ・・・）



たまた「あ！連休の最終日は空いてるんです！遊びませんか！皆で！」

栄依子「あ、私も空いてる。」

冠「空いてる。」

侑李「私も空いてるよ。」

優輔「俺も空いてる。」

貴之「空いてるぞ。」

美鈴「私も空いてる！」

花名「わ・・・私も大丈夫！」

たまた「気が合いますな。流石我らソウルフード！」

栄依子・侑李「メイトね。」

たまた「はてさて、何して遊びましょうか！」

栄依子「ああ、遊ぶって言うか・・・勉強会しない？」

たまた「ベ・・・勉強会！何故ですか！」

栄依子「ほら、連休明けに実力テストあるじゃない。」

優輔「そっか。実力テストあんのか。」

美鈴「テスト嫌だなく・・・」

たまた「うう・・・でも最終日ですよー！ゴールデンウィークと笑ってさよならした

いじゃないですか！ね！はなちゃん！」

花名 「私勉強会でも良いよ。皆と会えるの嬉しい！」

栄依子 「たまの負け。」

花名 「何処で勉強するの？図書館とか？」

栄依子 「御迷惑で無かったら、はなのお家行ってみたくなくて。」

花名 「え？」

たまた 「行きたい！行きたいですはなちゃん家！」

栄依子 「ほら、たまり場にして良いって言ってたし。」

たまた 「私が居れば、たまた場なんですけどね。」

冠 「置き菓子しても良いって。」

美鈴 「私も行ってみたいなく！」

貴之 「迷惑じゃなかったら、俺達も行っても良いか？」

栄依子 「勿論無理だったら・・・」

花名 「ウ・・・ウエルカムだよ！」

優輔 「良い発音。」

栄依子 「え、本当に良いの・・・？」

花名 「歓迎って事だよ！」

栄依子「うん。意味は分かっているから大丈夫よ。」

たまた「楽しみですな。」

栄依子「ね。」

たまた「因みにたまたま場は渾身のボケなんですけど……」

花名（私の部屋にお友達が……）

その日の夜。

志温「え？お友達が？」

花名「うん。7人で遊びに来るって。」

志温「あら。あらあら。楽しみね。」

花名「うん。」

志温「あ、でも私連休の最終日は実家に戻るのよ……」

花名「あ、そっか……」

志温「こんな事なら別の日にすれば良かったわ。そうだわ！アパートの改装とか業者さんをお願いした方が良いかしら？」

花名「流石に間に合わないよ！」

志温「あ、そ、そうよね。じゃあ大掃除を。」

花名「大丈夫だよ・・・」

志温「急に忙しくなってきたわね。花名ちゃん。」

花名「えへへ。うん！」

ゴールドーンウィーク初日。花名と志温がジヨギングをしていた。

志温「うくん・・・良いお天気。ジヨギング日和ね花名ちゃん。」

しかし花名はバテていた

志温「花名ちゃん!？」

ベンチで休憩。

志温「葉月さんに花名ちゃんの事任されたのに・・・花名ちゃんはとんだもやしっ子

に・・・！」

花名「もやし!」

志温「せめてもの償いに、花名ちゃんがムキムキになるまで鍛え上げるわよ! 目指せ腹筋16分割!」

花名「やり過ぎだよ気持ち悪いよ!」

???「あれ? 志温じゃない。」

志温「え?」

花名「ん?」

そこにロードバイクに跨ってる女性が志温を呼んだ。

志温「麻衣子ちゃん!」

麻衣子「今日はどうしたの? ジョギング?」

志温「うん。花名ちゃんを鍛え上げる為にね。」

麻衣子「花名ちゃん? あの子?」

花名「は、はい。初めまして・・・」

麻衣子「あなたが花名ちゃんかあ。弟から話は聞いてるわ。」

花名「弟?」

そこにロードバイクに乗ってる人物が停車した。

???「姉ちゃん速過ぎだったの。」

麻衣子「ごめんごめん。」

花名「優輔君！」

優輔「ん？花名！」

志温「優輔君！」

優輔「志温さん！」

志温「久しぶり〜！また会えて嬉しいわ〜！あら？また格好良くなったの？」

優輔「いや、前と変わらねえよ。」

花名「え？優輔君、志温ちゃんと知り合いなの？」

優輔「ああ。志温さんは俺の姉ちゃんと大学時代の同級生なんだ。姉ちゃん、花名に紹介して。」

麻衣子「ええ。初めまして一之瀬花名ちゃん。優輔の姉の麻衣子です。」

この女性は優輔の姉の「佐野麻衣子」である。

花名「は、初めまして！い、一之瀬花名です！」

志温「麻衣子ちゃん、仕事は順調？」

麻衣子「ええ。もうお客さんがいっぱいで大変だよ。」

花名「お客さん？」

麻衣子「私、実家の飲食店で看板娘をやってるの。」

花名「あ、そう言えば優輔の自己紹介の時に言ってたよね。」

優輔「ああ。でも姉ちゃん、看板娘で良いのか？」

麻衣子「だってうちの飲食店、お爺ちゃんとお婆ちゃんが建てたものだから。私を小さい時から可愛がってくれたお爺ちゃんとお婆ちゃんの恩返しをしようと思ったから看板娘になったの。」

花名「優輔君も、実家で働いてるの？」

優輔「いや、暇な時だけ働いてる。」

花名「え？」

優輔「俺と姉ちゃん、家族から「家の事よりも、好きな事をやっても良い」って言われてるんだ。」

花名「へえ。そうなんだ。」

麻衣子「さて、自己紹介と対面も済んだ事だし、優輔、お先ー！」

ロードバイクに跨って、全速力で漕いだ。

優輔「速えよ姉ちゃん！じゃあ花名、志温さん、また会おうぜ。おい待てよ姉ちゃん！」

ロードバイクで姉を追い掛ける。

花名「凄いな、優輔君……」

志温「私達も麻衣子ちゃんと優輔君に負けないようにしないとね！」

花名「え!？」

志温「と言う訳で後5周行くわよ。レッツドーン！」

スピードアップで走る。

花名「ま……待って……」

その頃榮依子は、クラスメイトの佐々木陽菜と一緒にショッピングモールのカフェに来ていた。

陽菜「この限定ぬいぐるみどうしても欲しかったのよ。付き合わせてごめんね。」

榮依子「ううん。全然。陽菜の嬉しそうな顔見てるだけで楽しいもの。」

陽菜「榮依子……」



栄依子「……って早く突っ込んでよ。」

陽菜「ああ冗談なのか。栄依子だから本気で言ってるのかと。そう言えば、こう言う飲み物ってストローが2本挿さってるじゃない？カップルで飲むものかと思っただけどこれって……」

すると栄依子が片方のストローでジュースを飲んだ。

陽菜「え？」

栄依子「この為じゃないの？」

陽菜「素なのか狙ってるのか、本当に分からないから……」

その頃侑李は、図書館で読書をしていた。

侑李「……」

黙々と読書を続ける。

30分後。

侑李「つ。もう30分経ったのかあ。次は本屋へ行こうつと。」

その頃貴之は、ゲーセンでリズムゲームをやっていた。

貴之「よっ！ほっ！はっ！」

フルコンボでクリア。

貴之「よっしや。今日も順調だな。次はアーケードをやるか。」

その頃美鈴は、家で恋愛ゲームをやっていた。

美鈴「この子も良いなく。あ、この子も結構可愛いかも。んく…迷うなく。…  
決めた！この子に決定！」

その頃冠は、家の部屋で寝ていた。彼女の家は豪邸だった。

冠「ん・・・」

目が覚めた。時間を見ると、午後2時になっていた。

冠「朝ごはん。後お昼ご飯。」

朝食と昼食のセットが来た。

冠「いただきます。」

夕方。ようやく全部食べ終えた。

冠「ごちそうさまでした。ん？まだあった。」

残ってた人参を食べた。

冠「ままならない。」

その頃たまたまは、コミケに居た。

たまた「イベントに行ったり、絵画を鑑賞したり、本を買ったり、遠方の友人とお会いしたり。」

東京ビッグサイトから出た。

たまた「重い・・・疲れた・・・でもサイコー！」

後日のアパート。花名は時間を見ていた。すると。

“ピンポン”

インターホンが鳴った。

ドアを開けると。

葉月「来たわよ。」

両親が来た。

花名「お父さんお母さん！」

志温「葉月さん！葉月さんがいらつしやるのを、花名ちゃんと一日千秋の想いでお待ちしていたんです！」

葉月「あはは。此間来たばかりじゃない。」

健「いやあ、相変わらず志温ちゃんも母ちゃんの事大好きだなく。」

花名「本当だね。」

リビング。葉月がお茶を飲む。

葉月「あら？このお茶・・・」

志温「気付かれました!?葉月さんがお気に入りだと言っていた茶葉を見付けたので！」

葉月「ありがと〜！美味しいわ。」

健「いやあちよつと見ない内にすつかり伸び・・・てないな。」

花名「そんな・・・いきなり育つたりしないよ。」

健「父さんは成長したぞ。4キロ太った！」

花名「太るのは成長と違います・・・」

健「あはは！いやあ母さんがな。ご飯を3人分作る癖が中々抜けなくて。ま、花名が

帰って来る頃には、2人分作る癖が染み付いちやってるかも知れないけどな。」

花名「え！私のご飯無いの!？」

葉月「大丈夫よ。減るのはお父さんの分だから。」

花名「え〜！」

健「太った分痩せないとな。」

花名「お父さんはそれで良いの!？」

葉月「くすつ。」

花名「お母さん・・・？」

葉月「花名、ちよつと元気になったわよね。安心した。」

花名「あ・・・うん！」

その後4人でお茶とロールケーキをいただいた。

葉月「お母さんも会ってみたかったな。花名の友達に。」

花名「うん！私も会ってほしいな。7人共凄く優しくしてそれに面白くてね。一緒にいてほんとに楽しいの！それでね。皆が来ると思うと嬉しくなっちゃって・・・つい志温ちゃんとかんなものを・・・」

飾りを作ったのだった。

葉月「あら良いじゃない！花名の部屋殺風景だもんね。」

花名「うつ・・（お父さんとお母さんが帰る日は何時も凄く寂しかったのに今日は少し違う！だって明日は皆が家に遊びに来てくれるから！）」

ゴールデンウィーク最終日。花名が軽井沢駅で待つてると。

優輔「花名、おはよう。」

貴之「おはよう花名。」

美鈴「花名ちゃんヤッホー！」

優輔達3人が来た。

花名「み、皆おはよう。」

貴之「たまた達は？」

花名「まだ。」

美鈴「そっか。もう私、花名ちゃんの顔を見ると安心しちやったわ。もぎゅ。」  
急に抱き締めた。

花名「み、美鈴ちゃん!？」

美鈴「んく。やつぱり花名柔らかかい!」

優輔・貴之「止めんかい。」

引き剥がした。

美鈴「あうう・・・」

優輔「ごめんな花名。」

花名「う、ううん大丈夫。」

たまで「はなちゃん!」

花名「た、たまちゃんおはよう!」

たまで「おはですよ!」

優輔「たま。おはよう。」

貴之「おはようたま。」

美鈴「ヤッホーたまちゃん!」

たまで「優輔君! 貴之君! 美鈴ちゃん! おはですよ! はなちゃん、本日はお呼ばれ  
ありがとうございます!」

花名「こ、こちらこそ。」

たまで「はなちゃんってば、ちよつと見ない間にシュツとしたような? ジョギング効



果ですかね。」

花名「そんないきなり痩せたりしないよ……」

たまた「今朝も走ったんですよね？」

花名「……」

何も言わない花名。

たまた「走ったんですよね？」

花名「……」

するとたまたが、花名の頬を弄った。

たまた「走ったんですよね？」

花名「あー！！」

美鈴「ダメだよたまちゃん！独り占めはダメだよ！私も頬触らせて！」

優輔・貴之「おい！」

するとそこに。

栄依子「はな。たま。」

残りの3人が来た。

冠「はなれたまえ。」

たまと美鈴を花名から引き剥がした。

貴之「見事な使い方。」

栄依子「おはー。」

侑李「おつはー。」

冠「おはよ。」

花名「冠ちゃん、その荷物は・・・」

背負ってる荷物を見て疑問を抱いた。

優輔「風呂敷？」

冠「置き菓子。」

栄依子「ほら。リスって冬に向けて食べ物を溜め込むでしょ？あれと同じ。」

優輔「つまり冠はリスと同じって言いたいのか？」

たまと「小動物ですなあ。」

花名「小動物？」

8人は花名の家へ向かう。

たまた「今日は従姉さんにもお会い出来ますかね？」

花名「あ……志温ちゃんは昨日から実家の方に帰ってて。」

優輔「実家に？」

たまた「あいやく、そうなんですか……」

栄依子「会つてみたかったわね……お土産持つて来たんだけど、従姉さんに渡すのお願いしても良いかしら？」

花名「あ……うん！ありがとう栄依子ちゃん！」

栄依子「お菓子だから、2人で食べてね。」

たまた「相変わらずフラグ立てに余念がありませんね。」

栄依子「だから何なのよそれは……」

たまた「デュフフ……いや〜楽しみですね〜はなちゃんと従姉さんの愛のす……つ  
！」

花名「巢窟!？」

貴之「おいおいたま……」

アパートに到着。玄関に飾りがあった。

栄依子「これは・・・」

花名「ああ。そ、それはね、ちよつと大袈裟かなって思ったんだけど・・・折角作つたから。」

栄依子「可愛いなくもう。」

たまた「ほんなこつ〜！」

冠「なこつ！」

侑李「なこつ？」

花名「ど、どうぞ。何も無いですけど・・・」

部屋に招かれた。

たまた「お邪魔します！ああ・・・」

冠「本当に何も無い。」

侑李「さっぱりしてるわね。」

栄依子「まだ引つ越して来たばかりだものね。」

花名「う・・・うん。そうなんだく・・・」

たまた「やや！炊飯器も無いじゃないですか〜！」

花名「うん。ごはんは志温ちゃんの一部屋で食べさせてもらってるから。」

栄依子「じゃあ一人の時は何してるの？」

花名「えつと・・・勉強かな。」

美鈴「勉強!？」

たまた「えええ!?!勉強を!?!自主的に!?!偉人ですか!?!」

栄依子「偉いわね〜。」

侑李「感心しちゃうなく。」

花名「そ、そんな事無いよ・・・勉強くらいしかする事無いだけで・・・」

たまた「じゃあ、今日は勉強の事などすっかり忘れて浮かれるとしますか!？」

栄依子・侑李「いやするからね。お勉強。」

たまた「優等生か!そんなの栄依子ちゃんと侑李ちゃんじゃないですよ!」

栄依子「優等生じゃないからこんなギリギリになつて困ってるんですよ。」

冠「でも勉強の前に一つ。栄依子。侑李。」

侑李「ええ。」

栄依子「はいはい。優輔、貴之、美鈴。」

優輔・貴之「おつす。」

美鈴「OK。」

“ パアン ” “ パアン ” “ パアン ” “ パアン ” “ パアン ” “ パアン ” “ パアン ”

突然花名とたまたまを除いた6人がクラツカーを鳴らした。

たまたま「え？」

花名「え？」

栄依子「はな。たま。お誕生日。」

冠「おめでとう。」

花名「え？えええ!？」

たまたま「私とはなちゃんのですか!？」

栄依子「ふふくん。たまは今月が誕生日でしょ？で、はなは入学式の日が誕生日だったから今日がその中間日って事で。」

優輔「栄依子と冠と侑李が企画してたんだ。」

冠「勉強会の前にお誕生日会。ケーキある。」

たまた「ケーキ！アイテムまで使用されては好感度爆上がり必至じゃないですか！もく愛してる〜！」

嬉しくなつたたまたが冠を抱いた。

冠「落ちたな。」

貴之「落ちた。」

たまた「ぐぬぬ・・・こつちも皆さんのお誕生日イベント利用させてもらいますよ！何時ですか？何時です！」

栄依子「私は6月20日ね。」

冠「10月30日。」

侑李「私は7月1日。」

優輔「俺は2月18日。」

貴之「5月2日だ。」

美鈴「11月2日だよ。」

たまた「ぼつちり記憶しましたとも！8月5日と12月15日と9月4日と4月16日と7月27日と1月22日ですわね！」

優輔「全部覚え。」

栄依子「1個も合っていないわね・・・」

2人にプレゼントを渡した。

栄依子「はいおめでとう。」

冠「ハピバ。」

優輔「ハッピーバースデー。」

たまた「おお！ありがとうございます！」

栄依子「はなにはちゃんとした物渡せてなかったからね。」

冠「リベンジ。」

花名「ありがとう！栄依子ちゃん冠ちゃん侑李ちゃん。優輔君も貴之君も美鈴ちゃんもありがとく！」

たまた「えへへ・・・同い年ですわねはなちゃん。」

花名「あ・・・同い年・・・」



すると花名が涙を流した。

たまた「はな、ちゃん？」

貴之「花名？泣いてるのか？」

花名「あれ・・・あれ・・・変なの・・・ごめんね・・・ありがとう・・・ありがとう  
う・・・」

たまた「はなちゃん・・・」

栄依子「はな・・・」

侑李「花名・・・」

貴之「花名・・・」

美鈴「花名ちゃん・・・」

冠「花名。」

ハンカチをあげた。

花名「ありがとう冠ちゃん・・・」

美鈴「花名ちゃん、大丈夫？」

優しく抱いて慰める。

たまた「泣くほど嬉しいプレゼントなんですから開けてみましょう！」

花名「うん！」

プレゼントを開けると。

たまた「わあ〜！」

花名「可愛い〜！」

ピンク色と茶色のくまのぬいぐるみだった。リボン付き。

栄依子「私達から1つずつ、お2人に。」

たまた「ありがとうございます！・・・愛する2人を引き離す感ありますが・・・」

花名「な、何か可哀想だね・・・」

たまた「そうだ！この子達はなちゃんのお部屋に置いてもらえませんか？」

花名「え？う、うん。良いけど・・・良いの？」

たまた「はい！時々見に来ても良いですか？」

花名「うん！勿論！」

栄依子「お。今のがフラグって奴？」

たまた「お！栄依子ちゃん分かってきましたね。」

冠「ケーキ食べよう。」

たまた「うひゃ〜！待ってました！」

美鈴「ケーキキター！」

使わない紙を皿代わりにした。

優輔「これは……」

貴之「何と言うか……」

栄依子「うくん……何だか微妙に残念な感じになったわね……」

花名「ご、ごめんね……うちお皿なくて。志温ちゃんが居ないから借りる事も出来なくて……」

冠「大丈夫。何処に居てもケーキはケーキ。」

美鈴「そうだね冠ちゃん。」

たまた「ではでは！満を持して！」

8人「いただきます！」

ケーキを食べる。

たまた「かむちやんの仰る通りお皿がアレでもケーキはケーキ！檻を纏えど心は錦とはこの事ですな〜！」

花名「違うんじゃないかな・・・」

侑李「美味しい〜。」

優輔「あ〜ケーキ良いね〜。」

貴之「美味いな〜。」

美鈴「甘〜い！」

栄依子「かむ、一口。」

冠「ん。」

いちごを栄依子に食べさせた。

たまた「丸ごと!？」

栄依子「う〜ん美味しい。じゃあ私からもお返し。」

ケーキをあげる。

たまた「苺の対価でか！」

花名「苺凄いな〜。」

侑李「栄依子は相変わらずね。」

ケーキを食べ終えた。

栄依子「これ食べ終わったら勉強だからね。」

優輔・貴之「おう。」

たまた「ぐ！どうして・・・どうして幸せなままでいさせてくれないんですか〜！」

栄依子「そうすると明日確実に不幸になるからかしら。」

侑李「明日に不幸を運んじやいけないからね。」

美鈴「上手い事言ったね侑李ちゃん！」

優輔・貴之「何処が？」

勉強会。

たまた「はなちゃん本当にしこたま勉強出来る人じゃないですか〜！」

栄依子「教え方も上手だし。」

花名「そ、そんな事無いよ・・・」

栄依子「ね、この問題教えてもらっても良い？」

侑李 「ここも教えてくれるかしら？」

美鈴 「花名ちゃん、ここ教えてくれる？」

たまた 「順番決めましょう！ 順番！」

冠 「この公式って・・・」

たまた 「あ！ 抜け駆け！ 抜け駆け禁止ですよ？」

花名（ずっと何も無い部屋に引き籠もって、何もする事無いから勉強だけしてて良かった。）

優輔 「花名人気者だな。」

貴之 「だな。」

栄依子 「あ、ちよつとごめん。はな、お手洗はお借りして良い？」

侑李 「私も借りても良いかしら？」

花名 「うん。どうぞ。」

トイレに行った栄依子と侑李。2人が居ない間、花名とたまたと美鈴が冠に質問をする。

花名 「冠ちゃん。何処が分からないの？」

たまた 「かむちゃんが一番最初で良いんですよ！ さあさあ！」

美鈴 「分からない所があったら、私達に言ってみてね？」

優輔「おい止めろ。」

貴之「冠が可哀想だろ？」

冠「と……問7の……公式の……」

花名「公式！公式が分からないの？」

冠「う……」

すると冠が逃げた。

花名「冠ちゃん！」

逃げる冠をたまためと美鈴が追い掛ける。

たまため「かむちゃん！どうしたんでちゆかく？怖くないでちゆよく。デュフフフ

！」

美鈴「デュフフフ！」

貴之「おいそのデュフフは止めろ！」

たまため「はい！はなちゃんもご一緒に！」

花名「え？で、でゆふふ……」

優輔「止めろ美鈴。」

貴之「冠を怖がらすな。」

冠を追い掛ける美鈴を引っ張る。

美鈴 「冠ちゃーん！」

すると栄依子と侑李が戻って来た。たまたが栄依子にぶつかって尻餅付いた。栄依子 「こーら。あまり怖がらせないの。」

侑李 「冠、大丈夫？」

たまた 「ちえっ！彼氏連れかよ！行こうぜはなっちー。」

栄依子 「チンピラか君ら……」

美鈴 「冠ちゃん……」

優輔 「諦めろ。」

貴之 「ほら、勉強会の続きやるぞ。」

美鈴 「ふえくん……」

その後8人で勉強会をやる。

外は夕方になった。優輔と貴之と美鈴は帰って行った。



軽井沢駅。

たまで「はなちゃん先生！ありがとうございます！ありがとうございました！」

花名「え？」

栄依子・冠・侑李「先生、ありがとうございますございました。」

花名「い、いはいえそんなそんな・・・」

栄依子「また勉強教えてくれる？」

花名「私なんかで良いければ何時でも。」

冠「勉強じゃなくても、また来て良い？」

花名「も・・・勿論だよ！」

侑李「冠置き菓子したもんね。」

たまで「それじゃあまた明日〜！」

花名「うん！また明日！」

冠「置き菓子にも宜しく。」

見送った後、アパートに戻り、飾りを片付けると。

花名「あ。」

飾りの中に1つの小箱があった。箱を開けると。

花名「わ〜！綺麗〜！」

スノードームだった。

花名「お母さん・・・」

スノードームの他に、葉月からのメッセージが入ってた。

部屋に入って、くまのぬいぐるみとスノードームを並べる。

花名「よし。良い角度。」

携帯で写真を撮った。この日は花名の最高の1日となった。

「END」

## STEP 4 「2階のプレミア大会」

荷物を持って、万年さんの部屋の前に立つ。

花名「んぐ……えい！」

インターホンを鳴らした。

??? 『はい。』

花名「あ……あの……管理人の者ですが、不在時にお預かりしてた宅配便をお渡しに参りました、です！（お、可笑しくなかったよね？）」

するとドアが開いた。ドアの隙間から髪が黒い女性が顔を出した。

??? 「誰？」

花名「か……管理人の者です！」

??? 「違う。ここの管理人はもつとどーんとした人だ。」

志温の事を言ってる。

花名「あ……あのでも私管理人の……」

??? 「どーんの前の管理人はしゅつとしたおじさんだった。謀ろうとしたもお見通しだぞ貴様ー!!」

花名（た・・・助けて志温ちゃん・・・）

その後。

志温「改めて紹介するわね。こちらは万年さん。」

女性の名前は万年<sup>はんねん</sup>。2階に住んでる住人である。

志温「こちらは私の従妹の花名ちゃん。」

万年「ど、どうも。」

花名「よ、宜しくお願いします！」

志温「ごめんなさいね万年さん。荷物の事すっかり忘れてて。」

万年「あ・・・いえこちらこそ度々すいません。本当に。」

志温「お詫びと言ってはなんだけど、唐揚げ沢山食べていつてね。」

万年「いえ私は・・・」

唐揚げをご馳走する事になった。

志温「万年さんは去年高校を卒業して、受験の為にこちらで一人暮らしされて居てね。」

それで今は・・・今年も受験生で良いのよね？」

万年「ああ！全部落ちたからな！今年もな！」

花名「(そつか・・・はんねんさんも浪人なんだ・・・)あの・・・さつきはすいませ  
ん。私上手く説明出来なくて・・・」

万年「あ・・・いや私もいきなり怒鳴り付けてすまなかつた。」

志温「良かったわ！これで仲直りね！」

万年「いや、仲直りする程の仲でも・・・」

志温「折角ご縁があつて同じアパートで生活してるんだから、これからも仲良くしま  
しようね。ほら。握手握手。」

万年「いや、そんなの管理人さんに決められても・・・」

志温「あくくくしゅ。」

万年「じゃ・・・じゃあ一応な・・・」

花名「はい・・・」

志温(あ・・・万年さん震えてる。花名ちゃんも。そして・・・今！震えが二乗に！)

後日のアパート。花名が皆に告白をする。

花名「あ・・・あのね・・・実は私・・・浪人してるの・・・」

たまたま・栄依子・冠・侑李・美鈴・優輔・貴之「だからかく。すると花名を除いた全員が傘を差した。」

栄依子「浪人だからこんな傘張りが上手なのね。」

花名「あ、あれ？あれれ？」

何時の間にか着物を着ていた。

冠「草履編みも上手。」

花名「わ・・・私にそんな力があつたなんて・・・」

たまたま「流石浪人経験のある日とは違いますね。」

栄依子「浪人って素敵ね。」

冠「ジバ浪人。」

美鈴「浪人最高！」

侑李「花名流石ね。」

花名「皆・・・浪人は無駄じゃなかったんだね・・・ありがとう皆！」

と言う夢を見た花名。目覚ましの音を聞いて起きた。  
花名（もの凄く都合の良い夢を見てしまった・・・）

星尾高校。

榎並先生「6月の球技大会、どの競技に出たいか考えとけよー。週明けには決めるかな。」

生徒達「はい。」

たまた「球技と言えば球！球と言えば、即ち私たまちやん！マスコットキャラクターとしてちやほやされる覚悟は出来ておりますよ！さあさあ〜！」

榎並先生「良いから座ってろ。」

たまた「はいっす〜。」

生徒達が笑う。

花名「あ。」

すると花名は、万年の名前を思い出す。

花名「はんねん・・・たいかい・・・」

貴之「優輔、お前何処に出たい？」

優輔「俺？ドツジボールだな。貴之は？」

貴之「俺はソフトボールだな。」

その後のアパート。

花名「えいつ！」

インターホンを鳴らした。

万年『はい。』

花名「あ、あの、お預かりしてた荷物お届けに来ました。」

万年『ええ！あ！ちよつと待っててくれ！』

ドアから万年が出て来た。

万年「すまない・・・こんな大荷物を・・・」

花名「あ、でもこれ軽い・・・」

勢いよく持ち上げた万年が、後ろに転んだ。



花名「は、万年さん!」

部屋にお邪魔した。

花名「ここに置いておきますね。」

万年「すまないな。荷物運びさせてもらって……ずっと家にいる癖にタイミング悪く受け取れない事が多くて……管理人さんはそう言う時良く預かってくれるんだ。」

花名「あの……はんねんさんは何かイベントとか開催されてるんですか?」

万年「イベント?」

花名「はんねんたいかいって。」

万年「ああ。「たいかい」じゃなくて「ひろえ」。私の名前だ。」

花名「す……すみません私とんだ大間違いを!」

万年「いや、皆読めないからこれ。」

名前は万年大会。はんねんひろえ。

万年「しかし見た目に反して凄く軽いな……一体何が入って……」

荷物の中身はゼロハンテームだけだった。

万年「ゼロハンテープだな……」

花名「セロハンテープですね．．．あ！私どさくさに紛れてお部屋にお邪魔してすいません！」

万年「いやそんな！荷物運びさせたのは私なんだから！あ！そうだお茶でも！」

花名「あ、お構い無く．．．」

万年「あれ？何も無いな．．．あれ？ここにあつたはず．．．」

花名（万年さんのお部屋．．．私の部屋みたい。）

万年「すまん！ちよつと待つてろ！今ネットで注文するから！」

花名「え！そ．．．そんなお構い無く．．．」

万年「大丈夫だ。私はプレミア会員だからな．．．今頼めば今日の夕方には．．．」

花名「お、お構い無く．．．（助けて志温ちゃん．．．）」

その時、万年が崩れた。

万年「即日お届け対象外だ．．．」

花名「あの．．．飲み物ならコンビニで買って来ましようか？」

万年「コンビニ!？」

花名「行きますか？コンビニ。」

万年「無理だくそんなの〜！」

花名「え！どうしてですか．．．」

万年「コンビニに行く服が無い。」

花名「コ・・・コンビニですよ？」

万年「コンビニでもだ！ゴミ捨て場より遠くに行く服が無いんだ・・・」

花名「あれ？でも今年受験した時の服って・・・」

万年「無い。」

花名「え？」

万年「受験・・・してないんだ。」

花名「え・・・」

何と彼女は受験してなかった。

彼女は自分の過去を語った。

万年「2年前、高校3年の時の私はまさに順風満帆だった。生徒会長を務め品行方正、成績優秀の非の打ち所の無い生徒だったと思う。志望校も合格間違い無しと言われていた。しかし・・・受験当日はまさかの大雪。」

彼女は受験当日、大雪で倒れてしまったのだった。

万年「そのまま2時間発見されず、救出された後は酷い風邪を引いて・・・本命の大

学は勿論滑り止めすら受験出来ず……」

花名「そんな……」

後輩『万年先輩受験お疲れ様です！私も先輩と同じ大学に入りたいんですけど……合格出来たらまた先輩後輩になれますね！』

この言葉が、彼女をグサツと刺した。

万年『あ……ああ。そうだな。頑張れ！』

後輩『はい！』

万年「地元に住るのが気不味くなって、引っ越しして一人暮らしを始めたんだが……」

後輩『また先輩後輩になれますね！』

万年「あの感覚が忘れられなくて段々家を出るのも嫌になって……それで今年の受験も……下らないだろこんなの。馬鹿みたいだよな。」

花名「下らなくなんてないです！下らなくなんてないし・・・馬鹿みたいでもないです・・・」

大粒の涙を流してる花名。

万年「一之瀬さん!?!」

花名「私・・・私も浪人してて・・・」

万年「え?」

花名は、万年に自分の過去を語った。

万年「中学浪人か・・・苦労したんだな一之瀬さん。」

花名「いえそんな！万年さんの方が大変です!」

万年「いやいや中学で浪人つて大変だろ！一之瀬さんの方が私なんかよりずっと苦労してる!」

花名「でももう高校生ですし友達も出来ましたし、私の方が万年さんよりずっとマシです!」

万年「ずっとマシ・・・」

クリティカルヒット連発で倒れた。

花名「あくごめんなさい！」

万年「いやそうだよな・・・コンビニすら行かないんじや受験なんて夢のまた夢だよな・・・」

花名「あ・・・あの。私も応援します！頑張りましょう！万年さん！」

万年「一之瀬さん・・・」

花名「まずはコンビニに行けるようになりましょう！」

万年「ああそうだな！目指せコンビニ！・・・目標低・・・」

花名「い・・・いえ。小さい事からコツコツと、ですよ。（あ。そう言えば自分から浪人の話を人にしたの初めてだなあ・・・）」

万年「そうだ！思い出した！可愛い絵のついたスウェットならあるんだが、これを外出着にすると言うのはどうだろうか？」

たぬきの絵のスウェットを取り出した。

花名「・・・何にしてもまずは服ですよね。」

万年「スルー!？」

花名「試しに私の服を着てみるのはいかがでしょうかと思っただんですけど、ちよつと子供っぽいですよ・・・」

万年「いや・・・可愛いと思うが私に似合うかどうか。サイズも小さいだろうしな・・・」

花名「あ！じゃあ志温ちゃんの服はどうでしょう？」

万年「確かに・・・身長は一緒くらいだな。・・・余るよな。」

花名「余りますよね・・・」

胸がでかい事に断念した。

花名「あ！ネットで注文すると言うのはどうですか？」

万年「おお！その発想は無かった！」

早速Amazonで服を調べる。

花名（ゼロハンタープまでネットで買ってるのに・・・）

万年「んく・・・」

花名「ん？」

スウエットをじっくり見ていた。

花名「万年さん。スウエットは見なくて良いです・・・」

万年「おお！気付いたらつい！・・・駄目だ。何を買ったら良いかさっぱりだ・・・」

花名「やっぱりお店に行つて実物を見るしかないのかな・・・」

すると花名の携帯に着信音が。

花名「あ、すみません。」

万年「いえいえ、どうぞどうぞ。」

電話に出ると。

たまた 『もしもし百地たまたまですが!』

花名 「たまちゃん? どうしたの?」

通話の相手はたまたまだった。

たまた 『数学のプリントって月曜提出でしたでしょうか?』

花名 「ううん。水曜だよ。」

たまた 『あく助かった! 学校に忘れて来ちゃったのですよプリント!』

花名 「あはは、そうだったんだ。あ! あのねたまちゃん! ちよつと相談したいことが・・・」

たまた 『?・・・成る程! そう言う事でしたら栄依子ちゃんが頼りになるのではないかと!』

花名 「あ! そうだね。栄依子ちゃんお洋服とか詳しくそう。」

たまた 『じゃあ私から栄依子ちゃんにメールしておきますよ!』

花名 「ありがとうたまちゃん。」

たまた 『ではでは!』

花名 「うん。ばいばい。」

通話終了。次の瞬間、栄依子からメールが来た。



花名「うわ！栄依子ちゃん・・・もしもし？」

栄依子『あ、花名？たまからメール来たんだけど「花名ちゃんがお知り合いの二十歳女性を弄んで好き放題して良いそうですよげへへ」ってなにこれ？』

その後たまたま達が来た。

花名「はくい。」

たまた「見ざる参上！」

冠「言わざる参上。」

栄依子「そして私は着飾くる！」

美鈴「そして参加せざるを得ない！」

栄依子「さあ素敵なお洋服で着飾つちやうわよ！・・・あのね花名ちゃん。これやりたいつて言ったのはたまたまちゃんだね。」

冠「私と栄依子と美鈴は悪くない。」

たまた「2人共しどい！」

優輔「美鈴まで乗ってどうすんだよ。」

美鈴「楽しそうだったからつい。」

貴之「まあ良いけどさ。」

侑李「ん？」

栄依子「あ……大会さん？」

万年「っ！」

びつくりして後ろに倒れた。

侑李「あの人が？」

花名「うん。」

すると栄依子が部屋に上がって、万年に歩み寄る。

栄依子「初めまして。十倉栄依子と申します。」

万年「と……十倉さん……」

栄依子「栄依子です。」

万年「とく……」

栄依子「え・い・こ。」

万年「え……栄依子さん……」

栄依子「はい、いい良く出来ましたー。」

たまた「フアオ。グイグイですね。栄依子ちゃん。」

花名「グイグイだね・・・」

優輔「凄えな栄依子、初対面の人を早速弄んでる。それも年上の女性を・・・」

貴之「栄依子半端無え。」

花名「皆、今日は何処かへお出掛けしてたの？」

優輔「俺はたまたまサイクリングしてたらたま達に会った。」

貴之「俺は栄依子からメールで誘われて。」

侑李「冠からメール来た。」

美鈴「私はたまちゃんからメールが来たから来ちゃった。」

たまた「これ部屋着なんですよ。」

花名「え!？」

たまたの部屋着は着物だった。

冠「私も。」

たまた・美鈴「ええ!？」

冠「着替えたかったけど栄依子が急かすから。」

たまた「こんなに可愛いのに部屋限定なんて勿体なかとですよ!もく天使ちゅあ〜ん!」

美鈴「その服装で外に出たらきつと注目間違い無しだよ!」

冠 「これは親の趣味で……」

優輔 「親御さんの趣味？」

冠 「うん……」

たまた 「親御さん良い御趣味をされてますね。GJ！」

美鈴 「冠ちゃん、抱いて良い？」

優輔・貴之 「止めんかい。」

花名 「部屋着にも色んな個性があるんだね。ん？」

横を見ると、万年がスウエットを見せてた。

花名 「それは違います。」

栄依子 「さてと、大会さんに似合いそうなのはこんな所かな……軽く着替えるだけのパターンかメイクも髪もがつつり弄ってみるパターンかどちらになさいます？」

花名 「えっと……」

一方万年は怯えていた。

花名 「んく……がつつりの方で！」

万年 「いやああああああ!!!」

花名 『好奇心が思いやりを凌駕した瞬間でした。』

栄依子が別室で万年をがつつり弄る。

数分後。

栄依子「堪能した〜。超楽しかった〜。ありがとう花名！」

花名「こ、こちらこそ・・・（20歳女子を弄んで好き放題してる・・・）」

栄依子「それではご覧頂きましょう。大会さん、どうぞ〜。」  
ドアを開けると。

何時もの姿よりがつつり別嬪さんになっていた。

栄依子「えへへ〜。どう？」

7人「誰ですか？」

万年「え！そんなに変わったか？」

たまた「いや、栄依子ちゃんの技術力半端無いですね。」

栄依子「あはは。いえいえ。」

優輔「凄え・・・ビューティーコロシムかよ・・・」

美鈴「万年さん綺麗。」

たまた「もしかして栄依子ちゃんもメイク落とすと別人だったり・・・」

栄依子「いやこれすつぴんだから。たまたちゃんひどい。」

万年「こ・・・これが私!？」

手鏡で自分の顔を見てびっくりした。

栄依子「それで、おめかしして何処行くの？同窓会とか？」

花名「コ・・・コンビニ。」

栄依子「コンビニ!？」

訳を話した。

栄依子「・・・成る程。そう言う事だったのね。それなら、こんな感じでどうでしょう。」

何処にでも居る普通の女性らしくさせた。

たまた「良き！良きですよ万年お姉さん！」

万年「そうかな・・・」

冠「良きかな。」

侑李「良いじゃない。外に出ても大丈夫な格好よ。」

花名「(知らないお姉さんが万年さんに戻った！) おかえりなさい！万年さん！」

万年「え？た、ただいま・・・」

栄依子「じゃあお支度はこんな所で・・・これからお店に行つて服とか靴とか買つて来て・・・」

万年「え・・・あの無理だ！いきなりそんなの！」

栄依子「でも、コンビニに行く服すらも無いんですよね？」

万年「今日だけこの服をお借りして・・・」

栄依子「でも、今日だけの問題じゃないですし。」

万年「わ、私は今日コンビニに行ければそれで・・・  
すると冠が寄つて来た。」

栄依子「かむ？」

冠「本当にそれで良いの？」

万年「ん？」

冠「本当にコンビニに行けるだけで良いの？」

その言葉を聞いた万年が崩れた。

万年「……ああ。全くだ。また私は目の前の問題から逃げようとしていた……」

花名「万年さん……」

万年「まさかこんな小さな子に諭されるとはな……」

優輔・貴之・侑李「あ。地雷。」

花名「は……万年さん。冠ちゃん怒ってまーす……」

侑李「大丈夫よ冠。今のは万年さんの冗談だから。」

その後アウトレットモールへ向かって、服を買った。

その後。

たまた「いや、大分HP減っちゃってますね。」

万年「服屋の店員さんと言うのはグイグイ来るな……」

花名「あはは、そうですね。」



栄依子「これ組み合わせのリストです。」

万年「あ……ありがとう。こう言うの得意じゃないから本当に助かる……」

栄依子「分からない事があつたら連絡下さい！何時でも行きましますから！」

万年「えーい……」

たまた「どの店員さんよりグイグイ行ってますね栄依子ちゃん。」

花名「本当だね。」

優輔「店員よりの天敵が現れたな。」

貴之「だな。」

美鈴「万年さん苦労しそう。」

軽井沢駅。

たまた達4人を見送った。優輔達3人も帰って行った。

その後2人で帰る。

花名「今日は素敵なお洋服が見つかって良かったですね。」

万年「……ありがとう一之瀬さん。」

花名「え？」

万年「このくらい強引に連れ出してもらわなければ、外に出る事はなかっただろう。感謝してる。本当に。」

花名「万年さん……」

万年「い……一之瀬さんはその……友達に浪人の話はしてあるのか？」

花名「えつとその……いえ。」

万年「そっか……そうだよな。」

花名「話してしまっても、何も変わらないんじゃないかって思う事もあるんですが……」

万年「変わってしまったたら怖いもんな。言えないよな。やつぱり……」

花名「……分かってもらえますか!？」

万年「分かる! 凄く分かる!」

花名「わ……私こう言うの分かってもらえたの初めてかも知れませんか!」

万年「私もこんなに親近感を抱く相手は初めてだ!」

花名「あ……あの! 大会さんと呼びしても良いでしょうか!」

万年「勿論だ! どんどん呼んでくれ! 私も花名ちゃんと呼びたい!」

花名「大会さん！」

大会「花名ちゃん！」

花名「大会さん！」

大会「花名ちゃん！」

2人「ん？・・・あははははははは！」

花名「・・・それでも・・・何時かちゃんと皆に話したいです。」

大会「うん。まあ焦らずゆっくりだな。」

花名「でもちよつとは焦らないと、何時になるか見当も付かないと言うか・・・」

大会「分かる。分かるぞく花名ちゃん。」

後日のアパート。

志温「あら。おはようございます万年さん。」

大会「あ。ども。おはようございます。」

新しく買った服を着た大会が挨拶した。

志温「お出掛けですか？」

大会「ちよっとコンビニまで！」

こうして万年大会に元気が戻って来たのであった。

「END」

## STEP 5 「かむりのふわふわ」

季節は夏に入った。

たまた 「衣替えですよー！ イエーイ！」

美鈴 「ヤッホー！」

星尾高校では夏服に衣替え。

優輔 「朝からテンション高えなおい。」

花名 「朝からアイス・・・」

たまた 「衣替えですからね。」

美鈴 「衣替えだからね。」

貴之 「はいはい。」

たまた 「花名ちゃんもアイスいかがですか？ ほら一口！」

花名 「ええ・・・」

たまた 「二口！ いや三口！ 遠慮せんでも良えんやで〜！」

美鈴 「どう？ 優輔と貴之もアイス食べる？」

優輔・貴之 「いらん。」

栄依子「衣替えだからアイスって意味分かんないわよ。」

そこにアイスを持った栄依子と侑李が来た。

花名「栄依子ちゃんに侑李ちゃんまで……」

貴之「お前もアイス持つてんのかい。」

侑李「栄依子に付き合わされちゃって。」

たまた「いや〜でも、冬服から夏服つて軽くなり過ぎてちよつと不安になりますよね。」

花名「あ〜分かる。何か足りてないような気がしたりね〜。」

たまた「ですです〜！」

美鈴「だよね〜。」

すると冠が登校した。

栄依子「あ。おはようかむ。」

侑李「冠おはよう。」

たまた「かむちゃんおはよ〜！」

花名「おはよ〜。」

美鈴「おはよう冠ちゃん！」

優輔「よう冠。」

貴之「おはようさん。」

すると冠が、栄依子と侑李をジツと見詰める。

侑李「冠どうしたの？」

栄依子「どうかした？お腹空いた？」

冠「空いてない。ぺろ。」

アイスをペロと舐めた。

侑李「どうしたの冠？何かあったの？」

冠「あのね・・・スカート履いて来るの忘れた。」

花名・たまで・栄依子・侑李・美鈴「え？」

優輔・貴之「は？」

花名「ええく!!??どどどどうしよう!!？」

優輔「何でスカート履いてないんだよ!!？」

貴之「つてか良く来れたな!!？」

栄依子「ありやく。衣替えだからって身軽になり過ぎよ。」

優輔「何呑気に会話してんだよ！」

冠「何かスースーするのは、タイツ履いてないせいかと思つた。」

侑李「つて言うか普通即座に気付くはずよ？」

たまた「成る程く。これからはかむちゃんの生足を毎日拝めるって訳ですな。眼福眼福！」

美鈴「至福至福！」

花名「皆！どうしてそんなに落ち着いてるの!？」

貴之「慌てるもんだろ普通！」

たまた「花名ちゃんと侑李ちゃんと優輔君と貴之君が皆の分も全力で慌ててくれるから、ですかね。」

優輔「ツツコミを人任せすんな。」

花名「だ・・・だだだってその下はパパパパン・・・」

たまた・美鈴「ツー！」

花名「なんだよ！」

栄依子「えく。そんな事言ったら私達だってこの下には・・・パンツだけだし。」

花名「え・・・？」

優輔「何だこの会話・・・」

貴之「聞きたくねえ・・・聞いちゃったけど・・・」

花名「そしたらスカート履かなくて良いって事なの？それともパンツ履かなくて良いの？」



侑李「ちよつと花名？」

たまた「花名ちゃん！パンツはおやつに含まれませんからね〜！」

優輔・貴之・侑李「遠足みたいに言うな！」

栄依子「まあほら。パンツ履き忘れた訳じゃないしね。」

冠「・・・大丈夫！」

花名「あ・・・あのももやっぱりまずいのでは？困るのでは？これからとか・・・帰りとか・・・」

貴之「痴漢とかされたらヤバいぞ・・・」

栄依子「かむー。ほら体操着。」

冠「ん。」

体操着のズボンを履く。

冠「すちや。」

履いてドヤ顔した。

侑李「何そのドヤ顔？」

花名「え・・・あれ？これで終わり・・・？これだけで済んじやうお話・・・？」

たまた「済んじやうお話ですね〜。」

美鈴「済んじやうたね〜。」

花名「え？そう、なのかな・・・？」

侑李「いや普通は大問題でしょ。」

栄依子「花名は色々考え過ぎなのよ。もつと気楽に、ね。」

花名「栄依子ちゃん・・・うん。」

たまた「それにしても、どうしてスカート忘れたんですか？」

優輔「そうだそこが問題だ。」

冠「それは・・・」

栄依子「ん？何何？」

たまた「あ！さては薄着の栄依子ちゃんにときめいてしまったのですね！あるある」

！

栄依子・侑李「無いでしょ。」

たまた「いやくだって栄依子ちゃん中学の時も校内で生写真とか売られてましたし」

花名「えく！？」

美鈴「生写真！？見たいそれ！」

優輔・貴之「バカたれ。」

侑李「たまた、良く覚えてるわね。」

たまた「これがその時の写真ですよ！」

封筒に入ってる栄依子の生写真を見せた。

栄依子「何でそんなの買ったのよ……」

たまた「卒業記念プライス！80%オフと言われてつい。」

優輔「安く売り過ぎ……」

栄依子「当人の知らない所で投げ売りされて……」

たまた「でも勢いで買ったものの、特に必要無いので。かむちゃんに差し上げます！」

冠「あ……ありがとうたま。」

たまた「っ！……にこうてーい！にこうてーい！死ぬ！キョン死ぬー！」

美鈴「良いなくたまちゃん。私も冠ちゃんからお礼言われたくい。」

栄依子「かむ。どうするのそんなの……」

冠「お父さんとお母さんに見せたら喜ぶから。額に入れて飾ると思う。」

侑李「何で額縁？」

栄依子「かむのお家で私ってどう言う扱いなの……？」

封筒を開けて生写真を見る。

冠「栄依子。これ栄依子？」

生写真を栄依子に見せた。

栄依子「・・・うん。私ね。」

たまた「紛う事無き栄依子ちゃんですね。」

侑李「この頃の栄依子懐かしいわ。」

美鈴「萌え袖の栄依子ちゃん可愛い〜！」

花名「栄依子ちゃん、中学校の時はヘアピンしてなかったんだ。」

たまた「ヘアピン付いててなかったから分からなかったのでは？」

栄依子「そんなにも重要なパーツなの？ヘアピンって・・・」

たまた「ヘアピンは栄依子ちゃんの体の一部なんです。」

栄依子「体の一部って・・・じゃあたまもりボンは体の一部ね。」

一方その頃アパートでは。

志温「あら。おかえりなさい万年さん。」

大会「う、うむ・・・ただいま。」

志温「今日も面白い物に？」

大会「はい！近頃は最寄りのコンビニだけでは飽き足らず！この辺りのコンビニは全

て制覇しました！何と5 km先のコンビニにも行けるようになったのですぞ！」

志温「おめでとうございます！だけど・・・コンビニエンスの意味からどんどん遠ざかっているような・・・」

コンビニエンスとは、便利・好都合と言う意味である。

大会「ん、んゝ・・・」

志温「あら。」

その頃学校では。花名がアイスを買ってた。

花名「売り切れてた奴、補充されて良かったね。」

冠「うん。」

優輔「もう学校のアイスがブームになってるな。」

貴之「そんなに人気なのか？」

4人はアイスを食べながら廊下を歩く。

花名「あ……あのね冠ちゃん。」

冠「ん？」

花名「さつきずっと何を考え込んでたの？」

優輔「ずっと栄依子をジッと見てたけど。」

冠「……あの写真。去年見た栄依子と違う。」

貴之「去年の栄依子と違う？」

冠「うん。商店街ですれ違った。髪が長くて栄依子そっくりの子と。でもあの写真の

栄依子は髪短いし違う。」

花名「あ。そう言えば……私も商店街の本屋さんで栄依子ちゃんに良く似た人にす

れ違って……」

優輔「そう言えば俺も。この前ショッピングモールで栄依子そっくりの女性を見た。」

貴之「優輔も？」

優輔「ああ。」

花名「人違いかと思ったけど、そっくりさんでも居るのかな？」

冠「分からない……でもあの時会えたから……」

花名「ん？」

優輔「冠？」

冠「何でも無い……」

その頃栄依子達は。

栄依子「あ！先生！」

後ろに振り向くと榎並先生が立っていた。

榎並先生「何だ？」

栄依子「あれ？何で下だけジャージ？」

侑李「何時もはスカートのはずなのに。」

榎並先生「今日から衣替えだし、少し気合い入れて来たんだが、学年主任に注意されてな。」

美鈴「ありやりや。」

たまた「へえ、そんな事が。」

栄依子「な〜んだ。先生がどんな粗相をしたのかわくわくしてしまったじゃないですか。」

榎並先生「お前の期待してるような事は断じてねーよ。」

栄依子「あはは。そんな期待なんて……まさかおもら……」

言ってる途中に榎並先生に止められた。

榎並先生「黙れ。ま、お前らも気を付けろよ。そろそろ風紀検査もあるからな。」

侑李「そう言えばそうだったね。」

栄依子「は〜い。」

たまた「風紀検査で下着検査までする学校もあるらしいですね!」

榎並先生「ご苦労な事だな。」

たまた「栄依子ちゃんがつつり引つ掛かりそうですね〜。」

栄依子「え〜?」

榎並先生「何?お前そんなに凄いの?」

栄依子「いやそんな。別に・・・」

榎並先生「どれ。」

ナチュラルに栄依子のスカートの中を見た。

榎並先生「この程度なら大丈夫なんじゃねーか?」

栄依子「あ・・・そうですか。ですよね・・・」

侑李「先生、何ナチュラルに覗いてんの?つてか栄依子、その目は何?」

女子生徒「榎並先生ー!」

榎並先生「ん?何だ?」



呼ばれた榎並先生が女子生徒の方へ行つた。

美鈴「ん？栄依子ちゃん？」

栄依子はその場で崩れてしまった。

侑李「ちよつと栄依子？大丈夫？」

しばらくして花名と冠と優輔と貴之が戻つて来た。

冠「ん？」

花名「ど……どうしたの栄依子ちゃん？」

優輔「何時も元気なお前に何があつた？」

たまた「4人の居ない間に超必殺技が出まして！栄依子ちゃんのメンタルゲージが激減しました！」

貴之「あ、栄依子の横のメンタルゲージが低下中。」

冠「なでなで。なーでなでなで。」

栄依子を撫でる冠。するとメンタルゲージが徐々に回復し始めた。

貴之「メンタルゲージが回復中。」

優輔「何だこれ？」

たまた「おお！メンタルゲージが復活して来ました！」

花名「ゲージって何・・・？」

冠「よしよし。よしよし。よしよし。よしよし。よしよしよし。」

全回復した栄依子が冠を抱いた。

たまた「おっ！」

美鈴「栄依子ちゃん復活ー！」

花名「え!?え!?何!?!」

侑李「冠に癒されたのね栄依子。」

放課後。

たまた「帰りにコンビに寄って行きませんか!?!」

優輔「唐突過ぎるなたま。」

たまた「新作のアイスが出たらしくて！」

花名「朝食べたよね・・・？」

貴之「まだ食うのか？」

たまた「いやいや！学校のアイスと外のアイスでは全然違いますよ！ハレとケって奴ですな！」

ハレ（晴れ・霽れ）とは、儀礼や祭り、年中行事など普段の生活とは違う「非日常」を表す。

ケ（夔）とは、対して日頃の生活である「日常」を表す。

優輔「この説明いるか？」

細かい事は気にしちやダメだよ？

花名「は、晴れ時計!？」

侑李「ヤッホー。」

美鈴「お待たせー。」

冠「花名。」

花名「冠ちゃん？」

冠「体操着返すの忘れた。」

たまた「あ！栄依子ちゃん今日は急いで帰ってしまいましたからね。」

花名「用事あるんだっけ？」

冠 「返さなきや。」

たまた 「しかしここで返してしまえばかむちゃんはパンツだけに・・・」

冠 「行きは平気だったし問題無い。」

花名 「駄目く!!」

優輔・貴之 「止めろー!!」

たまた 「栄依子ちゃんは商店街へ行くのだそいで、追い掛けますか？」

美鈴 「追跡ですか？」

たまた 「はい！」

花名 「冠ちゃん、商店街行って・・・」

冠 「うん。」

7人は栄依子を探す為、商店街へ向かう。

たまた 「成る程成る程く。栄依子ちゃんのそっくりさんですかく。」

花名 「うん。私も冠ちゃんも優輔君も目撃してるんだよ。」

たまた 「それはもしや、ドッベルゲンガーと言う奴ではないでしょうか!?!」

花名 「え・・・えと・・・ドツペゲルンガー・・・?」

たまた「ドッペルゲンガーですよ！ほらあの東北の妖怪の！」

花名「妖怪・・・!?」

冠「自分とそっくりの存在。」

侑李「簡単に言えば、影武者ね。」

花名「影武者・・・？」

冠「もう1人の自分が現れるのは良くない報せ。」

たまた「我が街に霸王は2人もいらぬ！って感じでしょうか。」

花名「霸王!？」

冠「もし栄依子本人とドッペルゲンガーが出会ったら・・・」

花名「で・・・出会ったら・・・」

冠「どちらかが死ぬ。」

花名「死ぬく!?」

冠「それが・・・里の掟！」

花名「里の!？」

美鈴「アイエエエエ!？」

たまた「里の掟には逆らえませんがね。」

花名「え・・・栄依子ちゃんが妖怪と影武者と霸王と里の掟に殺されるく!?」

たまた「いや花名ちゃん。ちよつとは疑いましょうよ。」

花名「嘘なの……？」

冠「少し本当。」

花名「ええ!？」

優輔「少しだけかよ！」

たまた「まあ都市伝説みたいなものですよね。」

冠「それより返さないで。」

花名「あ……栄依子ちゃん！まずいよ彼処はドッペルゲンガーが出た場所だよ！」

本屋へ入って行く栄依子を発見した。

冠「ドッペルゲンガー。」

花名「栄依子ちゃん！今助けるから！」

本屋。

花名（居た……）

栄依子を発見した。すると冠が飛び出した。

たまた（やや!?!）

花名（冠ちゃん!）

優輔（飛び出したぞ!）

栄依子「ん？」

すると栄依子が冠に気付いた。

侑李（あれ？あの子・・・）

冠「栄依子？」

栄依子「・・・はい。栄依子です。」

花名・たまたまて・美鈴・優輔・貴之「ええー!?」

???'「どうしたの？皆そろって。」

何と後ろにもう1人の栄依子が現れた。

花名「え、栄依子ちゃんの・・・ドッペルゲンガー!?どうしよ〜!」

たまたまて「い・・・今こそ私達魔法少女コンビの力を活かす時ですよ!」

花名「はなれ〜!」

たまたまて「たまえ〜!」

巫女姿になつてもう1人の栄依子を祓う。

美鈴「どうしよう!?!栄依子ちゃんが2人居るなんて!」

優輔「噂が本当になったのか!」

貴之「これは一大事か!？」  
するとその時。

侑李「光希じゃん!」

花名・たまた「え?」

優輔・貴之・美鈴「光希?」

光希「あ、侑李さん。」

侑李「ここで会うなんて偶然ね!」



美鈴「え？光希って、栄依子ちゃん侑李ちゃんどう言う事？」

栄依子「紹介するわね。この子は……」

光希「妹の光希です。」

花名・たまて「え？」

優輔・貴之「い、妹さん？」

何と栄依子そっくりの妹さんの十倉光希とくらみきだった。

カフェで訳を話した。

栄依子「ははは。まさかドツペルゲンガーなんて居る訳無いじゃない。」

光希「少し前から参考書を探していまして。今日は姉さんに助言をお願いしたので  
す。」

花名「それであの時本屋さんに……」

たまて「そっくりさんとは妹汁さんの事だったんですね。」

優輔「汗言うな。」

花名「妹さんの事すっかり忘れてたよ。」

優輔「侑李は知ってたんだな。」

侑李「当たり前よ。私栄依子の幼馴染みだもの。」

優輔「あ、ごめん忘れてた。」

栄依子「結構前だからね。みっきの事話したの。」

光希「いえ。光希です。」

たまた「ほうほう。みっきさんとな。」

光希「光希です。」

貴之「冷静なツツコミ。」

冠「何でさつきは栄依子って・・・？」

光希「はい。それはですね：：場の空氣的にそう名乗った方が正解かと思ひまして。」

栄依子「うん。それ多分間違ってる。」

光希「成る程。勉強になります。」

優輔「ノリが良い妹さんだな。」

栄依子「かむも私達間違える程に似てる？」

冠「うん。小学校の頃の栄依子に似てる。」

栄依子「ああ・・・髪型かな。」

光希「そう言えば姉さん小学校の頃は長かったですね。」

侑李「そう言えばそうだったね。」

冠「うん。後・・・去年の今頃栄依子の事見掛けた。」

去年の商店街。冠が下校途中に栄依子そっくりの妹の光希を見掛けた。

冠『え、栄依子！』

すると光希に電話が来た。

光希『はい。・・・あ、そうです。』

冠『あ、あの・・・』

光希『はい、星尾高校。ええ、その学校です。』

声を掛けようとしたが、一瞬にして見失ってしまった。

冠『星尾・・・高校・・・』

そして現在。

冠「その時に見たの中学生の栄依子だと思ったんだけど。」

栄依子「それがみつきだったと。」

光希「光希です。」

優輔（そのみつきってのは何だ？言うだけで危ない感じがするんだが・・・）

貴之「優輔、お前がこの前ショッピングモールで見た栄依子も・・・」

優輔「多分光希さんだな。髪が長かったし。」

冠「あの写真と違ってたから・・・」

栄依子「そつか。だから写真見て変な反応してたのね。」

冠「うん。」

栄依子「でも、それだと高校入って私の事見た時違和感あったでしょ？」

冠「高校デビューって奴なんだと思ってた。」

侑李「高校デビューって・・・」

栄依子「でもかむの方は小学校の時と全然変わってなくて、びっくりしたわ。」

冠「むー。前にもそれ言ってたけどそんなに!？」

栄依子「うん。焦がれるあまりに幻が現れたのかと思った。」

すると冠が栄依子に惚れた。

侑李「あ、惚れた。」

冠「えい！えい！」

ポカポカ叩く。

栄依子「いたいたい．．．」

冠の頬を触れる栄依子。

栄依子「ねえかむ、もしかして私が居るかも知れないから、うちの学校受験したの？」

冠「うう．．．」

侑李「凶星ね。」

栄依子「全く．．．学校名出したからってそこに行くとは限らないでしょ？私と侑李が居なかつたらどうするつもりだったの？こんな人見知りの子が。」

冠「な．．．何とかなる．．．」

侑李「為せば成る的な？」

栄依子「なるかな？」

冠「なつた．．．もん。」

すると冠が栄依子に抱き付いた。

冠「栄依子。あのね、今日の朝栄依子の事考えててスカート忘れた。」

栄依子「私の事？」

冠「ずっとね．．．ずっと．．．会いたかった．．．また会えて．．．嬉しかった。」

栄依子「うん。」

冠 「ちゃんと会えて・・・」

栄依子 「うん。かむ、ありがとう。」

冠 「ありがとうは私の台詞・・・」

栄依子 「ええ。私でしょ？」

冠 「違う。私。」

栄依子 「あはつ、違う。私でしょ？」

冠 「違う。私。」

栄依子 「違う。私。」

冠 「違う！私！」

栄依子 「違う。私。」

冠 「違う！私！」

たまた 「ううう・・・ええ話やく！」

美鈴 「もう私泣いちゃうよ！」

光希 「はい。勉強になります。」

栄依子「いや何がよ……」

たまた「ぶっぴー。妹さんがうちの学校の名前出したのが今に繋がったんですよ……絡み合う2つの運命の歯車……」

栄依子「絡んだらダメなんじゃないかな？」

優輔「……」

貴之「何か俺も感動しちゃった。」

優輔「貴之？」

侑李「あの2人が幸せそうで何よりね。」

優輔「侑李？あ、あれ？俺が可笑しいのか……？」

たまた「しかし、かむちゃんの居た学校って幼稚舎からのエスカレーターなんでしょ？」

冠「うん。」

たまた「親御さん、よく許してくれましたね外部受験。」

冠「栄依子が居るかもしれないって言ったら、すぐ賛成してもらえた。頑張っておいでって。」

栄依子「え？だからかむのお家でどう言う扱いなの私って……」

美鈴「恋人関係？」

優輔・貴之「アホか。」

光希「私も来年受験しようと思ってるんです。頑張ります。」

花名（受験!?!受験生の方が私なんかと一緒に居たら縁起悪くないかな・・・一緒に空気が吸ったせいで浪人の呪いに侵されたりなんかしたら・・・）

トラウマスイッチがONになって息を止めた。

たまた「花名ちゃん？何で息なんか止めてるんですか？」

花名「く・・・空気をね・・・」

光希「成る程。高校生ともなると空気を読むと言う行為が単なる慣用句に留まらないと言う訳ですね。体現してしまおうとは。勉強になります。」

花名「けほけほ！」

空気を止め過ぎて噎せた。

たまた「花名ちゃん！」

光希「成る程。勉強になります。」

花名「違うと思うよ・・・」

貴之「光希さんだけでなく勉強熱心なの？」

美鈴「良いね勉強熱心の子！私萌えちゃった！」

貴之「お前はもう黙ってる！」



冠は栄依子に抱き付いて、嬉しくなってる。

優輔「侑李、あの2人結構仲睦まじくなってると思う？」

侑李「栄依子と冠が仲良くなってるならそれで十分よ。それに、あの2人との関係も見守って行きたいしね。」

優輔「そ、そうか・・・」

翌日。冠が登校途中。

花名「冠ちゃんおはよう！」

冠「ん。おはよう。」

途中で花名と会った。

優輔「よう冠、花名、おはよう。」

冠「おはよう。」

花名「おはよう！」

途中で自転車に乗った優輔と会った。

冠「あ。猫。」

優輔 「猫だ。」

途中で猫を発見。

花名 「可愛いく。おいでおいで。」

手を伸ばすが、猫は逃げた。

花名 「・・・」

優輔 「逃げちゃった・・・」

冠 「栄依子が猫懐かせるの得意。」

花名 「そうなんだ。」

優輔 「どんだけ凄いんだよ栄依子は。」

花名 「凄いな栄依子ちゃん。」

冠 「うん。」

ドヤ顔した。

優輔 「何だそのドヤ顔？」

花名 「猫だけじゃなく、冠ちゃんも栄依子ちゃんや侑季にすつごく懐いてるんだね。」

冠 「え!？」

花 「え・・・? あ・・・あの・・・ごめんね・・・何か・・・」

冠「う、ううん・・・」

すると風が吹いた。

優輔「ん？冠どうした？」

冠「あ、スカートまた忘れた。」

花名「えええー！？」

優輔「またかよ！？」

しかし冠は笑った。

「END」

## STEP 6 「うなぎのぬるぬる」

その後花名が住んでるアパート。既に優輔と貴之と美鈴が来てる。

花名「あ、あの・・・」

たまた「初めまして！百地たまと申します！花名ちゃんには何時もお世話になっていきます！」

志温「此方こそ。花名ちゃんが何時もお世話になってます。京塚志温です。」

2人はお互いに畏まってる。

たまた「私の事はお気軽にたまちちゃんとお呼び下さいませ！」

志温「あら。じゃあ私の事は志温ちゃんとお呼び下さいませ。」

たまた「志温ちゃんさん！」

志温「はい！たまちちゃん！」

たまた「塩卵つて塩ラーメン味玉トッピングつて感じですね！」

志温「本当々。美味しそうね。」

たまた「志温ちゃんさんは塩ラーメン派ですか？」

志温「何でも好きだけどメンマだけは外せないわ。」

優輔 「いきなりラーメンの話になってる。」

美鈴 「私は味噌ラーメン派かな。」

貴之 「お前に聞いてねえよ。」

たまで 「美味しいメンマって高給な割り箸を使ってるんでしようね〜！」

志温 「スギやヒノキを使ってるんでしようね〜。」

花名 「割り箸・・・？」

貴之 「話が絡み合ってるのか絡み合っていないのかどっちだ？」

志温 「たまちゃん。これからも花名ちゃんの事宜しくね。」

たまで 「はい！不束者ですが幸せにしてみせます！」

花名 「た、たた、たまちゃん!？」

優輔・貴之 「婚約かよ。」

志温 「今日はたまちゃんがご飯作ってくれるのよね。必要なものがあつたらうちから何でも持って行ってね。」

たまで 「わあ、ありがとうございます！あ！これはキャベツの千切りが出来るピーラー！」

志温 「こんな物もあるわよ。」

たまで 「あ〜！これは家庭でポテトチップスが簡単に作れる奴！」

志温 「こんなのも！」

たまた 「何と！挽肉がご家庭で〜！」

美鈴 「たまちゃん、調理器具に詳しいね〜。」

優輔 「そう言えば家では料理番って言ってたな。」

軽井沢 駅で3人を待つ。

優輔 「もうすぐ来るって栄依子からメールが来た。」

貴之 「お、そうか。」

花名 「たまちゃんって凄いよね。」

たまた 「ん？何故ですか？」

花名 「だって初対面の人ともすぐ仲良くなれるから・・・」

たまた 「それはですね、私が凄いいんじゃないかって相手の方が優しいんですよ。」

花名 「な、成る程。」

たまた 「そしてどんな人でもお構い無しにぐいぐい行く方があちらに。」

栄依子 「お待たせ〜！」

グッドタイミングで栄依子と冠と侑李が来た。

美鈴「凄いタイミング！」

花名「お、おはよう。栄依子ちゃん冠ちゃん侑李ちゃん。」

冠「おは。」

侑李「おはよう花名。」

栄依子「今日はお世話になります。」

冠「なります。」

花名「ええ!?!」

たまた「なります!」

花名「こ……此方こそ!」

侑李「初々しい雰囲気が出てるわね。」

優輔「よう侑李。」

侑李「あらおはよう。」

たまた「いや〜絶好のお泊り日和ですな。私ゲームも持って来ましたよ!」

ゲームボーイアドバンスSPを出した。

優輔「ゲームボーイアドバンスSP!?懐かしい!」

貴之「そう言えば俺もアドバンスSP持って来たんだ!」

優輔 「お前もかよ！」

貴之 「たま！一緒に遊ぼうぜ！」

たまた 「良いですよ〜！」

栄依子 「たま、貴之。今日は何でお泊りするんだっけ？」

貴之 「何でって、それはね〜。」

たまた 「夜なべして遊ぶ為ですよ〜！」

栄依子・侑李 「違います。」

冠 「たまのご飯をお腹一杯食べる。」

栄依子 「それは凄く楽しみですけど違います。勉強会でしょ。」

たまた 「栄依子ちゃん設定に拘るタイプですね〜。」

優輔 「設定言うな。」

花名 「あはははは。」

アパートへ向かう。

栄依子 「今日は従姉さんお出掛けなのよね？」

花名 「うん。同窓会で。だから皆が泊まりに来てくれて嬉しいのは勿論なんだけど、



ちよつと安心してて。」

栄依子「1人じゃ何かと不安よね。」

優輔「分かる分かる。1人だと暇でしようがないもんな。」

たまた「そうですね。1人でお留守番していると何だか怖くなる事ありますし。矢鱈と背後が気になったり。」

栄依子「ああ。シャワーを浴びてる時も背後に気配を感じたりする事あるわよね。」

たまた「まあそれは大抵私なんですけどね！」

栄依子「君だったのか・・・」

花名「そう言えば私もこの前部屋で勉強したら背後で何か落ちる音がしてね・・・恐る恐る振り返ったらそこには・・・ち・・・ち・・・」

たまた・栄依子・侑李・美鈴「ち!？」

花名「小さなネジが！」

貴之「ネジかよ！」

花名「何処のネジなんだろうと思つたら、怖くて眠れなくなっちゃって……」

たまたま・栄依子・侑李「ネジで？」

美鈴「私も怖くなっちゃった……」

貴之「ネジレジア。」

優輔「メガレンジャーかよ。」

冠「あ、良い匂い。」

栄依子「あそこのうなぎ屋さんじゃない？」

貴之「本当だ。うなぎ屋だ。」

たまたま「あく！たまたまらん芳香ですねぇ！」

花名「本当だね。」

優輔「うちの飲食店に負けてるな。」

侑李「そう言えば優輔の家は飲食店だったわね。」

たまたま「あ！栄依子ちゃんも良い匂いなら負けてませんよ！」

栄依子「うなぎと張り合う気は無いから、その気遣いはご無用かな？」

冠「たま。うなぎ捌ける？」

たまで「流石に未経験です！でもうなぎ屋さんで働いた事があります！」  
花名「え!？」

たまで「中学の時職業体験ってあったじゃないですか。」

栄依子「ああく！やったやった！」

侑李「懐かしいわね職業体験！」

たまで「本当に辛い体験でした。うなぎの香しい香りの中でひたすら働いた私を待っていたお昼ご飯は・・・持ち込みのお弁当で・・・」

花名「賄いじゃないんだ・・・」

貴之「それはそれで悲しいな。」

栄依子「うわゝ生殺しだ。」

たまで「超生殺しですよ！うなぎだったら生焼けですよ！」

侑李「私はたまと一緒にうなぎ屋で職業体験してたの。」

美鈴「そうなの？」

侑李「あの時たまは、毎日うなぎをジツと見てたから。私が毎回注意してたの。」

冠「うなぎは良く焼かないと。」

優輔「血に毒があるからな。」

たまで「私が栄依子ちゃんぐらいのモテ女なら、うなぎの1ぬるんや2ぬるんぐらい

有り付けたのでしようか！」

栄依子 「ぬるんって何の単位？」

たまた 「うう、こんな話してたら益々うなぎ食べたくなりました：でも今月ちよつとピンチなので。」

花名 「ピンチ？」

たまた 「百地家では一月分の食費を私が預かってやりくりしてまして。残った金額が私のお小遣いとなるのですが。」

栄依子 「へえ〜！」

花名 「偉いねたまちゃん！」

美鈴 「凄いシステムだね！」

たまた 「いえそれがですね．．．新しい料理を覚えたり美味しそうな食材を見付けたりするとお婆ちゃん達に食べてもらいたくなってしまう。今月は家族で食べに行く程の余裕は無いかもですね．．．」

花名 「そつか．．．やつぱり偉いよたまちゃん．．．」

美鈴 「良いお婆ちゃんに育てられて良かったね〜．．．」

たまた 「お？そうですか？褒めますか？では存分に褒め称えて下さいなく！ちやほやして下さいなく！」

花名「うん！するよ！ちやほや！たまちゃん本当に凄いや！偉いよ！」

冠「ん。たまは凄く偉い。」

たまた「ちよ、直球ですわね・・・」

照れてしまった。

たまた「え・・・栄依子ちゃんと美鈴ちゃんもちやほやして良いんですよ！ほらほらどうします？ほれほれ！へいへい・・・」

栄依子「良い子。」

頭を撫でた。

美鈴「本当に良い子で可愛いよ。」

優しく抱いた。

たまた「て・・・照れますわ・・・」

栄依子「あ。レアたまた。」

冠「生焼け。」

たまた「う・・・こんな生殺しですわよ！」

侑李「たま、本当に良い子ね。」

優輔「良い家庭に育てられて良かったわ。」

貴之「百地家の鑑だな。」

たまた「もおく3人まで……」

アパート前。

大会「お。花名ちゃーん！」

花名「大会さん！」

コンビニから大会が帰って来た。

大会「おお！皆さんお揃いで！お久し振り〜！」

たまた「戻ってますね……スウエットに。」

栄依子「戻ってるわね。」

侑李「完璧に戻ってるね。」

大会「え……？わ！本当だ！スウエットだ！」

花名「わあ！本当だ！何時の間に！」

大会「何と言う事だ……ゴミ捨てぐらいなら、コンビニぐらいならと日に日に緩んでしまつて……申し訳ない栄依子ちゃん！思う存分殴ってくれ！」

栄依子「えーと……嫌です。」

大会「何故だ栄依子さん！何故だ！」  
すると冠が大会のお尻を叩いた。

部屋で大会をオシヤレにさせた。

栄依子「はい。出来ました。」

たまた「お〜！可愛いですよ万年お姉さん！」

花名「素敵です！大会さん！」

大会「あ、ありがとう・・・」

侑李「良いわよ入って。」

別室で待機してた優輔と貴之が入った。

優輔「やっぱ凄えな栄依子のセンス。」

貴之「もう美人になってる。」

冠「低俗大事。」

大会「うむ、そうだな。これは所詮付け焼刃の女子力・・・この姿を維持出来るようにしなければ！所で今日は何の集まりなんだ？もしかして・・・巷で噂の女子会と言う

奴か!？」

「たまたま「そうだったら、どんなに良かったでしょうか・・・」

大会「ん?」

栄依子「残念ながら勉強会です。」

花名「もうすぐ期末試験なので、お泊りで勉強会する事になって・・・」

優輔「それに男である俺達2人が居た所で女子会にならないでしょ。」

大会「成る程そう言う事か・・・あ!それなら私が皆の勉強を見ると言うのはどうだろうか?」

花名「本当ですか!？」

大会「女子力を高めてもらったお礼だ。遠慮はいらないぞ!」

花名「ありがとうございます!」

勉強開始。

栄依子「うつわ!大会さん頭良い!」

たまたま「どう言う事ですかこれ!?びっくりですよ!」



貴之「積分をあつさりと!」

大会（私は一体どう思われていたんだろうか・・・）

勉強は夕方まで続いた。

たまた「疲れました・・・」

冠「お腹空いた・・・」

美鈴「疲れたく・・・」

優輔「やべ、腹減った・・・」

栄依子「ねえ。でも大会さんのお陰でかなり進みました。」

侑李「本当に助かりました。」

大会「お役に立てたら何よりだ。」

花名「お風呂溜まったよ！」

美鈴「ありがとう！」

大会「それじゃあ私は・・・」

栄依子「そうだ！私入浴剤持って来たんだけど、入れても大丈夫？」

花名「うん。じゃあ大会さんからお風呂どうぞ。」

大会「いや・・・私は・・・」

たまた「どうぞ！一番風呂行っちゃって下さい！万年お姉さんにはお世話になりましたから！」

大会「いや・・・あの・・・」

栄依子「じゃあこれお願いします。」

入浴剤を渡した。

大会「あ・・・はい。」

1番風呂は大会。

大会「何故私は花名ちゃんの部屋のお風呂に？」

シャワーで体を洗う。

大会「そうだ入浴剤・・・」

栄依子から貰った入浴剤を浴槽に入れる。

大会「こ、これは・・・」

トロトロしていた。浴槽に入る。

大会「おおおおお・・・」

2番目は侑李。

侑李「はあく・・・気持ち良い・・・栄依子ったら良い入浴剤を持って来てくれたわね。」

3番目は栄依子と冠。

冠「美味しそ。」

栄依子「ダメだからね？」

しかし栄依子の指を舐めた。

栄依子「こーら。」

4番目は美鈴。

美鈴「ほへく・・・生き返るく・・・この入浴剤気持ち良いねく。私も買おうかなく

？」

5 番目は花名。

た『シャワーを浴びてたら背後に何者かの気配を感じたり・・・』

花名「っ？」

背後を恐る恐る見ると。

たまで「1人風呂はそこまです！」

花名「た、た、たまちゃん!？」

2人で浴槽に入る。風呂が溢れ出た。

花名「とろんとろんだねえく・・・」

たまちゃん「ぬるんぬるんですなあく・・・」

6 番目は貴之。

貴之「この入浴剤、結構トロトロしてるな。丸でとろろだな。」

最後の7番目は優輔。

優輔「ああ……良い湯加減……でも何か、女の子が入った後の風呂つてのはちよつとぎこちないな……」

そして夕飯の時間。

たまた「本日の夕餉はとろみ風呂に因んで、たまちゃん特製八宝菜！か〜ら〜の中  
華丼でえす！」

今日の夕餉は、たまちゃん特製八宝菜と中華丼。

花名「おお、まさにこんな、こんな感じにとろ〜りと……」

栄依子「煮込まれちゃったね〜。」

美鈴「美味しそ〜！」

9人「いただきま〜す！」

美鈴「……美味しい〜！」

花名「……今なら八宝菜の気持ち分かる気がする……八宝菜の人生……悪く

ない。」

優輔 「美味え〜。実家のメニューに出したいくらい美味え〜。」

大会 「何と言う美味！私までいただいて良かったのか？」

たまた 「勿ですよ。万年お姉さんのお陰ですっごい捗りましたしね！」

侑李 「大会さんに感謝しなきゃね！」

栄依子 「ねえ。あんなに勉強出来る人だったなんて。」

大会 「こう見えても、高校時代は学年主席の生徒会長だったんだ！」

栄依子 「おお〜！」

たまた 「御見それしました！」

冠 「おかわり。」

貴之 「冠食うの早！」

大会 「自分で言うのも何だが、名生徒会長だったんだぞ！私が会長を務めた年の文化祭は私の名に肖って、文化大会と名付けられたぐらいなのだ！」

栄依子 「それは愛されてると言うか・・・」

たまた 「いじられてると言うか。」

大会 「う・・・」

冠 「おかわり。」

貴之「早！もう？」

優輔「たま、うちの店で働いてみるか？きつと繁盛すると思うぞ？」

たまた「お気持ちだけ貰いますね。」

夕餉を食べ終えた後。

たまた「ゲームをしましょう！」

花名「皆で出来るゲーム？」

栄依子「車を運転するとか？」

貴之「マリオパーティか？マリオカートか？」

たまた「ギャルゲーです！」

栄依子「ギャルゲー・・・」

優輔「ギャルゲーかよ。」

栄依子「何で私・・・？」

たまた「だってギャルを落とすゲームですから。」

侑李「そうね。確かに栄依子なら落とせるかも。」

栄依子「答えになってないわよ？ここを押して行けば良いの？」

たまた「そうですそうす！」

プレイを続ける。

花名「な……なんか見てるだけでドキドキしちゃうな……」

大会「う……うむ。人の恋路を隠れて見るようだな……」

美鈴「私もギャルゲーやりたいな。」

優輔・貴之「止めとけ。」

たまた「私の一押しはこの子ですね！」

冠「この子は？」

たまた「あく……その子は登場した時彼氏さんが居るのでダメです。」

美鈴「リア充？」

優輔・貴之「言うな。」

大会「それじゃ付き合うのは無理なのか……」

たまた「いえ。まあ付き合えますが……ほら元カレが居た訳ですし……今までも

これからも私の事しか好きにならない子が良いんですよ。今までもこれからも。」

花名「たまちゃん……顔怖い……」

侑李「目が死んでるよ？」



するとゲームのSEが聞こえた。

たまたま「なく！やだ怖い！この短時間で全ての女子の恋心がマックス！」  
優輔「流石栄依子・・・全員を完璧に落とすやがった・・・」

その後部屋に布団を敷いた。

花名「あ。お布団ありがとう。」

優輔「どうって事無えよ。」

貴之「力仕事は男の仕事だからな。」

栄依子「体温上がってる・・・かむもうおねむ？」

冠「うん。」

たまたま「私もお勉強で頭使い過ぎてねむねむですよ。」

美鈴「私もねむねむしたい。」

花名「そうだね。今日はもう寝ようか。」

栄依子「まだ10時半だ。こんな時間に寝るのなんて小学生以来かも。」

貴之「栄依子は何時も何時に寝てんだ？」

花名「じゃあ電気消すね。」

全員「はーい。」

電気を消した瞬間、謎の物音が。

花名「ヒイ!？」

たまた「何の音でしょう?」

花名「いやー!」

スマホのライトで照らした。

たまた「盛り上がってまいりました。お泊りと言えば怪談ですよね。」

花名「かか、怪談!？」

美鈴「怪談怖い!」

侑李「急な話ね。」

栄依子「え? 本当にやるの?」

冠「眠い。」

優輔「まあ定番っちゃあ定番だな。」

貴之「仕方無え。やるか。」

怪談話開始。

たまた「それでは栄依子ちゃんからお願ひします。」

栄依子「はい。前にネットで見えた話なんですけど。あれ？看護師さんだったかな？まあ良いかどつちでも。まあ何かの建物があつてその窓からこつちを見てる女の人の姿が……あれ？子供だったつけ？まあ色々ありまして皆死んでしまいましたとさ。」

優輔・貴之・冠「雑。」

たまた「うろ覚えにも程がありますよ。」

花名「み……皆死ぬつて……」

たまた「ちよろ過ぎますよ花名ちゃん！」

美鈴「健気だね。」

栄依子「ねえ。かむは何かネタある？」

冠「ストツキング売り場に置いてある下半身だけのマネキン。柵から足が生えてるみたいで怖い。」

花名「あ……そう考えると怖い。」

たまた「怪談じゃないけど怖い！」

冠「怖い。」

侑李「怖いって言うか、シユールのな？」

たまた「ふふふ・・・次は私がお話ししましょう。」

花名「た、たまちゃん!？」

たまた「とある旧家に使用人として住み込みで雇われた女の子のお話です。」

花名「ひいゝ・・・」

栄依子「おお。何だか本格的。」

たまた「その家のお嬢様と女の子は年が近い事もあり、まるで姉妹のように仲睦まじく暮らしていました。ある日彼女がメイド服で庭掃除をしていると・・・はい!ここでメイド服イベントスチル!何かの気配を感じて振り返ると・・・そこにはイベントスチル!イベントスチル大盤振る舞い!イベントスチル!」

花名「イベントスチル怖いイベントスチル怖い・・・」

美鈴「怖いよ・・・」

栄依子「何怯えてるの花名、美鈴。」

優輔「俺も1つ怪談あるぞ。」

栄依子「あるの?」

たまた「お!じゃあ優輔君!」

優輔「・・・幽霊が出ると言う噂の廃旅館にやって来た3人の若い男女。彼らは旅館の奥へ進んで行った。そして、1番奥の部屋を覗くとそこには・・・」

侑李「そこには・・・？」

優輔「6体の人形の首が落ちていた。」

花名・美鈴「く、首!？」

優輔「けどそれだけでは終わらなかった。」

花名「え・・・？」

優輔「1人の男性が人形の首に近付くと隙間から・・・」

花名「す、隙間から・・・？」

優輔「人間の顔がこつちを見て睨んだ！」

花名・美鈴「いやー！ー！」

優輔「3人の男女は恐怖して廃墟から走って脱出した。その廃旅館には、昔殺された女性の怨念が今尚彷徨つてると言う噂がある。どうだ？怖かったか？」

美鈴「こ、怖い・・・」

花名「優輔君・・・怖いよ・・・」

栄依子「優輔、本格的ね・・・」

「たまたて「いやあく、優輔君は凄いですね〜。」

深夜。全員が寝静まった頃。

花名（眠れない・・・）

眠れない花名は、コップに水を注いで飲む。

花名「ふう・・・ん？」

足元に何かがあった。謎のネジだった。

花名「ひっ！」

???「花名ちゃん。」

花名「ひっ！・・・たまちゃん。」

後ろにたまたてが居た。

花名「ごめんね起こしちゃって・・・」

たまたて「いえいえですよ。眠れないんですか？」

花名「うん。その・・・また見付けちゃって。これ・・・」

ネジを見せた。

たまた「あ、ネジ。」

花名「どうしよう・・・これが大事な所のネジだったら・・・皆が寝てる間に天井が落ちて来たり柱が折れたり・・・アアアアパートごと崩れたり・・・」

泣いてる花名の涙をたまたが拭いた。

たまた「そんな重要な部分に、こくんちつちやなネジは使わないと思いますよ。花名ちゃん。」

花名「そ・・・そうだよね・・・そうだよね。ごめんねたまちゃん。こんなのが怖いなんて変だよね。」

たまた「良いんじゃないですか？好きな物、怖い物、人それぞれですよ。」

花名「たまちゃん・・・」

たまた「ギャルゲーだつて同じですよ。」

花名「え？」

たまた「幼馴染、ツンデレ、クール系、お姉様。中には元カレが居る子だつて居るでしょう？最近はお前の娘と書いて男の娘、あ、これは複雑になるのでさておき。ギャルゲーの女の子達は好感度の上がるプレゼントもデートの場所も全部違います。だがそれが良いんです！同じ物が好きで同じ物が怖くちや攻略のし甲斐がないつてもんです

よ！あ！でもやっぱり元カレはダメですね！」

花名「あはは・・・」

たまた「おっと、つい熱くなっちゃいました。正直初めて聞いた時は、何故ネジで眠れないのかと思いましたが。」

花名「やつぱさうだよね・・・」

たまた「でも怖いですよ。夜中にそんな物を見付けちゃったら。「何処のネジだろうね」。怖いね。」って話し合える人が傍に居ないのは心細いですよね。花名ちゃん是我的事を偉いって褒めてくれましたが、一人暮らしで頑張ってる花名ちゃんの方がよっぽど偉いですよ。花名ちゃん！」

花名「たまちゃん・・・」

たまた「花名ちゃん偉い偉い。よしよしよし。」

褒めながら撫でる。

花名「こう言うのってイベントスチル？」

たまた「お。花名ちゃんも分かってきたじゃないですか。」



翌朝。

花名「ん・・・」

目が覚めた花名。横を見ると。

花名「きゃ！」

寝相が良過ぎるたまてが寝ていた。

栄依子「あ。おはよう花名。」

冠「おはよう。」

侑李「花名おはよう。」

貴之「花名おはようっす。」

優輔「よう花名。おはよう。」

美鈴「zzzz・・・」

花名「おはよう。あれ？冠ちゃんほっぺが赤くなってる・・・」

冠の左頬が赤くなっていた。

栄依子「あら本当だ。何これ？」

花名「ネジの呪い!?!」

冠「栄依子のtkbの跡。」

優輔・貴之「ブッ！」

栄依子「固いなく私のtkb。」

優輔「おい、その発言は止めろ。」

侑李「ナチュラルに言わないでよ。」

花名「ネジの呪いでtkbがネジに・・・」

栄依子「何でピンポイントに私のtkb呪うの？」

貴之「だからその発言は止めろ。」

栄依子「あ。分かった。私の服のボタンだわ。」

優輔「何だボタンか。良かった。」

花名「そ・・・そっか・・・呪いじゃなかったんだ。」

侑李「何の呪い？」

栄依子「人のtkbを呪うネジって何の恨みがあるのやら。」

侑李「だからtkb言うの止めなさい。」

冠「ネジと言えばこれ。」

スイッチのカバーを見せた。

花名「スイッチのカバー？これのネジだったんだ・・・」

するとたまたまが起き上がった。

たまたま「おはようございます。皆早起きさんですね。」

貴之「いや、美鈴はまだ寝てる。」

花名「たまちやん浴衣が全然着崩れてないね・・・」

優輔「たま、寝相がフアラオみたいだったぞ？」

たまた「そうでしょう。私ツタンカーメンより寝相が良いと評判ですからね。」

栄依子「どう言う評価なのそれは・・・」

侑李「何でツタンカーメン？」

優輔「おい美鈴起きろ。」

美鈴「んあ？」

百地家に帰って来たたまたま。

たまた「ただいまです〜！」

史生・多佳子「ごはん食べに行きましよ！」

たまた「・・・え？」

史生「今日はお婆ちやん達が御馳走するからね。うなぎなんてどうかしら？」

多佳子「うなぎ！良いわねえ〜！」

たまた「で・・・でも本当に良いんですか？」

史生「だってたまちゃんお料理もやりくりも頑張ってくれてるじゃない。」

多佳子「そうそう。自慢の孫娘だわ。」

たまた「て・・・照れます・・・」

多佳子「だからご褒美。」

史生「ね。」

たまた「わあ・・・！」

多佳子「お腹空いたでしょ？二段重ね頼んじやえ〜！」

たまた「二段重ね!？」

史生「う巻きも頼んじやえ〜！」

たまた「う巻きお婆ちゃん、ありがとうございます!」

ご褒美にうなぎが食べれると喜んだたまたであった。

「END」

## STEP 7 「ぐるぐるのてくび」

後日の星尾高校。

貴之「おい栄依子……そのヘアピンどうした……？」

大量のヘアピンをしてる栄依子を見た優輔と貴之が驚いてる。

冠「お誕生日おめでとう。ピン子。」

栄依子「ピン子って……」

美鈴「泉ピン子？」

優輔「言うな。」

たまた「偉い事になりましたね。」

栄依子「嬉しいけどびっくりした……」

花名「じ……実は私も万年さんと選んだヘアピンで……」

美鈴「あ！私もバスデープレゼントのヘアピンをあげましょう！」

たまた「花名ちゃんと美鈴ちゃんに同じく！ハピバですよ栄依子ちゃん！」

栄依子「ありがとう。花名、たま、美鈴。」

たまた「付けて良いですか？」

栄依子「どうぞ。」

たまた「花名ちゃんに美鈴ちゃんも。」

花名「う、うん。」

美鈴「可愛くしてあげるね。」

侑李「いやもう十分でしょ？」

前髪にヘアピンを付けた。

栄依子「ありがとう。」

優輔「ゴージャスなり過ぎ……」

たまた「限定ライブ当りますように限定ライブ当りますように限定ライブ当りますように限定ライブ当りますように！」

栄依子「ええ……」

たまた「ああ、頭がおめでたい感じだったのでつい。ほら花名ちゃんも！」

栄依子「おい……」

花名「え！……栄依子ちゃんの1年が幸せなものでありますように。」

侑李「純粋だね花名。」

すると栄依子が花名を抱き締めた。

花名「え……栄依子ちゃん？」

栄依子「ありがとう。嬉しい。良い子ね花名は。」

たまた「もう花名ちゃんがあんまり良い子だと私が駄目っぽくなるじゃないですか。」

花名「た・・・たまちゃんは全然駄目なんかじゃないよ！」

嬉しくなつたたまたまが花名を抱いた。

花名「たまちゃん!？」

たまた「もう花名ちゃんはまうごつ良い子ですね〜！」

栄依子「良い子よね〜。」

美鈴「本当だね〜。」

抱かれて困惑する花名。

優輔「お前ら花名が困惑してるぞ。」

たまた「花名ちゃんめごい！めつき可愛い！」

貴之（東北方言？）

栄依子「うんうん。かわいい。」

美鈴「花名ちゃん可愛い〜。」

侑李「そうね。花名可愛い。」

冠「可愛い。」

照れた花名が冠を抱き締めた。

たまた「あ。照れた。」

侑李「照れたね。」

優輔「照れたな。」

栄依子「照れたわね。」

すると榎並先生が教室に入った。

侑李「あ、榎並先生。」

榎並先生「うっわ。何事だお前それ？十倉ピン子か？」

栄依子「止めて下さい・・・ピン子定着しそ〜。」

すると榎並先生が栄依子の左肩に手を置いた。

榎並先生「十倉。」

栄依子「は、はい。」

榎並先生「若い内はごちやごちや飾るのがおしやれだと思いがちだがな。お前それ！

0年後絶対後悔するから。」

栄依子「いえ違います。違うんです・・・」

たまた「栄依子ちゃん誕生日なんですよ〜！」

侑李「そうそう。栄依子の誕生日なの。」



榎並先生「誕生日？成る程。それでそのめでたい格好か。」

栄依子「うっわ何かしらこれ・・・悪意しか感じない・・・」

榎並先生「無い無い悪意とか。「此奴人気者気取りかよ」とか思つてない全然。」

栄依子「もう清瀬さんひどい。」

榎並先生「下の名前で呼ぶなよ・・・ま、誕生日おめでとう十倉。私からもプレゼントをやろう。ほらじつとしてろよ。」

栄依子「はい・・・」

髪にクリップを付けてあげた。

榎並先生「どうだ？嬉しいか？」

優輔・貴之（クリップかよ・・・）

栄依子「先生、これどう見てもゼムクリップなんですけど・・・」

榎並先生「安心しろ。私物だから返却不要だ。」

栄依子「わー嬉しいなー。あ・・・」

クリップを曲げてハート型にした。

栄依子「お気持ち受け取りました。」

侑李（ハート型にしたねあの子・・・）

榎並先生「返せ。」

栄依子「あれ〜？返却不要なんじゃ？」

榎並先生「・・・1限目始まる前に全部外しとけよピン子。」

栄依子「え、だから止めて下さいってば！」

侑李（先生、栄依子を弄んでるわね。）

放課後。

優輔「こんなに貰ったのかよ。」

貴之「流石に多過ぎね？」

たまた「栄依子ちゃんって榎並先生さんにぐいぐい攻めて行っちゃったね〜。」

美鈴「先生さん？」

栄依子「うん。ああ言うタイプ好きなの。」

優輔「好きって・・・」

花名「ああ言うタイプ？」

栄依子「この前もね。卒業したらお友達になって下さいって言ったんだけど・・・」

榎並先生『お前が卒業して私になるのは友達ではなく恩師だ。』

栄依子「良いわよね〜そう言う所。」

花名「う・・・うん・・・？」

侑李「栄依子の思考って何があるの・・・？」

たまた「何が良いのかはよく分かりませんが、栄依子ちゃんのそう言う所は好きですよ。」

女子トイレ。栄依子が鏡に向かってブラシで髪を整えてた。ケースを見ると、貰ったヘアピンが大量に入ってた。

女子トイレから出ると。

栄依子「かむ？侑李？」

侑李「栄依子、ハッピーバースデー。」

冠 「お誕生日おめでとう。」

栄依子 「あら？このタイミングで？」

冠・侑李 「敢えて。」

栄依子 「敢えて？じゃあはい。付けて。」

すると侑李が栄依子の右手を、冠が栄依子の左手を持った。

栄依子 「っ？」

侑李が右手にブレスレット。冠が左手の小指に指輪を嵌めた。

栄依子 「指輪とブレスレットだ。」

冠 「ヘアピンは被るかと思って敢えて。」

侑李 「被らなく良かったわ。」

栄依子 「綺麗く。ありがとうかむ。侑李。」

冠 「ん。」

侑李 「どういたしまして。」

栄依子 「ねえ。この指輪かむだと薬指のサイズよね。」

冠 「知らない。」

一方職員室では、花名がプリントを持って来た。

花名「先生、持って来ました。」

榎並先生「おう。この前お母様が見えたぞ。お前の事宜しくと仰ってた。」

花名「そ、そうですか……」

榎並先生「ああその……学校の方はどうだ？嫌な事とか無いか？」

花名「いえ……えつと……楽しいです！最初の頃は馴染めないんじゃないかなって不安だったんです……でも、今はもう大丈夫な感じで、その……空気が優しくなってきたと言いか……馴染めてきたのかなって……」

榎並先生「いいや、それは馴染んだと言うよりもお前らが仲良くなったって事だろ。」

花名「そ、そうなんでしょうか……」

榎並先生「私にはそう見えるが。」

8人が下校する。優輔は自転車を押ししてる。

たまたま「しかし凄いですよね。クラス全員誕生日プレゼントがヘアピンだなんて

！」

美鈴 「本当だね。」

栄依子 「え？皆で打ち合わせしてくれとかじゃなかったの？」

花名 「ううん。全然。」

貴之 「偶然かよ・・・」

優輔 「とんでもないシンクロ・・・」

たまた 「こんな風にクラス全員の心が一つになるなんて奇跡ですよ！このような事も卒業式までないかもしれませんね！」

たまた 「楽しかったー！」

冠 「誕生日！」

たまた 「思い出に残ったー！」

冠 「栄依子のヘアピン！」

栄依子 「修学旅行とか差し置いて私のヘアピン・・・？」

貴之 「千葉！滋賀！佐賀！」

優輔 「懐かしい！」

花名 「栄依子ちゃんが何時も付けてるそのヘアピン凄く綺麗だよね。」

栄依子 「そ、そう？」

冠 「似合ってる。」

侑李「栄依子らしい。」

たまた「大人っぽいキラキラが、栄依子ちゃんっぽいと申しますか。」

栄依子「そうかな・・・？ありがとう。」

たまた「何処で買ったんですか？このこの。」

栄依子「秘密。」

たまた「隠しておきたい名店と言う奴ですか！」

栄依子「ふふ。」

たまた「う・・・これ以上は踏み込ませないと言う絶対的な圧を感じる！」

美鈴「どう言う事かな？」

たまた「秘密は秘密のまま謎多き女である事がモテのコツなんですわ。かむちゃん

侑李ちゃん良いんですか？モテにも程がありますよこの人は。」

冠「栄依子が皆に好かれてるのは嬉しい。」

侑李「私も冠と同じ。栄依子が幸せならそれで十分よ。」

たまた「成る程！最後には私と言う港に帰って来てくれたら良いと！」

花名「演歌なの・・・？」

冠「もしくはよる脱走した犬が朝には犬小屋に帰ってる、みたいな。」

花名「犬なの・・・？」

指でキツネを作って。

栄依子「わん。」

優輔・貴之・美鈴・侑李「それキツネ。」

ある日の榎並先生の家。

榎並先生「あく・・・飲み過ぎた・・・ん？」

そこに何故か栄依子と侑李が眠っていた。

榎並先生「十倉・・・？億崎・・・？家だよなここ・・・」

何があったのか分からない榎並先生。すると栄依子と侑李が起きた。

栄依子「おはようございます。先生。・・・あのまま寝ちやつたかく・・・あ、すみませんこれ外してもらえますか？」

侑李「おはよう先生・・・私の両腕を解いてくれる？」

両腕が何故か縛られていた。

榎並先生「お、おう・・・」



両腕を解放させた。

栄依子「ありがとうございます。あ、お手洗いお借りしますね。」

榎並先生（・・・何だこれ？）

しばらくして栄依子が手洗いから戻って来た。

栄依子「どうもありがとうございます。2日酔いですか？」

侑李「先生大丈夫？」

榎並先生「おい・・・何がどうなってお前達がここに居る？」

栄依子「ええ。覚えてないんですか？」

侑李「大変だったんだよ？」

時は遡って昨夜。

西村『ほらくちゃんと歩け。』

榎並先生が泥酔状態になっていた。友達の西村基が榎並先生の腕を担いでいた。

栄依子『榎並先生。こんばんは。』

侑李『ヤッホー先生。』

榎並先生『お・・・おう。』

たまたまそこに栄依子と侑李が居た。

西村『あ！榎並の生徒さん？』

栄依子『はい。どうもです。』

侑李『先生の教え子です。先生酔ってるんですか？』

西村『この人飲み始めてすぐ潰れちゃって。この見た目でこの弱さって笑うわよね。』

榎並先生『うるせえ・・・』

すると電話が来た。

西村『はい西村です。さっきはどうも・・・』

栄依子（酔ってる・・・可愛い。）

侑李（可愛いのか？）

栄依子（可愛いわよ。）

西村『榎並起きて。さっきの店に忘れ物取りに行かないとだから・・・』

栄依子『私達が送って行きましょうか？』

西村『良いの？』

栄依子『はい。』

侑李『任せて下さい。』

西村『すぐそのマンションだから。』

榎並先生が住んでるマンション。

侑李『着いたよ先生。』

栄依子『先生お家ですよ。鍵開けて下さい。』

鍵を出してドアを開けた。

榎並先生『今日の西村は2人居て・・・何だか十倉と億崎に似ているな・・・何でだ  
〜?』

栄依子『うーん。十倉本人だからでしようか。』

侑李『億崎本人だからかな?』

榎並先生『そうか十倉と億崎かあ・・・』

栄依子『はーい。十倉ですよ。』

侑李『億崎だよ。』

部屋にお邪魔して、榎並先生をソファに寝かせた。すると栄依子と榎並先生がソファに倒れた。

侑李『栄依子大丈夫？』

栄依子『大丈夫大丈夫。大丈夫ですか先生？』

榎並先生『おゝゝゝ十倉と億崎つてのはうちの生徒でなゝゝゝ』

侑李『先生？』

栄依子『まだ続くんだこの話。ね、十倉さんつて可愛い？』

榎並先生『いや。可愛くねゝゝゝ』

栄依子『あく即答だひどくい。』

榎並先生『十倉はなゝゝゝ何だろうな彼奴はゝゝゝおい何だと思う？』

侑李『質問したよ？』

栄依子『さ、何でしょうね。』

榎並先生『一つ言える事はだなゝゝゝ可愛くね。』

栄依子『うわあ。』

榎並先生が眠った。

キッチンにある冷蔵庫を開けて、水を持って行く。

栄依子『はい先生。お水です。』

榎並先生『お、おう・・・』

栄依子『じゃ私はこれで失礼します。』

侑李『早く寝て酔いから覚めてね？』

榎並先生『帰るのか・・・？』

侑李『当たり前だよ。』

栄依子『帰りますよそりや。』

榎並先生『帰るのか・・・』

栄依子『居て欲しいんですか？』

榎並先生『居て欲しいのか・・・？』

侑李『先生子供みたいになってる・・・』

栄依子『こつちが聞いているんだけどなく。居て欲しいなら居ますけど？』

榎並先生『居て欲しいなら・・・』

栄依子『居ますよ。侑李も一緒に。』

侑李『私も?』

榎並先生『居るのか・・・これソファアーカーのカバー・・・』

栄依子『酔っ払いの癖に細かいなく。ほくらもう休んで下さい。』

侑李『体に毒だよ?』

榎並先生『お前からあれだろ。私が寝たら悪戯とか落書きとかするんだろ・・・』

栄依子『えくしませんよく。』

侑李『私もしないよく。』

榎並先生『いくやお前は信用出来ない・・・よし。縛っておこう・・・』

栄依子『えく?』

侑李『縛る?』

榎並先生『両手出せ・・・』

栄依子『はくい。』

侑李『はい。』

そして現在に至る。

栄依子「・・・みたいな感じですよ。」

侑李「もう大変だったんだよ？」

榎並先生「いやうん・・・私が全面的に悪い・・・私が悪いんだが・・・お前らももう少し抵抗しろよ・・・」

栄依子「いや、段々面白くなってきちゃって。」

侑李「泥酔状態の先生に抵抗したら怒られるかもって。」

榎並先生「面白ければそれで良いのかお前は・・・」

栄依子「割と。」

侑李「割と？」

榎並先生「あ・・・十倉、億崎。面倒掛けてすまなかったな・・・」

栄依子「せ・・・先生がしおらしくなってる！あはは！」

侑李「栄依子!？」

榎並先生「十倉てめえ・・・」

栄依子「ごめんなさい・・・」

榎並先生「ツボってんじゃねえか・・・って十倉、億崎お前ら無断外泊してねーか？」

栄依子「ああ大丈夫ですよ。友達のお宅に泊めてもらうって連絡入れてありますん

で。」

侑李「私も同じく。」

榎並先生「そうか・・・ん？十倉、億崎お前らずつと縛られてただろ。何時連絡入れたんだ？」

侑李「あれ？気付いちやった？」

榎並先生「お前らほんとは自分で外せたんだろ？」

栄依子「あはは！」

榎並先生「ああもう・・・酒止める・・・」

侑李「お。飲酒防止の1歩を踏み出したね。」

栄依子「え？酔った先生可愛かったのに。」

榎並先生「うるせえ・・・お前ら言つとくけど学校サボるなよ。」

侑李「そうだったね。」

栄依子「帰って着替えてから行きますよ。」

榎並先生「そうか。」

栄依子「先生。コーヒー飲むなら私が淹れておきますよ。先に顔洗って来て下さい。」

榎並先生「おお。シャワー浴びて来て良いか？」

栄依子「ご随意にどうぞ。」



榎並先生「家探しとかするなよ？」

栄依子「不安ならまた縛ります？」

榎並先生「蒸し返すな。」

侑李（この2人面白いわね。）

榎並先生「使い方分かるか？」

栄依子「はい。母に淹れたりするので。」

榎並先生「じゃあすまんが宜しく。」

数分後。

榎並先生「あくさつぱりした・・・」

侑李「おかえり先生。」

栄依子「コーヒー出来てますよ。」

榎並先生「サンキュー。」

栄依子「先生って朝食べない人ですか？」

榎並先生「食べたり食べなかつたりだな・・・あ、でもお前らは食べるよ。朝食抜き

ダイエツトとか考えるなよ。」

栄依子・侑李「はくい。」

コーヒーを差し出す。

榎並先生「美味い・・・」

栄依子「ほんとですか？良かった。」

侑李「はあく、栄依子のコーヒーは落ち着く。」

榎並先生「お前砂糖とか入れないのか？」

侑李「砂糖入れますね。」

榎並先生「十倉は？」

栄依子「ブラック派です。」

榎並先生「女子高生が生意気な。」

栄依子「先生もブラックですよね？」

榎並先生「大人だからな。」

栄依子「酔っぱらって生徒に介抱される大人・・・」

榎並先生「う・・・」

栄依子「良いと思いますよ。可愛くて。」

榎並先生「嬉しくねえ・・・」

数分後。

栄依子「ごちそうさま。そろそろ家帰って着替えないと・・・」

侑李「本当だ。早くしないと。」

榎並先生『遅刻したら遠慮なく付けるからな。』

栄依子「はい・・・あ、今日日直だった。」

榎並先生「そうか。」

栄依子「花名と早めに学校行く約束してて・・・」

榎並先生「真面目だなあお前ら。まあこつちとしちやありがたい話だが。」

栄依子「シャワー浴びるとギリギリか・・・汗臭いかな・・・」

侑李「大丈夫よ。栄依子は何時も良い匂いだし。」

栄依子「でも・・・」

すると榎並先生が栄依子を嗅いだ。

榎並先生「別に。良い匂いだぞ。」

栄依子「そうですか・・・それは良かった。それじゃあ失礼します。また学校で・・・」

侑李「また後でね。」

榎並先生「おー。真っ直ぐ帰れよー。」

マンションから出た後。

栄依子（何?!? 何この勝ち試合だと思つたら最終回で逆転喰らつたみたいな感じは!?!）

侑李（先生つて、無自覚なのかな? でも赤面してる栄依子可愛いね。）

栄依子（侑李!!）

その日の朝の学校。榎並先生が窓から外を眺めてると。

花名「先生おはようございます。」

榎並先生「おお。一之瀬か。」

花名「あ、これ、プリント集めて来ました。」

榎並先生「おう。」

栄依子「花名。1枚忘れてる。」

そこに栄依子が一枚のプリントを持って来た。

花名「あ！ありがとう栄依子ちゃん！」

栄依子「いえいえ。おはようございます先生。」

榎並先生「・・・おう。」

栄依子「おはようございます。」

榎並先生「諄いな分かったよ・・・」

栄依子「お・は・よ・う・ご・ぎ・い・ま・す。」

榎並先生「・・・お・は・よ・う。」

栄依子「はくい。良く出来ました。」

榎並先生「調子乗んな。」

軽くチョツプした。

栄依子「いったあ・・・っ！」

何かを見た栄依子が榎並先生の両腕を掴んだ。

榎並先生「っ!?!」

首にあるネックレスに目を付けたのだった。

榎並先生「おい十倉・・・」

花名「栄依子ちゃん？」

栄依子「先生……これ……このネックレス……」

榎並先生「ああ……昨日買ったんだ。友人と会うまでの暇潰しにぶらぶらしてたら見付けてな。」

花名「綺麗なネックレスですね。」

榎並先生「ああ。良い色だろこれ。」

栄依子はネックレスに見惚れている。

榎並先生「十倉？おーい十倉どした？」

すると栄依子がバツと離れた。

栄依子「ああいえ……先生。凄く似合ってますそれ。」

榎並先生「お、おう……」

栄依子「じゃあ、日直して来ますか。行こ花名。」

花名「あ、うん。」

廊下。

花名「あの……栄依子ちゃん。さつき先生と話してた時栄依子ちゃん何かあったの  
かなって……」

栄依子「・・・花名。」

花名「は、はい!？」

栄依子「ちよつとだけ内緒話に付き合ってくれないかな?」

その後2人はある場所へ向かった。

花名「わあぁ〜!」

街が一望出来る場所だった。

栄依子「ここ良いでしょ。私の秘密スポット。」

花名（内緒話・・・秘密スポット・・・人には言えない話・・・すつごくやばい話・・・）

栄依子「花名?」

花名「栄依子ちゃん!大丈夫!何があっても私は栄依子ちゃんの味方だから!」

栄依子「ええ?」

花名「大丈夫だから!」

栄依子「心配しないで。そんな暗い話じゃないから。」

花名「そうなんだ・・・」

栄依子「あのね。先生が着けてたネックレスあるじゃない?」

花名「うん。」

栄依子「あれ作ったの私……」

花名「え……えく!?」

栄依子「私アクセサリー作るのが趣味なのね。これとか自分で作ってて。」

花名「そうだったの!?!」

何と榎並先生が付けてたネックレスは栄依子の自信作だった。そして栄依子が何時も付けてるヘアピンも栄依子の自信作だった。

栄依子「それでうちの母が雑貨店やってね。私の作ったもの置いてくれてるんだけど……」

花名「じゃあ先生がそれを? 栄依子ちゃんが作ったって事は……」

栄依子「知らないと思う。知ってたらあの人付けて来なさそう。」

花名「じ、じゃあ先生は気に入ったから買ったんだね!」

栄依子「うん。」

花名「凄いね! 凄い!」

栄依子「あのね……私の作ったもの買ってくれた人リアルで見たの初めてでね……それが先生でね……何か……何かね……凄く……」

花名「よ……良かったね栄依子ちゃん! 良かったね……」



栄依子「もう……どうして花名が泣いちやってるの……?」

花名「あ、ご、ごめん……ごめんね……」

すると栄依子が、花名を優しく抱いた。

栄依子「ありがとう花名。嬉しい。すつごく……」

花名「栄依子ちゃん……」

栄依子「……よし！内緒話おしまい！ま、誰かに話しちやつても問題無いから気にしないでね。」

花名「う、うん。」

栄依子「実はね。アクセサリー作ってる事人に言ったの初めてなの。」

花名「え!？」

栄依子「花名が初めて。」

花名「そ……そんな大事な秘密を教えてもらうの、私が初めて良かったのかな……」

栄依子「えく？私は話したのが花名で良かったって思ってるけど?」

花名「っ!」

榎並先生『お前らが仲良くなったって事だろ。』

花名（本当にそうなのかな・・・そうだと良いな・・・何時か私も話せるかな・・・自分の秘密を・・・皆に・・・）

自分の秘密を皆に言える日が来るのだろうか。

「END」

## STEP 8 「はなのともだち」

花名「あ……あの……高橋……さん？」

菜々恵「うん。高橋奈々恵。」

花名「その……えつと……日直遅れてごめんなさい！」

菜々恵「大丈夫大丈夫。私何時も早めだし。朝の作業も序でに終わらせといたよ。」

花名「そ……そうなんだ。ごめんね。ありがとう……」

菜々恵「ううん。後は放課後の日誌とゴミ捨てだけど、どっちが良い？」

花名「ど……どっちでも！お任せします！」

菜々恵「えく。好きな方取って良いよ。」

花名「じ……じゃあ日誌をゴミ捨てに行行って来ます！」

菜々恵「ええ……」

その後の廊下。

たまた「バナナチョコミントハワイアーン！」

優輔 「朝からテンション高いな。たまは。」

たまた 「朝のうちだと品揃えもばっちりですねぇ。」

栄依子 「ああ、昼過ぎだとバニラしかなかったりするのよね。」

花名 「バニラ美味しいのにな。」

侑李 「同感ね。」

たまた 「どうしても派手な方を選んでじゃうって言うかく。」

栄依子 「分かる〜。」

貴之 「確かになく。」

たまた 「花名ちゃんが朝アイスって珍しいですねぇ！」

花名 「朝寝坊してご飯食べて来れなくて・・・お弁当も忘れて来ちゃったし。折角志

温ちゃんが作ってくれたのに・・・」

たまた 「あらら・・・」

美鈴 「それは大変ね・・・」

花名 「日直の仕事でも緊張して変な事言って高橋さんを困らせちゃったし・・・」

たまた 「お〜！今日ははなななコンビで日直でしたかく。花がありますねぇ。」

優輔・侑李 「はなななコンビって何？」

栄依子 「奈々恵ってそんなに相手を緊張させるタイプでもないと思うけど・・・」

花名「うん．．．でも高橋さんと話すの初めてだったから。」

栄依子「え？」

花名「え？」

栄依子「だってもうすぐ1学期も終わりよ？」

花名「私クラスの人半分以上話した事無くて．．．」

たまたま・美鈴「何と！」

花名「中学の時もこんな感じだったよ。切欠無いと殆ど話さないまま1年終わっちゃうし。」

貴之「成る程ね。」

栄依子「んー。話す切欠なんて別に必要ないと思うんだけどな。」

たまたま「ですな。どなたでも近くに居たら話し掛けるというか。」

花名「そ．．．それは私には難しいな．．．」

貴之「人見知りがどんだけ大変なのは分かる。」

たまたま「とは言え花名ちゃんは私達とは普通にお話出来てる訳ですし。」

栄依子「そうそう。今だって別に緊張してないでしょ？」

花名「そうだけど．．．そうなんだけど．．．」

たまたま「あ、そろそろかむちゃんも来てるかもですね。」

優輔「そろそろか。」

栄依子「そうねえ。寂しがつてないと良いけど。」

美鈴「来たら私が可愛がつてあげよ〜と。」

貴之「止めとけ。」

花名（そう言えば冠ちゃんなら私の気持ち分かつてくれるかも・・・）

教室に戻ると。

陽菜「冠ちゃん！おやつあるよ。おいでおいで！」

冠「おやつ。」

おやつという言葉に反応した冠が、クラスメイトの佐々木陽菜と遠藤悠里と増田青の方へ歩いた。

青「私もクッキー持つて来た。食べる？」

冠「ん。」

悠里「チョコと苺どっちにする？」

冠「りよ・・・両方。」

陽菜「食べてる所写真撮つても良い？」

しかし冠が涙を流した。

陽菜「駄目か。もく可愛いな。」

冠「えーこ・・・えーこ・・・」

後ろから冠を撫でた栄依子。冠が栄依子に抱き付いた。

冠「えーこ！」

栄依子「おはようかむ。ごめんね？一人にしちやつて。」

侑李「相変わらず栄依子に懐いてるわね冠は。」

優輔「佐々木と増田と遠藤からちやほやされてたな。つてかさっきの餌付けだろ？」

花名（自分から動く事無く愛される・・・それこそがちやほや粹！ごくり・・・）

貴之「おい花名、目が死んでるぞ・・・」

一方その頃アパートでは。

志温「あ！万年さん！丁度良かったわ。」

大会「これはこれは大家さん！」

志温「あのね。お昼はまだかしら？」

大会「昼餉の用意は出来たのですが、飲み物が無かったのでお茶など購入して来た所です。コンビニで！」

志温「実は花名ちゃんが弁当忘れて行っちゃって。もし良かったら万年さん召し上がりませんか？」

大会「何と！花名ちゃんのお弁当をですか!?! 良いんですか!?!」

志温「お口に合うか分からないけど・・・」

大会「そうだ！宜しければ交換と言う事で私の昼食を召し上がりませんか？」

志温「(そうね・・・たまには・・・) それじゃいただいちゃおうかしら。」

大会「いやゝ手作りのお弁当なんて高校生の頃以来ですよ。今持って行きますので少々お待ち下さい！」

持って来たのは寿司だった。志温は少し唾然としてる。

志温「・・・あのこれ・・・良いんでしょうか？」

大会「どうぞどうぞ！わく！美味しそうですね！ありがとうございます！」

志温「あ。いえそんな。何かすいません。」



昼になつた星尾高校。

たまたま「えゝそれではゝ。花名ちゃんにクラスの皆を紹介しちやいましてよゝ！」

花名「え!?!え、あのその……」

優輔「急だなおい。」

栄依子「と言う訳で。」

侑李「周と真秀を連れて来たよゝ。」

真秀「小鹿野真秀でゝす。」

周「大谷周でゝす！」

花名「い……一之瀬花名でございます！」

たまたま「3人組の芸人さんみたいですなあ。」

貴之「レッゾゴ三匹かよ。」

花名「ご……ごめんね。つい緊張しちやって……」

栄依子「こないだ陸上部の新人戦だったんでしょ? どうだった真秀?」

真秀「いやゝ全然駄目でさゝ。」

花名「お……大谷さんはどうだったの!?!」

周「え？ああ、私マネージャーなんだよ。運動全然駄目なの。」

花名「え？そうなの？」

優輔「初めて知った。」

周「体育の記録順に走る時何時も一之瀬さんの隣に居るよ。気付かなかった？」

花名「た……体育は、自分の事だけで精一杯なので……」

周「ああ……」

美鈴「連れて来たよ。」

陽菜「佐々木陽菜よ。」

青「増田青。部活はバレー部。」

悠里「私は遠藤悠里。同じくバレー部ね。」

美鈴「いやあく同じ名前が2人居るなんて驚きだね。」

侑李「確かにそうね。」

花名「よ、宜しく……」

青「宜しく。良かったら今度見学に来てみる？」

悠里「何時でも部員募集中だよ？」

花名「きゅ．．．球技はちよつと難しいかな．．．」

陽菜「陸上も球技も厳しいとなると．．．水泳とか？」

花名「そそそれもちよつと．．．」

今度はたまたまが2人のクラスメイトを連れて来た。

敬「岩崎敬つす。」

幸「椿森幸です。」

花名「こ、こんにちは．．．」

敬「人見知り克服かく。協力するよ。」

花名「あ．．．ありがとう。」

敬「こつちのつばきちはクラス委員だからね。いっちもどんどん頼ると良いよ。」

優輔・貴之「いっち？」

花名「い．．．いっち？うん宜しく．．．」

幸「はい。宜しくお願ひします。」

シャケおにぎりを食べる。

花名「ご飯の途中にごめんね．．．」

幸「いえ。」

栄依子「お。またシヤケ？好きね。」

幸「うん。好きなの。」

栄依子「まあ定番だものね。」

幸「うん・・・だから私好きなの。」

顔を近付けた。

栄依子「幸・・・顔近い近い近い・・・」

優輔「おい椿森、どうした？」

すると幸がたまたまを掴んで何処かへ走り去った。

美鈴「たまちゃんが連れ去られた・・・」

敬「つばきちそんなシヤケ好きだったっけ？」

幸「シヤケには、エイコサペンタエン酸が豊富に含まれてるの。」

敬「栄依子？」

幸「エイコ、サペンタエン酸。うふふ。」

貴之（椿森・・・栄依子に目が無いのか？）

侑李（完全にヤンデレね。）

優輔（しかもエイコサペンタエン酸って、高血圧、炎症の予防や癌細胞の増殖防止などに効果ある酸じゃねえか。）

花名「ふう・・・」

栄依子「何だ。普通に話せてるじゃない。」

花名「そ、そうかな・・・でも栄依子ちゃんとたまちゃんと侑李ちゃんと優輔君と貴之君と美鈴ちゃんが助けてくれたから・・・」

たまて「いやいや。私達の助けなんて大した事ありませんよ。」

美鈴「そうそう。」

栄依子「そう言えばかむも、時間掛かるタイプよね。」

冠「うん。でももうたまと花名と優輔と貴之と美鈴には慣れた。」  
たまて「にやあ！じゃあこんな事しても！」

美鈴「大丈夫よね〜！」

2人が冠を抱いた。

花名「あ！冠ちゃん耐えてる！」

たまた「我慢してるかむちゃん可愛い〜！ほくらほら、このほっぺにどれだけ食べ物貯め込んでるんでちゅか〜？」

美鈴「ハムスターみたいで可愛い〜！」

貴之「おいお前ら止めろ。冠が可哀想だろ？」

優輔「相変わらずの冠好きだな。」

その日の放課後。

榎並先生「今日は沢山のクラスメートと話せて良かったと思います・・・何だこりや？」

花名「あの・・・皆にクラスメートを紹介してもらって・・・」

榎並先生「紹介？」

花名「まだ殆どの人と話した事無かったので・・・」

榎並先生「ああ。なるほどな。」

印に丸を書いた。

榎並先生「私なんか話さなくて済む相手なら、わざわざ話そうとは思わんがな。」

花名「あはは……」

榎並先生「無理する事無いさ。一之瀬は一之瀬。自分のペースでな。」

花名「はい……」

廊下を歩く。

花名（自分のペースかあ……）

教室に戻ると。

菜々恵「お疲れ様。ゴミ捨ても終わったよ。」

花名「た、高橋さん、お疲れ様……（そ……そうだ！今度こそ高橋さんと……何か話題は……）」

菜々恵「？」

花名「あ、あの、えつと、その、えつと……」

菜々恵「じゃあ私これから部活だから。また明日ね。」

花名「あ……うん。また……」

話す事が出来なかつた。花瓶を見ると向日葵があつた。

花名「うん……次は絶対私の方からおはようって言おう……」

数日後の軽井沢アウトレットパーク。

たまた「ヌーデイストビーチの海の家つてやつぱり、全裸で焼きそば焼いたりするんですかね？」

栄依子「あはは。油跳ねたら痛そうね。」

優輔「それこそ全身火傷だぞ。」

冠「焼きそば食べたい。」

貴之「焼きそばの話に入った？」

花名「せ、せめてエプロンくらいはしてるんじゃないかな・・・」

侑李「そうよね。調理中はエプロンしないとね。」

たまた「裸にエプロンですか。花名ちゃん侑李ちゃんもマニアックですね。」

花名「え、え!？」

侑李「何で裸エプロン!？」

たまた「でもやつぱり夏は海に行きたいですよね。ヌードじゃない方の。」

冠「水着着る方の。」



美鈴「それは分かつてる。」

栄依子「あ、私水着欲しいのよね。中学の頃のがサイズ合わなくなっちゃって。後で付き合つてくれる？」

花名「うん。」

たまた「何処のサイズですか？腹ですか？」

栄依子・侑李「いきなり喧嘩腰だな・・・」

美鈴「目が怖いよたまちゃん・・・」

栄依子「えつと・・・胸がね。ちよつと。」

美鈴「大きい胸だね。」

たまた「あはははは！お戯れを！胸が育つとか何処の都市伝説ですか？」

栄依子「都市伝説つて・・・」

花名「そうだよ栄依子ちゃん。そんなの都市伝説だよ。有り得ないよ。」

栄依子「ええ・・・」

冠「栄依子。痛い。」

花名「もう高校生になるんだから！」

たまた「そんな事信じていてどうするんですか〜！」

栄依子（わく。これが数の暴力つて奴か〜・・・）

優輔・貴之・侑李・美鈴「何だこれ？」

ベンチで休憩する。

たまた「とは言え、実は私も新しい水着欲しかったりするんですよ。」

栄依子「あら？遂にお尻が収まらなくなったの？」

たまた「ぷきー！そんな訳無いですよー！恐らく多分！」

貴之「やられたら、やり返す。」

優輔「倍返しか。」

たまた「前に来てたの気に入ってたのですけどね・・・ウォータースライダーやりすぎてお尻の生地が薄くなってしまいました・・・」

栄依子「わんぱくねこの子は。」

侑李「どんだけウォータースライダー好きなのよ。」

栄依子「花名は？水着。」

花名「あ。中学の時も学校にプールが無かったから。海に泳ぎに行く事なんて考えた事も無かったし・・・」

たまた「行きましょう！皆で行きましょう花名ちゃん！してかむちゃんは？」

冠 「学校指定の奴なら。丈の股下まである奴。」

美鈴 「スク水？」

たまた 「あくあの浪漫の無い奴ですか。あんなの滅びれば良いと思いませんか？」

優輔 「浪漫の無い奴って何んだ？それに滅びろって・・・」

栄依子 「そう？太ももの所に指挟んだら気持ち良さそうじゃない？」

たまた 「確かに！」

美鈴 「良いかも！」

花名・優輔・貴之・侑李 「ええ!？」

たまた 「侑李ちゃんは水着はあるんですか？」

侑李 「私もそろそろ新しいの欲しい所なの。優輔達はどう？」

優輔 「去年海で履いた海パンがある。」

貴之 「俺も同じく。」

美鈴 「前に着た水着が着れなくなっちゃったの。」

たまた 「じゃあじゃあ折角ですし皆で水着ショップに行きましよう！そして皆でヌー

ティストビーチに！」

栄依子 「それ水着いらなくない？」

水着ショーツプに来店した。優輔と貴之は外で待機。

花名「水着の試着ってどうすれば良いの？」

たまた「そもそも全裸ですよ全裸！」

花名「全裸!?!」

栄依子「上は脱ぐけど、下は下着の上からね。」

花名「な、成る程。」

栄依子「なので今日は手持ちで一番小さい奴履いて来た。」

侑李「何故!?!」

たまた「見たい!」

美鈴「見せて!」

栄依子「見せない。」

美鈴「そんなあ。」

たまた「ちえ。どんなのです!?!全部紐で出来てるような奴ですか!?!」

栄依子「そんな傾き方はしてないかな。流石に。」

試着室で服を脱いで、水着姿でカーテンを開けた。

栄依子「どう？」

たまたま・美鈴「エロい。」

栄依子「身も蓋も無いな・・・」

花名「でも確かに大胆だよね・・・」

栄依子「そう？」

たまたま「しかしそれより何よりそのビキニに隠れるようなパンツが、どんなのだから気になって気になって！」

今度は花名が水着を試着した。

花名「どうでしょう・・・」

栄依子「どうと言われても・・・」

たまたま「顔しか見えませんよね。」

顔だけを出してる花名。

花名「そ、そうだよね・・・」

栄依子「顔はね。可愛い。」

花名「え!? ふ、ふにゆ!!」

恥ずかしくなつて隠れた。

冠「隠れた。」

たまた「か〜! 栄依子ちゃん隙が無いですね!」

美鈴「見事な口説き上手だね〜!」

カーテンを開けた。

栄依子「ちよつと失礼します〜。お可愛い! その色似合うわね花名。」

たまた「本当だ! 可愛いですよ花名ちゃん!」

侑李「あら可愛いじゃない花名!」

美鈴「花名ちゃん可愛い〜!」

冠「うん。良いと思う。」

花名「う、うん、ありがとう・・・」

たまた「しかし我々・・・外側から見るとちよつと中々間抜けなご様子ですよね〜。」

侑李「確かに。」

栄依子「ん〜、そうね〜。」

花名「ご、ごめんね。」

今度はたまたまが水着を試着。

たまたま「ばばーん！」

栄依子「何処で発見したのその水着は・・・ヒトデ？」

たまたま「星ですよ！スターですよ！普通に売り場に置いてありましたよ〜！」

栄依子「ああ・・・これが盲点って奴か。」

侑李「モーテン星ね。」

花名「生理的に見るの避けてたのかな・・・」

たまたま「ひどい！で、どうです？」

冠「似合う。」

侑李「似合うわね。」

美鈴「似合うね〜。」

栄依子「うん。似合う。」

花名「に・・・似合う。」

栄依子「けど・・・」

たまって「けど？」

花名「似合って良いものなのかな・・・これ？」

栄依子「誉め言葉になってるのか微妙よね。」

侑李「確かに。」

たまって「ひどい！」

花名「あ。冠ちゃんは試着しなくて良いの？」

冠「もう買った。」

花名「え？何時の間に？」

たまって「試着しなくても大丈夫なんですか？いざ来てみたら四方八方からあれこれポ

ロポロはみ出したりしませんか？」

栄依子「何がそんなにはみ出すのよ・・・」

冠「試着しました。栄依子と一緒に。」

たまって「・・・あ！居た！」

花名「確かに。」

美鈴「栄依子ちゃんに隠れながら試着してたのね。」

侑李「相変わらずの冠ね。」

たまって「かむちゃんかむちゃん。栄依子ちゃんのパンツ小さかったですか？」



冠「へっ。凄く傾いてた。」

栄依子「こーら。」

外は夕方になった。

優輔「やつと買ったのか。」

侑李「皆の試着に時間掛かっちゃって。」

たまた「花名ちゃん。泳ぎは行けるクチなんでしょうか？」

花名「泳げないよ！あれだけ運動が不得意なのに泳ぎだけ得意とか無いから！私ペンギンじゃないんだから！ペンギン、じゃ、ないん、だか、らく！」

栄依子「既に動きはペンギンっぽくい。」

冠「可愛い。」

貴之「花名落ち着け。」

栄依子「ま、溺れても私達が助けるから大丈夫よ。」

冠「7人も居るから安心。」

たまた「そうそう！大船に乗ったつもりで！」

優輔 「溺れる前提で言うなよ。」

美鈴 「もし溺れたら人工呼吸してあげるからね。」

花名 「え!？」

貴之 「止めんかアホ。」

軽井沢駅。

たまた 「では水着も揃いましたし今度の休みはやはり!皆で海ですね!」

栄依子 「そうね。皆で行きましょう?」

たまた 「花名ちゃんのお家は駅に近いですし、前日から泊まり込みってのはどうでしょうか?」

冠 「ん。時間も有効に使える。」

栄依子 「どうかな?花名。」

花名 「大歓迎だよ!楽しみだよ!楽しみ楽しみ!ウエルカム!ウエルカム!ペンペン

!ペンペン!」

たまた 「たまたもペンギンに。」

栄依子「可愛いなあ。」

優輔「ペンペンって何だよ。」

貴之「白ねずみオペンペン？」

侑李「IPPONグランプリ？」

その夜。アパートの風呂。花名が浴室に潜って顔を上げた。

花名「……よし！もう一回！」

翌日のアパート。時刻は6時半。

花名「おはよう志温ちゃん！」

志温「おはよう。早いのね。今日も日直なの？」

花名「ううん。今日は朝ごはんの支度とお弁当手伝わせてもらおうと思つて。」

志温「ふふ。じゃあお願いしようかしら。」

花名「うん！この前は折角のお弁当を忘れちゃってごめんね。」

志温「ふふ。良いのよ？今日のお弁当は何にしようかしら・・・」

2人で弁当を作る。すると花名が。

花名「あれ？」

弁当箱が3つあった。

花名「お弁当3つも・・・」

志温「私と万年さんの分もね。」

花名「大会さんの？」

その頃佐野家では。

優輔「姉ちゃん行って来ます。」

麻衣子「行ってらっしゃい優輔。お弁当持った？」

優輔「ああ。今日は姉ちゃんの手作りだろ？」

麻衣子「そうよ？残さず食べてね？」

優輔「ありがたく頂くぜ。じゃあ行つて来ます。」  
自転車に乗つて登校する。

麻衣子「氣を付けてね〜!」

星尾高校では。

花名（高橋さんだ・・・）

花壇の方へ向かう菜々恵を見付けた。

花名（どうしよう・・・でもでも今度は私から挨拶するつて決めたんだし・・・）  
深呼吸して気持ちちを落ち着かせる。

花名「あの！高橋さん！おはよう！」

勇氣を出して菜々恵に挨拶した。

菜々恵「おはよう。一之瀬さん。」

花名「（やつと言えた・・・）あ・・・お花・・・」

花壇に水をやる。

花名「ふう……」

菜々恵「大丈夫？」

花名「う……うん。毎朝こんなに頑張ってたんだね。凄いなく。」

菜々恵「今週が園芸部の当番なだけなんだけどね。」

花名「でも凄いよ。お花育てるのって大変なんだね。綺麗だなあ……」

菜々恵「……ねえ一之瀬さん。もう少ししたらここの花壇いっぱい、ミニひまわりの花が咲くの。」

花名「わく凄いね。今よりもっと綺麗なんだろうなく。」

菜々恵「あのね。またその時に誘っても良い？」

花名「あ……うん！高橋さん！」

こうして花名に新しい友達が出来たのであった。

「END」

## STEP 9 「ゴリラのみずぎ」

しかし翌日、まさかの雨が降っていた。たまと美鈴は啞然としていた。

栄依子「あら〜。天気予報じゃ晴れだったのに〜。」

優輔「まさかの雨とは前代未聞だな。」

冠「海、どうする?」

栄依子「これじゃあ、ちよつと無理よね・・・」

侑李「今日は、諦めるしか無いわね・・・」

花名「・・・・・・」

たまと「花名ちゃん!」

美鈴「どうしたの!?!泣いてるの!?!」

花名「た、楽しみにしてたのに・・・泳ぐの・・・練習頑張ったのに・・・」

たまと・美鈴「花名ちゃん・・・」

それに続いてたまとと美鈴も涙を流した。

たまと・美鈴・花名「うわああああああん!!!!」

3人は大声で泣いて、抱き合った。

栄依子「あらあら、こっちも大雨だ。」

貴之「大雨のオンパレードだな。」

冠「栄依子、侑李、優輔、貴之。」

栄依子・侑李・優輔・貴之「ん？」

何かを閃いた冠が4人に話した。

花名「ほ、本当は水着も楽しみしてたのに・・・」

たまた「水着ギャルーーーー!! イベントスチルーーーー!!」

美鈴「雨のバカーーーーー!!」

冠「花名、たま、美鈴。」

花名・たまた・美鈴「え・・・？」

栄依子「じゃーん！」

水着姿の5人が立っていた。

たまた・美鈴「~~~~~!!!」



花名「ど、どうしたの？皆……？」

侑李「簡単よ。海は無理でも、ここで水着を着れば気分が晴れるかもよ？」

花名・たまため・美鈴「……………」

3人も水着に着替えた。

たまため「ば〜くん!!」

3人の水着姿を見て、栄依子と冠と侑李がサムズアップした。

たまため「いや〜！まさかの室内水着ルートとは驚きましたね！」

花名「ルート？」

たまため「そして更に、紐ビキニでハラリーイベントの回収も！」

栄依子・侑李「ん？」

2人のビキニの紐を引っ張ってみる。

たまため「そーれ！」

美鈴「オーブン！」

紐を引っ張る。優輔と貴之が後ろを向いた。しかし、ビキニは取れなかった。

たまため「え？」

美鈴 「あ、あれ？」

侑李 「残念ね。その紐は飾りよ。」

栄依子 「はい。返して？」

紐を結ぶ。

たまた 「こんなの差分でも許されませんよー！！」

美鈴 「お姉ちゃんも許しませんよー！！」

花名 「差分？」

優輔 「考えない方が良い。」

布団の上で泳ぐ冠。

冠 「これから何する？」

たまた 「何しましょうか何しましょうか！折角水着なんですから！」

栄依子 「あ。宿題のプリントで分からない所があったのよ。花名、教えて？」

花名 「え？何処？」

たまた「ぎやああああああ!!!」なして宿題とか持ち込んだりゃってるんですか!!!

美鈴「折角のムードが台無しだよ!!!」

栄依子「いやほら、チャンスがあつたら聞こうかなって。」

優輔「栄依子、抜け目無いな。」

花名「あ、これはね。」

栄依子「お！助かる〜！」

貴之「解くの早いな花名は。」

たまた「花名ちゃんも何でサラツと受け入れてるんですか!!!」

美鈴「いやたまちゃん、2人をじっくり見て？」

たまた「え？」

花名と栄依子をじっくりと見ると。

たまた「わあく！水着ギャルの学習姿！悪くない！悪くないですぞ！」

美鈴「でしよでしょ！」

冠「たま、美鈴、声大きい。」

たまた「やや？かむちゃん、そのお箱は？」

美鈴「何それ？」

冠「アツプルパイ。列車で食べようと思って持って来たんだけど・・・」

栄依子「アップルパイ!? 食べたーい!」

冠「ここで食べるなら温めたい。温めた方が絶対に美味しい!」

花名「じゃあ、温めてお茶にしようか。」

冠「温める所、見る!」

花名「ウチのは回るよ?」

するとたまと美鈴が何かに目覚めた。

たまと「栄依子ちゃん!」

美鈴「侑李ちゃん!」

栄依子「ん?」

侑李「何?」

たまと「花名ちゃんの、その・・・お胸がですね・・・ちよつと大きくなつてないで

すか・・・?」

美鈴「見間違いかもしれないけど、2人はどう思ってるの・・・?」

栄依子「まあ成長期だしね。」

侑李「成長期で大きくなるのは当たり前前かも?」

たまと・美鈴「お胸が成長する!?!と、都市伝説じゃなかったと言うんですか!?!」

優輔「あの2人楽しそうだな。」

貴之「だな。」

2人は呑気にゲームをやってる。

たまた「遺伝もあるんですかね・・・花名ちゃんの従姉さんもお胸がドバーンとなってますし。」

栄依子「ドバーン？」

侑李「どう言う事？」

たまた「と言うか、かむちゃんにしても結構ありますよね？」

美鈴「あるよね〜。」

栄依子「結構・・・ね。」

たまた「ま、まあ我らは成長途中なので、そんなに気にする事ではないですよ〜！」  
美鈴「そうそうないない！」

栄依子「こう触ってみて痛みがあるなら、成長途中って言えるわよね〜。」

侑李「私のは痛みは無いけど・・・」

自分の胸を触ってみた。

たまた・美鈴「っ!!」

2人も自分の胸を触ってみる。痛みが無い為何度も触る。そしてドラミングで自分の胸を叩く。

栄依子 「いやちよつと、ゴリラのドラミングじゃないんだから……」

貴之 「サゴーズか？」

侑李 「何時まで叩いてるのよ。もう良いでしょ？」

たまた 「失礼な！ゴリラのドラミングがグーじゃなくてパーです！」

栄依子・侑李 「ええ？」

優輔 「ドンキーコングは普通にグーだぞ？」

たまた 「謝って下さい！ゴリラに謝って下さい！」

栄依子・侑李 「ご、ゴリラさんごめんなさい……」

優輔 「何だよあの会話……」

貴之 「何故ゴリラに謝った……？」

たまた 「許さへんで〜！」

美鈴 「許しまへんで〜！」

優輔・貴之 「許せよ！」

花名 「ど、どうしたの？」

冠 「ドラミング？」

たまで「ドラミングはグーでなくパーです！謝りなさい!!」

美鈴「早く謝りなさい！」

冠「ごめんね。ゴリラ。」

たまで・美鈴「良えんやで。」

優輔・貴之「冠だけ許すなよ！」

栄依子「それで胸は痛んだの？」

たまで「心が痛んだ気がしますけど・・・」

美鈴「心が痛い・・・」

たまで「あ！分かった！」

美鈴「何が分かったの!？」

たまで「筋肉痛みたいに数日後に痛くなる奴ですよ！これ！」

美鈴「成る程！しばらくしたら結構痛くなるかもね！」

栄依子「たま、美鈴。それは成長じゃなくて老化じゃないかな？」

優輔・貴之「的確なツッコミ。」

するとたまでが栄依子の後ろを抱いた。

栄依子「どうした？」

たまで「どうだ〜い？男子に抱きしめられてるみたいじゃろ〜？」

栄依子「男子ってこんなにプニプニしてるの？優輔、貴之、男子ってプニプニしてるの？」

優輔「プニプニしてねえよ。」

貴之「勝手に妄想すんなよ。」

美鈴「じゃあ優輔と貴之！2人で栄依子ちゃんを抱いてみてよ！」

優輔・貴之「やるかアホ!!」

一方大会の部屋では荷物が届いてた。

大会「母さんからだ！『美味しいライチです。沢山食べなさい』。」

荷物の中には大量のライチが入っていた。

大会「多過ぎるな・・・！」

半分を花名にお裾分けする事にした。

大会「日頃お世話になってるし、花名ちゃんにお裾分けしよう！」

インターホンを押した。



大会「多過ぎるかな〜？」

栄依子『はあくい！』

大会「あれ？」

栄依子『ちよつと待って下さいね〜！』

ドアを開けた栄依子。次の瞬間。

大会「っ!」

部屋を覗くと水着姿の花名と冠と侑李が仰向けになつて両足を上げて、たまと美鈴がエプロンを着て踊っていた。優輔と貴之はまだ呑気にゲームをやつてる。大会はこの光景を見て言葉が出なかつた。

その後訳を話した。

大会「な、成る程・・・それで水着を。」

花名「はい・・・」

優輔「見苦しい所を見せられてしまいましたね。」

たまと「フッフッフ。この部屋の秘密を知つたからには、万年お姉さんにも水着ギヤルになつてもらいますよ〜！」

大会「ええ!？」

貴之「何でだよ。」

栄依子が捕まえた。

侑李「栄依子の暴走が始まったわ。」

大会「いやいや！残念ながら水着など所持しておらぬが故に！」

栄依子「大丈夫ですよ。私の予備がありますから。」

貴之「予備あるんかい。」

隣の部屋に入って、大会に水着を着させる。

大会『アアアアアアア！ああん・・・』

優輔・貴之「ブツ！」

そして部屋の引き戸を開けた。

花名・たまたて・美鈴「わあああ!!」

水着姿の大会を見て驚いた。

たまたて「ハッハッハッ！恥ずかしがっても身体は水着じゃないですよ！」

栄依子「そりゃあそうでしょ。」



ビキニの紐を結んであげる。

侑李「2人共入って。」

2人が戻って来た。

貴之「大会さん、気を付けて下さいよ。」

大会「ごめん・・・」

優輔「つてか栄依子、紐で結んでる奴だつて先に言ってくれよ。」

栄依子「ごめんごめん。」

その後全員がライチを食べる。

栄依子「美味しい〜!」

侑李「ライチ美味しい!」

花名「大会さん、ありがとうございます!」

大会「いやいや此方こそ。母親が大量に送って来て、どうしたものが困ってたんだ。」

花名「ら、ライチを大量に?」

冠「良いお母さん。」

栄依子「ライチの皮つてピンク色もあるのね。」

花名「あ、私も茶色のしか知らなかった。」

優輔「どっちも同じなんだ。新鮮なのはピンク色。しかし鮮度が落ちると徐々に茶色になるんだ。」

花名「詳しいんだね。」

優輔「だって俺の家飲食店だし、ライチのミルクイージーベツトを作る時は何時もピンク色のライチを使うんだ。」

冠「新鮮なライチ。美味しい。」

たまた「何だかそれtkbみたいですね。」

花名・大会「ええ!？」

優輔・貴之「ブツ!？」

冠「新鮮なtkb。美味しい。」

優輔・貴之「下ネタ言うな!!」

栄依子・侑李「ぷはははははははははは!!」

花名「たまちゃん!冠ちゃん!!」

優輔「侑李まで笑うなよ!!」

侑李「ごめんごめん・・・」

貴之「つつか俺と優輔が居るこの場所で下品な発言は止めろ!」

栄依子「2人共tkb興味無いの？」

優輔・貴之「あるか!!」

机の上に置いてある花名の携帯に着信音が鳴ってるが、誰も気付かない。

通話相手は志温だが、誰も出て来なかった。

志温「返事来ないわね。」

すると花名達の声が聞こえた。

志温「？」

花名の部屋へ行ってみる事に。

志温「何だか凄い声が聞こえたんだけど、大丈夫かしら？」

インターホンを押す。するとたまたまがドアを開けた。志温は啞然とした。全員が水着姿になつてゐる事を。

優輔「志温さん!?!」

花名「し、志温ちゃん!これはその・・・」

志温「うん。大丈夫よ。分かったから。」  
ドアを閉めた。

花名「し、志温ちゃん!!」

優輔「志温さん……」

大会「こ、こんあられもない姿を見られてしまって……今後どうやってご近所付き合ひして行けば……!?!」

たまた「大丈夫ですよ! 万年お姉さん! あられもなさで言えば、栄依子ちゃんと侑李ちゃんの方が遥かに上ですから!」

侑李「こら!」

栄依子「たま、それフオローになつてないから。つて言うか私、いきなりこの格好つて……出禁になつたりしないかしら……」

侑李「管理人さん怒つたりしないかな……」

花名「どど、どうしよう……志温ちゃんに変な誤解されたら……」

優輔「志温さんに通じて姉ちゃんに怒られたりしたら俺どうなるのやら……」  
するとドアが開いた。

花名・栄依子・優輔「ん?」

何と志温が水着姿になっていた。

志温「改めまして、こんにちは！」

優輔・貴之「志温さん!？」

花名「し、志温ちゃん!？そ、その格好で出て来たの!？」

貴之「誰かに見られたらどうするんですか!？」

志温「3秒ルールよ。花名ちゃん。優輔君。貴之君。」

優輔「食べ物や床に落としたりしたみたいに言わないで下さい!！」

10人が水着姿になってしまった。

志温「京塚志温です。花名ちゃんが何時もお世話になってます。」

栄依子「十倉栄依子です。此方こそ、花名ちゃんには何時も仲良くしていただいています。」



侑李「億崎侑李です。初めまして。」

美鈴「松原美鈴です。宜しくお願いします。」

冠「せ、千石冠……です。」

志温「まあ！可愛い！」

栄依子「でしよ？」

優輔「つてか水着姿で自己紹介って……」

貴之「ぶっ飛んでんなあ……」

すると冠が志温の胸を見た。

冠「ライチ、新鮮。」

栄依子「こら。」

侑李「それは言わないの。」

花名「それで志温ちゃん、どうかしたの？」

志温「あ、そうそう！メールしたんだけど気付いてないみたいだったから。ほら、家から少し行った所にあるリゾートホテル。温泉プールがあるんだけど、折角水着があるんだし泳ぎに……」

たまた「ぶわあああああ!!!そうですよその手がありましたよ!!!」

美鈴「発想してなかった!!!」

たまたま「行きましようプール今すぐに!!!」

花名「う、うん！行きたい！」

栄依子「じゃあ今から行きましようか。」

冠「うん。」

侑李「温泉プールなんて私初めて！」

優輔「そうだった、近くにリゾートホテルがあつたのを忘れてた。」

貴之「俺も同じ事を考えてた。」

大会「ああじゃあ私はお暇・・・」

志温「じゃあ、私は万年さんと賛成しようかしら。」

大会「私の意思は!?!」

7人「皆でプールだー!!」

優輔・貴之「その前に着替えろー!!」

リゾートホテルに到着。

温泉プール。

花名「凄い！綺麗なプール！」

たまた「貸切状態じゃないですか！ヒヤッホー！！！！」

美鈴「ヤッホー！！！！」

栄依子「こーら！走っちゃダメよー！」

2人は温泉プールに飛び込んだ。

全員で温泉プールに入る。

冠「極楽極楽。」

栄依子「かむ、お風呂みたいになってる。」

冠「水が温かいから。」

侑李「温泉プールってこんな感じなのね。気持ち良いく……」

優輔「温泉プール久し振りだな。」

貴之「中3以来だな。」

花名「お、大きなお風呂だっと思えば、そんなに怖くないね！」

たまた「あんまり説得力無いですな。」

花名「泳ぐ練習はしてきたんだよ!?!」

栄依子「おおう。」

たまた「では、その成果をご披露いただきましょうか！」

花名「う、うん！」

まずは潜る。10秒後。

花名「ぷはあ！じ、10秒は潜れるようになったんだよ！」

たまた「それは・・・凄い進歩なんでしょうな・・・多分。」

優輔「つてかそれ泳いでないだろ。」

冠「泳いでない。」

花名「ふい!?そ、それはまだレベルが高過ぎて・・・」

栄依子「まあ、1歩ずつよね。」

侑李「少しずつ精進しようね。」

その頃志温と大会は。

大会「え、エステ・・・ですか？」

志温 「以前お寿司をご馳走になりましたから、そのお礼に。」

大会 「いやいや！寧ろ大家さんに何時もお世話になつて私の方が、お礼をする立場と申しましようか・・・エステなんてととても・・・」

志温 「遠慮なさらずに。お肌がツルツルになりますよ？」

大会 「ツルツルになつても見せるのはコンビニ店員のお姉さんぐらいなのだが・・・」

その頃花名は泳ぎの練習をしていた。温泉プールの端を掴んでバタ足をする。

侑李 「良いよ良いよ。その調子。」

優輔 「いやゝ温泉プールは良いなゝ。」

貴之 「極楽だなゝ。」

この2人はゆったり浸かつてる。

平泳ぎしてゐるたまで。背泳ぎしてゐる冠。クロールしてゐる美鈴。

たまで 「かむちゃん泳ぐの上手ですなゝ！」

美鈴 「上手だねゝ！」

冠「ん。水に浮くのは好き。」

たまた「気持ち良いですよね。私は水の中から水面を見るのが好きですよ。」

美鈴「私も同意。」

冠「分かる。」

たまた「いやあ、栄依子ちゃんや侑李ちゃんが近くに居なくても、本当に普通に喋ってくれるようになったな。」

美鈴「本当。冠ちゃん可愛い。」

すると冠が膨れっ面になって潜った。

美鈴「冠ちゃん!? 鼻に水入っちゃうよ!?!」

たまた「かむちゃんカムバツク! かむだけに!!」

その頃2人はエステをしていた。

大会「良いのだろうか。・・私のような者が、こんな王様みたいな目に遭って良いのだろうか。・・」

志温「うふふ。良いですよ。」

同じ頃花名は、栄依子の手を持って泳ぎの練習をしている。

侑李「良いよ良いよその調子。」

花名「ごめんね栄依子ちゃん、侑李ちゃん。」

栄依子「ん？」

侑李「急にどうしたの？」

花名「ずっと練習、うわっ！付きうわ!!あつぶあつぶ!!」

喋ってる最中に水が口に入った。

栄依子「うんうん。全然気にしなくて良いからお口閉じててね。」

侑李「口に水が入ってるよ？」

冠は浮き輪に乗ってプカプカ浮いてる。

優輔「花名どうだ？泳ぎの練習頑張ってるか？」

花名「う、うん・・・」

たまた「花名ちゃん！栄依子ちゃん！侑李ちゃん！優輔君！貴之君！」

栄依子「ん？たまのそれ、犬掻き？」

貴之「美鈴も犬掻きか？」

たまた「へへーん！犬掻き得意なんですよ〜！」

美鈴「私はさつきたまちゃんに教えられたんだ〜！」

犬掻きで泳ぐ。

たまた「どうですか!？」

美鈴「上手でしょ!？」

栄依子「ゴリラだったり犬だったり、忙しいわね。」

たまた「女豹の時もありますわよ〜？」

美鈴「めひよ〜！」

優輔「何が言いたいんだお前ら？」

同じ頃2人はエステ中。

大会「花名ちゃん達が仲良くしてるのを見ると、眩しいような、些か切ないような気がします。」



志温「分かります。自分にもあんな頃があつたなうって。」

大会「花名ちゃんは素晴らしい友人に恵まれましたな。」

志温「その中には、万年さんも入ってますよ?」

大会「わ、私もですか?!いや・・・それは光栄ですが・・・」  
背中にオイルが乗った。

志温・大会「つ!!」

大会「・・・おっふ。」

志温「まあ、大人には大人の楽しみがありますから。」

大会「そ、そうですね・・・」

その頃花名はビーチチェアで眠っていた。

優輔「花名、疲れて寝ちやったか。」

たまた「花名ちゃん物凄い疲れてましたね。」

栄依子「真面目に練習してたからね。」

侑李「頑張ってたものね。」

冠「疲れてる時は甘い物。」

貴之「かもな。」

栄依子「お姉さん！とびつきり甘い奴下さいな！」

美鈴「私もとびつきり甘い奴！」

栄依子「ねえ、今朝の事覚えてる？私ね、花名が泣いてるのを見て何か嬉しくなっちゃって。」

侑李「え？」

栄依子「花名って、私達と遊ぶ事を本当に楽しみにしてくれているな〜って。」

たまた「そうですね！お泊まりとか凄いウエルカムしてくれますし！」

冠「置き菓子もウエルカム。」

美鈴「もう何時でもウエルカムだね！」

優輔「そう言えば、花名に釣られて泣いた子達が居たような気がしたんだが・・・」

たまた・美鈴「わあああ!!うう・・・」

自分の事だと自覚したたまたと美鈴が恥ずかしくなった。冠と侑李がたまたと美鈴を撫でる。

冠「よしよし。」

侑李「良い子良い子。」

たまた「があああ!!時間差で慰めるのは止めて下しやあああ!!」

美鈴「もつと早く慰めてよおおおお!!!」

2人はドラミングをした。

冠「これはドラミングじゃない。」

侑李「パーじゃなかったの？」

同じ頃、花名が目を開けた。

花名（海に行けなかったのは残念だったけど、それならそれで、こんな楽しい事があるんだな。）

起きて、テーブルに手を置いた瞬間。

花名「あ！」

栄依子の大事な物が温泉プールに落ちてしまった。

花名「ああああ!!どど、どうしよう!!あれ栄依子ちゃんの!!ひろ、ひろ、拾わないと!!そうだ!これがあれば!!」

冠の浮き輪を持った。

花名「これを、こうして、こう!・・・あ、あれ!？」

浮き輪を潜ろうとしたが、サイズが小さかった為、顔辺りで引っ掛かってしまった。

花名「ど、どうしよう・・・」

そこに栄依子達7人が戻って来た。

栄依子「何事なの!？」

たまた「一体誰が花名ちゃんをこんな目に!!!」

美鈴「許さへんで!!!」

花名「わ、私が・・・!？」

たまた「貴様か!!!」

優輔「おい花名どうした? 冠の浮き輪を持つて。」

花名「あ、あの! 栄依子ちゃん! 私、栄依子ちゃんのアレを落としちゃって!」

たまた「ええ!? あれですか!? 一大事じゃないですか!!」

花名「そそそ、そうなの! だから私、潜って拾おうって思ってた!!」

貴之「だから浮き輪を持つてとうとしたんだな。」

冠「潜るのなら、浮き輪いらなと思う。」

花名「あ・・・」

たまた「言ってしまいましたねかむちちゃん。」

侑李「正論ね。」

栄依子「あはつ。大丈夫よ。濡れて壊れる物でもないし。」

たまで「でも無くしたら大事ですよ！私、探して来ますね！」

優輔「俺も探すから心配するな。」

花名「あ、ありがとう・・・」

ジュースをテーブルに置いて、花名を浮き輪から外す作業に入る。

栄依子「兎に角、これを外さないかね。」

花名「お、お願いします・・・」

貴之「行くぞー。せーの！」

浮き輪を花名から外した。

花名「あ、ありがとうございます・・・」

栄依子「花名。」

花名「ん？」

栄依子「泳げないのに取りに行こうとしてくれて、ありがとう。」

花名「・・・」

優輔「おーいあつたぞー！」

たまで「栄依子ちゃんのtkb!!」

優輔・貴之「ブツ!!」

花名「ええ!?!」

栄依子「いや付いてる付いてる。」

優輔「たま!!下ネタ言うなよ!!」

女子更衣室。

花名「楽しかったね〜!」

冠「ん。」

侑李「良い運動になったかも。」

たまた「でも、絶対海リベンジしましょうね!」

美鈴「そうだよ!今度こそ海行きたいね!」

栄依子「そうね。大会さんも志温さんも誘って。」

花名「うん!」

男子更衣室。

優輔 「いや〜面白かった〜。」

貴之 「温泉プール気持ち良かったな〜。けど海行けなかったのはちよいと残念だったけどな。」

優輔 「今夏休み中だから何時でも行けるだろう？」

貴之 「だな。」

女子更衣室。

花名 「あれ？」

たまた 「おや？」

冠 「ん？」

美鈴 「ほえ？」

栄依子 「どうしたの？」

4人が此方を向いた。

侑李 「どうしたの皆？目が死んでるよ？」

栄依子 「まさか、下着忘れた？4人共・・・」

侑李 「何で？」

たまた「カバンの中に下着が無い事を忘れたと言うのなら、まあそういう事になりま  
すでしょうかね・・・」

花名「どどど、どうしよう!!!水着のまま帰ったら3秒ルール所じゃないよ!!!」

侑李「それこそ水着の上から服着れば問題無いんじゃない?」

栄依子「でも濡れちゃうと思うけど・・・」

美鈴「私、服が濡れちゃうの嫌なの・・・」

冠「私は、栄依子がパンツ貸してくれるから大丈夫。」

栄依子「いやいや!そしたら私どうなるの!?!」

たまた「兎に角水着をなるべく乾かすしか無いですね・・・」

花名「うう・・・」

しばらくして、志温と大会がエステから戻って来た。

志温「お待たせ。あら?」

戻って来ると、花名とたまたと美鈴ががっかりしていた。

大会「ど、どうした!?!」

たまた「パンツを・・・パンツを忘れちゃったんですよ・・・」



大会「何!?花名ちゃん達も!」

花名・たまで・美鈴「え!」

大会「いや、実は私も花名ちゃんの部屋に忘れて来てしまつて・・・」

侑李「また一大事!」

志温「もしかしたら花名ちゃん達も忘れてるかと思つて、買つて来たのよ。」

下着が入つた袋を見せた。

たまで「わああ!!パンツ!!地獄にパンツ!!」

花名「あああ、ありがとう志温ちゃん!!」

美鈴「天の恵みだー!!」

志温「履いてみて?」

花名「うん!本当に良かった・・・」

下着を履いてみるが、ハート型の穴が空いてた。

花名「あれ?こここれ・・・後ろに穴が空いてるよ・・・?」

志温「可愛いでしょ?」

栄依子「あはは。お尻見えちゃうわね。」

たまたま「ハートやら星やら丸やら、色んな形がありますね〜！」

美鈴「私ワンちゃんの形！」

冠「私、猫の形にする。」

花名「み、皆良いの!?!穴が空いてるんだよ!?!」

冠「花名！」

花名「え!?!は、はい！」

冠「これは、尻尾を出す穴だから良いの！」

花名「し、尻尾？」

たまたま「かむちゃん！ゴリラに尻尾は無いのですよ!!」

美鈴「そうだよ！ゴリラに尻尾は無いのよ!!」

たまたま「謝って下さいー!!」

冠「ごめんね。ゴリラ。」

たまたま・美鈴「良えんやで〜。」

侑李「だから何で冠だけ許すの？」

栄依子「ゴリラ博士だなあ。たまは。」

美鈴「でも私達は女豹だけどね！」

志温「万年さん、サイズ大丈夫だった？」

大会「さ、サイズと言うか、面積と言うか……このパンツ、ビキニ以上に心許ない作りと言いますか……」

志温「大丈夫ですよ。こう言う下着の紐って、飾りみたいなもので。紐を引っ張ると下着が解けた。」

冠「新鮮なライチ。」

その頃優輔と貴之は卓球をしていた。

優輔「皆遅いな。」

貴之「ああ。たまと美鈴が何か仕出かしてるんじゃないかねえのか?」

優輔「また来ようぜ。温泉プール。」

貴之「ああ。」

こうして、楽しい温泉プールを満喫した花名達であった。

「END」

## STEP10 「サメのいところ」

取り合えず大会を部屋に入れた。

大会「す．．．すまない花名ちゃん。驚かせてしまつて．．．」

花名「いえ．．．少し落ち着きました？」

大会「うん．．．」

花名「あの、栄依子ちゃんと大会さんの間に何があつたんですか？」

大会「それが洋服の事で．．．」

花名「洋服？」

数分前の事だった。以前栄依子から貰った洋服を試着してみた。裾を出してみる。大会「．．．．．」



そして現在。

大会「このコーデイナートだけは失敗出来ないと熱くなり過ぎてしまったんだ……栄依子さんには悪い事をした……」

花名「そ……そうだったんですか。あの……大会さん何処かにお出掛けですか？」  
大会「実は……予備校の夏期講習に申し込んでみようと思つて。今日はその書類を頂戴しに……」

花名「凄い！凄いです大会さん！」

大会「花名ちゃん……」

花名「だって、コンビニから段々お出掛け出来る場所が増えていつてとうとう予備校ですよ！来年は甲子園にだつて行けちゃうかも！」

大会「わ……私は何を指すと言うのか……私が外に出られるようになったのは花名ちゃんのお陰なんだ。本当にありがとう。」

花名「そそそそん！私なんか全然……」

花名「寧ろ……大会さんは前に進んでるのに足踏みしてるだけつて言うか……言

わなきやいけないと思ってるんです。隠したままじゃ良くないって……」

大会「シャツの裾をか!？」

花名「違います!」

大会「花名ちゃん! 裾の処遇をどうするべきか花名ちゃんが決めてくれ!」

花名「え……」

大会「中に入れるべきか! 外に出すべきか!」

花名「私もそう言う事決めるの苦手で……」

大会「もう花名ちゃんに頼るしかないんだ! 決めてくれ……中か! 外か!」  
するとインターホンが鳴った。

花名・大会「ん?」

志温「花名ちゃん。制服アイロン掛けて来たけど。」

タイミング良く志温がお邪魔した。花名が急いで志温の方へ。

花名「助けて〜! 志温ちゃん!」

志温「あらあらどうしたの?」

大会「中か! 外か! 中か〜! 外か〜!」

志温「どうしたの2人共？」

事情を聞いた志温。

志温「そうね、入れた方が可愛いんじゃないかしら？」

大会「確かに。」

花名「ありがとう志温ちゃん・・・」

志温「あ！でもこのシャツ裾の柄が可愛いわ。やっぱり外の方が可愛いかしら？」

大会「確かに！」

花名「し・・・志温ちゃん。結局どっちなの？」

志温「うん・・・そうね・・・まずはシャツを少し緩くして、髪の毛はこんな感じで、お帽子とか良いかも。後はこれを持って。」

シャツのボタンを緩くして、髪の毛を伸ばして、帽子を被らせて、ひまわりを渡す。

志温「うん！出来たわ！こんな感じはどうかしら？」

ひまわり畑の美少女が完成。



花名「志温ちゃん!？」

大会「栄依子さ〜ん!!」

するとまたまたインターホンが鳴った。

栄依子「突然ごめんね〜。」

何と栄依子が来たのだった。

大会「栄依子さん!」

花名・志温「栄依子ちゃん!」

栄依子「はい。栄依子です。」

大会「さ．．．先程は妙な電話をしまい大変申し訳無い．．．」

栄依子「いえいえ。あの時は私も妹と買い物してたので。」

数時間前。

大会『栄依子さん！中だろうか!?!外だろうか!?!』

栄依子「はい？」

光希「中か外か。難しい問題ですね。」

栄依子「何方でも平気ですよ。中でも外でも。」

大会『それじゃあ困るんだ！君が決めてくれ栄依子さん！中入れか！外出しか!』

栄依子「ええく？」

光希「外だと垂れてしまいますので、中の方が。」

栄依子「兎に角、大会さんの好きにする方が1番ですよ。それじゃあ失礼します。」

大会『待つてくれ栄依子さん！中か！外か!』

通話を切った。

そして現在。

花名「栄依子ちゃん来てくれて本当にありがとう！」

栄依子「気にしないで。こっちの方にも用事あったから。はい終わりましたよ。この組み合わせだとインした方がバランス良いですね。」

大会「おおう！」

志温「栄依子ちゃんはオシヤレさんだから説得力あるわ。」

栄依子「いえいえそんな。」

花名「大会さん素敵です！」

大会「あ・・・ありがとう。」

栄依子「無事に書類を取って来られるように祈ってますね。」

大会「て・・・程度の低いお祈りをさせてしまつて済まない・・・」

志温「あ！栄依子ちゃん万年さん、良かったらお夕飯食べて行かない？」

大会「え？良いのですか？」

栄依子「食べたーい・・・ですけど今日は妹がカレーを作るって言うってたので。」

大会「おお！カレーなら仕方無いな。」

花名「カレーだもんね。」

志温「カレーだものね。」

栄依子「私的には妹の手作りの方がポイントだったんですけど・・・」

大会「妹さんのカレー・・・美味しいんでしょうなあ。」

花名「食べたいなあ。」

志温「食べたいわね。」

栄依子「完全にカレーに持って行かれてる・・・」

3人の頭の中はカレーでいっぱいだった。

栄依子「じゃあ私はこれで。」

花名「またね。」

志温「お気を付けて。」

大会「本当にありがとう！栄依子さん！」

栄依子「いえいえそんな。花名ちよつと良い？」

花名「え？」

外に出た2人。

花名「どうしたの？」

栄依子「実はこつちが本命の用事なの。これ良かったら。」  
バッグから1つの小袋を渡した。

花名「わ、私に？」

栄依子「うん。」

小袋を開けると。

花名「わく！綺麗！」

ブローチが入っていた。

花名「あ、これもしかして栄依子ちゃんが？」

栄依子「そ。作ったの。この間話聞いてくれたお礼。」

花名「そんなお礼なんて・・・」

栄依子「まあまあご笑納下さいな。2人きりの時に渡そうと思っただけで意外とタイミ

ング無くて。」

花名（栄依子ちゃんモテモテだからなく。）

栄依子「それね。花名のイメージで作ったの。」

花名「え？わ・・・私の!？」

栄依子「一応モチーフは四つ葉のクローバー。花名に良い事がありますようにって。」

花名「栄依子ちゃん・・・ありがとう栄依子ちゃん！すっごく嬉しい！」

栄依子「喜んでもらえて良かった。」

花名「私毎日付けるね！制服・・・は怒られるかもしれないから鞆に！でもそれだとすぐ壊れちゃうかも・・・えつと・・・どうしよう・・・」

すると栄依子が花名の頭を撫でた。

栄依子「花名は色々考え過ぎ。貰った瞬間から壊れた時の事考えないの。」

花名「そ、そうだよね。」

栄依子「作った本人がすぐ傍にいるんだから、壊れても直してって頼めば良いだけよ。」

花名「うん！ありがとう！」

その日の夜。

花名「可愛い。栄依子ちゃん凄いな。」  
貰ったブローチを見ていた。

翌日。花名が鞆にブローチを付けて登校していた。

廊下。花名が誰かとぶつかった。

花名「うわ！」

榎並先生「おっと。」

花名「あ……ご……ごめんなさい！」

榎並先生「何だ一之瀬か。ちゃんと前見て歩けよ。」

花名「す、すみません……ボーツとしちやつて……(そう言えば……先生はどう

思ってるんだろう。私が浪人を隠したままにしてる事……」

榎並先生「おーい。一之瀬？」

花名「は……はい！」

榎並先生「アイス買いに行く所なんだがお前も来るか？！本だけなら奢ってやる。」

花名「ええ？」

榎並先生「くれぐれも他の奴には言うなよ。絶対煩いから。」

あの5人を思い出す。

たまた『それって鼻肩じゃないですか！』

栄依子・冠・侑李・美鈴『鼻肩鼻肩！』

たまた『ギブミーアイス！』

花名「い……いただきます。」



榎並先生「おー。食べ食べ。」

結局いただく事になった。

花名「先生はアイス・・・朝ごはんですか？」

榎並先生「ああ、夏ってなんか食欲無くなるよな・・・何だよ。」

花名「い、いえ・・・先生・・・私がその・・・浪人してる事、栄依子ちゃん達に話

すべきだと思いますか？」

榎並先生「うーん・・・話したいのか？」

花名「話したいと言うか・・・話さないといけないのかなって・・・」

榎並先生「いけないんだったら、私が初日に話してる。」

花名「そ・・・そうですね・・・話さなくても良いんでしょうか？」

榎並先生「そりやそうだろ。友達なら秘密でも何でもさらけ出さないといけない、と

でも思ってるのか？」

花名「！」

榎並先生「思ってるだろ。真面目だなあお前。」

花名「あ・・・その・・・ちよつとだけ。隠し事してるのって気不味いつて言うか・・・

最初は浪人してるってバカにされる、からかわれる。そう言うのが怖かったです。で

も今は・・・関係が変わるのが怖い・・・です。」

榎並先生「傍から見てる分には、話しても話さなくても変わらないと思うぞお前は。」

花名「え？」

榎並先生「ま、あまり考え過ぎるな。」

花名「今の・・・栄依子ちゃんからも同じ事を言われました。」

榎並先生「例え一言一句同じ言葉だったとしても、彼奴より私の方が良い事言ってる。」

花名「は、はあ・・・」

榎並先生「深みが違うんだ。」

教室へ行くと。

たまた「お。花名ちやわくん！おはようですよ！」

冠「ちやわん。おはよう。」

美鈴「おはよう！花名ちやわん！」

侑李「花名おはよう。」

花名「お、おはよう。」

栄依子「おはよう。今日も暑いね。」

冠「九夏三伏。」

花名「ぶく？」

冠「ぶく。」

侑李「冠、ぶくって何？」

貴之「もう歩くだけで汗が出るぜ。」

優輔「自転車に乗ったら気持ち良い風が通るな。」

たまた「いきなりすつごい夏ですね。英語で言うところサムアツ！って感じでしょうか？」

花名「それだと寒いみたいだよたまちゃん。」

侑李「確かに。サムアツって寒いって聞こえるしね。」

たまた「おや？」

栄依子「あ。そう言えば花名。志温さんに聞いたんだけど。」

すると栄依子の口から驚くべき言葉が。

「浪人してるんだってね。」

花名「・・・え？」

何と志温が榮依子に、花名が浪人してるって言ってしまったのだった。

花名（どうして・・・）

秘密がバレてしまった事にショックして声が出なかった。

たまた「浪人？」

美鈴「え？浪人？」

冠「流れ流れて浮浪人。」

栄依子「そっちの浪人じゃないから。」

花名（私・・・私・・・）

優輔「どうした花名？」

栄依子「あれ？違ってた？志温さんから去年就職出来なくて浪人中なのよって。」

花名「え・・・？ええく!?志温ちゃんが浪人!？」

栄依子「うん。就職浪人って。あれ？これって言ったらいけない話だったの？」

侑李「志温さんが浪人？」

貴之「おい志温さんが浪人なんて初耳だぞ・・・」

優輔「俺はこの前知った。」

美鈴「え？優輔何時から知ってたの？」

優輔「高校入学当時から。姉ちゃんから聞いた。」

たまた「身内が知らない情報を聞き出すとか、コミユカゲージカンストしてませんか

「？」

栄依子「そんな大袈裟な。普通にメールしてたらそう言う話になっただけよ。」

たまた「普通にメール・・・メール!? 抜かり無いですね栄依子ちゃん! 何時の間に志温ちゃんさんと連絡先交換されてたんですか!？」

栄依子「プールの時に普通の流れで・・・」

たまた「さつきから普通って! 全然普通じゃなかとですよ! 冠のアニキ。侑李のアニキ。此奴ちよつと調子乗ってますぜ? きゅつとシめてやりましょうぜ?」

冠「じゃあお酢で。」

侑李「私は鳥の骨で。」

たまた「昆布で!」

栄依子「私美味しくいたただかれちゃうの?」

貴之「出汗がエグい・・・」

花名（私自分の事でいっぱいいっぱいで、全然知らなかった・・・志温ちゃんが浪人してたなんて・・・）

夕方。志温に話した。

志温「そうよ。就職浪人中。言っただけじゃなかったかしら？」

花名「言っただけじゃなく。」

志温「あらうっかり。伝え忘れてたのね。あの頃は管理人の仕事覚えるのに一生懸命だったから。燃えるゴミの日、資源ゴミの日、粗大ゴミの日を覚えたり。」

花名「ゴミの分別に力入れてるね・・・」

志温「ゴミを制する者は管理人を制するのよ。」

花名「な・・・成る程。」

志温「今思えば、管理人の仕事徹する事で、悲しみを忘れようとしてたのかしら。」

花名「志温ちゃん・・・」

志温「でも今は本当に全然何とも思っただけから安心して！」

花名「それはそれでどうなんだろう・・・でも、志温ちゃんがどの会社にも入社出来なかったなんて・・・」

志温「それがね。受かった所もあったんだけどお爺ちゃんが・・・」

数年前。

祖父『御社の椅子のクッションは柔らかめですか!? 給湯室のタオルの柔軟剤は何をお使いで!? 勿論エアコンは毎年クリーニングしておるんでしょな!? 孫の健康! わしはそれだけが心配で心配で!』

志温『お・・・おじいちゃん!!』

そして現在。

花名「はあ・・・」

志温「女の子の孫は私と花名ちゃんだから特別過保護になってるのよね。」

花名「え、それって・・・」

志温「頑張って。」

花名「ええ・・・」

夕食のカレーが出来た。



花名・志温 「いただきまーす。」

志温 「何だかカレーが食べたくなっちゃって。」

花名 「やっぱりカレーだよね！」

志温 「カレーよね！」

花名 「・・・うん！豆腐サラダも美味しい！」

志温 「うふふ。良かった。」

花名 「(志温ちゃんはこれからどうするのか・・・管理人続けてくれるのかな・・・)」

あの・・・志温ちゃん・・・」

志温 「何？」

花名 「その、今日・・・志温ちゃんの部屋で泊まって良い？」

志温 「勿論！じゃあ後で一緒にお風呂入りましょうか！」

花名 「ええ!!」

志温 「泊まって行くんですけど？」

花名 「お・・・お風呂はいいよ！恥ずかしいよ〜！」

その後2人で風呂に入る。

志温「あのね花名ちゃん。実は去年花名ちゃんが引越して来るって分かった時に、花名ちゃん用のパジャマやお布団を買っておいたの。」

花名「え？そうだったの？わ！」

サメの水鉄砲を喰らった。

志温「これも花名ちゃんが来るから買っておいただけど。」

花名「も〜！志温ちゃんの中の私って3歳くらいで止まってない!？」

風呂から上がって、布団を敷く。

花名「し・・・志温ちゃん・・・」

サメの着ぐるみパジャマを着た花名が出て来た。

志温「わ〜！思った通り！すっごく可愛いわ！」

花名「か・・・可愛いのか!?これ可愛いのか!？」

電気を消して就寝。

花名「・・・志温ちゃん。」

志温「ん？」

花名「あ……ごめんね。」

志温「ううん。大丈夫よ。お布団が変わると眠れない？」

花名「ううん……あのねその……志温ちゃんに聞きたい事があって……」

志温「聞きたい事？」

花名「うん。志温ちゃんは管理人を続けるの？それとも、もう1回就職を頑張ってみるの？」

志温「ん……正直言うかね。悩み中。最初はね。大学のお友達は皆就職しちやつてこんな風にかの仕事を手伝つてるのは私だけで。何だか置いてかれるみたいで不安だった。でもね。管理人として皆に気持ちよく過ごして貰えるように。共用部を掃除したり。庭の手入れをしたり。昔からそう言う事するのは好きだったし自分に合ってるなつて思うようになったの。」

花名「志温ちゃん……」

志温「勿論、就職出来たらその先は色々な発見や出会いがあると思う。でも今の管理人としての自分も好きだなつて。」

花名「うん……」

彼女はあの頃を思い出した。

それは、自分が志温のアパートに引越して来た頃だった。

葉月『頼っちゃってごめんね志温ちゃん。花名の事よろしくお願いします。』

志温『いえいえ大歓迎です。葉月さんも何時でも遊びにいらして下さい。』

葉月『ありがとう。』

志温『これから宜しくね。花名ちゃん。』

花名『宜しく・・・お願いします。』

この時花名は、浪人になってしまった事で元気が無かった。

今日の昼。

花名『あ・・・』

志温『冷ややつこが好きって聞いたから色々作ってみただけど、どうかしら？』

花名『さ・・・流石に多過ぎだよ・・・』

その後、花名の長い髪を切る。

志温『後は左をもう少し・・・かな?』

花名『うん。あの・・・ありがとう志温ちゃん!』

後ろに振り向いた瞬間、志温が花名の髪をバツサリ切ってしまった。

志温『あら。』

仕方無く床屋で髪を切る事に。

志温『わく!花名ちゃん可愛いわ!』

何時もの髪型になった。

志温『短いのもすつごく似合ってる!』

花名『うん・・・ありがとう。』

その日の夜。花名が机の上で寝てると。

花名『寝ちゃった・・・?ん?』

机の上に、志温からのおにぎりがあった。

花名『志温ちゃん・・・』

そして現在。

花名「私ね・・・志温ちゃんが管理人で本当に良かった。」

志温「花名ちゃん・・・やっぱりこのまま管理人を続けようかしら?」

花名「あ・・・でも志温ちゃんが管理人さんなら嬉しいけど、無理強いたい訳じゃなくて・・・就職するなら私応援するからね!」

志温「よく考えたら、私も就職浪人で万年さんも浪人。花名ちゃんも浪人。このアパート浪人ハイツつて感じよね。」

花名「わ・・・私はもう違いますから!」

志温「ふあゝ・・・じゃあそろそろ寝ましようか。おやすみなさい。サメちゃん。」

花名「ええゝ!?ええゝ!?!」

翌朝。

志温 「はいお弁当。2日目が美味しいから。」

花名 「あ。やっぱりカレーなんだ。うんありがとう。」

志温 「いえいえ。あら。可愛い！素敵なブローチね。」

花名 「ありがとう。」

志温 「花名ちゃんによく似合ってるわ。」

花名 「それじゃあ行って来ます！」

志温 「はい。行ってらっしゃい花名ちゃん。」

アパートから出ると。

優輔 「おーい花名ー！」

貴之 「おっす！」

花名 「あ！優輔君！貴之君！おはよう！」

3人で登校する。

優輔「今日も良い天気だな。」

花名「そうだね。」

貴之「もう俺、歩くだけで汗が出ちまったな。」

優輔「自転車乗れば？風が気持ち良いぞ。」

貴之「自転車に乗れるのはお前だけだぞ。家から学校まで少し遠いからな。」

花名「くす。」

優輔「ん？どうした花名？」

花名「ううん。」

「END」



## STEP 11 「トマトのまつり」

夏休み突入。アパートでは、志温と大会がスイカを食べていた。

志温 「美味しいわね。」

大会 「乾いた体に染み渡りますな。」

志温 「最近お疲れ気味ですね。勉強大変ですか？」

大会 「それは別に良いんですが……」

志温 「良いんですか。」

大会 「もうすぐ、予備校の夏期講習が始まるもので……これから、あのキラキラピチピチした高校生の集団に入って行くと思うと……」

志温 「そつちで追い詰められてるのね。」

大会 「輝ける現役高校生のお歴が近付いて来た時に、どう対処すべきかずっとシミュレーションしてるのですが……予備校には隠れる場所も無く……もうどうしたら良いのか……」

志温 「隠れないといけないの？……そうだわ！万年さん、夏祭りに行きませんか？」

大会 「夏祭り？」

志温 「夏期講習なんか目じやないキラキラした人達が集まりますから、予行演習だと思つて。」

大会 「成る程！毒を以て毒を制するつて奴ですな！」

志温 「楽しいですよ！」

大会 「良い仮想訓練になりそうですね！」

志温 「浴衣、私の方で用意しておきますから。」

大会 「成る程！擬態ですか！」

志温 「逸れちゃうから隠れないで下さいね？」

その頃花名は、浴衣を探していた。

花名 「えっと、確かここに・・・あつた！」

クローゼットから浴衣を発見。

1年前。アパートへ引つ越しする準備の時。

葉月 『浴衣も持つて行くでしょ？』

花名 『え？ いらないよ。着る機会無いし・・・』

葉月『そんな事無いでしょ？大丈夫よ。志温ちゃん着付け出来るから。』

浴衣を持って、鏡の前に立つ。

花名「似合うかな？」

その頃優輔は、姉の麻衣子に夏祭りを誘う。

麻衣子「夏祭り？」

優輔「ああ。今度皆で夏祭りへ行く予定があるって。姉ちゃんもどうかなって。」

麻衣子「でも、店の仕事がいっぱいあるし……」

優輔「母さん達に聞いたらどうだ？」

麻衣子「うくん……ちよつとお母さんに聞いてみる。」

母の元へ向かう。

数分後。

麻衣子「楽しんでおいでって。」

優輔「マジか。」

麻衣子「うん。お爺ちゃんとお婆ちゃんも楽しんでおいでって。」

優輔「よし。じゃあ決まりだな。」

後日の信濃追分駅。

たまた「わっふー！ようこそいらっしやいませ！我が居城の最寄駅へ！」

栄依子「朝でそのテンションなの？」

侑李「元気ねくたまは。」

冠「お祭りまで保つ？」

たまた「維持してみせますとも！」

美鈴「元気モリモリね。」

貴之「倒れるんじゃねえぞ。」

花名「お、おはようたまちゃん・・・」

たまた「おや？荷物の重みでお疲れですね。疲労回復に梅干しはどうですか？」  
花名「あ、ありがとう！」

冠「あゝ。」

栄依子「ありがとう。」

貴之「梅干しかあ。」

美鈴「ありがとう！たまちゃん！」

侑李「いただくわ。」

たまた「どうぞどうぞ！」

梅干しを皆の口の中に入れる。

6人「酸っぱーーーー！！」

冠「目覚めた。」

栄依子「美味しいこれ！」

たまた「私のお手製ですよ。」

花名「へえ〜！多芸だねたまちゃん！」

たまた「おや？優輔君は来てないようですね。」

???「ヤッホーーーー！！」

ようやく優輔と麻衣子が到着した。2人はロードバイクで来たのだった。

麻衣子「いや〜長い距離を走るのは久しぶりね〜。」

優輔「相変わらず姉ちゃんは速過ぎ・・・」

貴之「よう優輔。麻衣子さん。」

優輔「皆待たせたな。」

栄依子「まさか自転車で来たの？」

優輔「ああ。俺の提案でな。」

花名「あれ？麻衣子さん？」

麻衣子「あら花名ちゃん！ゴールデンウィーク以来ね。」

たまた「おや？花名ちゃん、この人知り合いですか？」

花名「うん。優輔君のお姉さんの麻衣子さんだよ。」

麻衣子「佐野麻衣子です。弟の優輔がお世話になっております。」

栄依子「此方こそ。優輔、お姉さん綺麗ね〜。」

優輔「そうか？俺から見たら普通だけど。」

麻衣子「それってどう言う意味かしら〜？」  
拳でグリグリする。

優輔「いてててて!!ごめんごめん!!」

栄依子「仲良いわね〜。」

冠「姉弟愛。」

優輔「いててて・・・姉ちゃんのグリグリは足つぽより痛え・・・」  
たまた「では優輔君に麻衣子さんも梅干しいかがですか？」

優輔「梅干し？」

麻衣子「食べさせて〜。」

梅干しを優輔と麻衣子の口に入れる。

優輔「お! 凄え美味えこれ!」

麻衣子「美味しい!」

たまた「それ、私のお手製なんですよ?」

優輔「流石たまただな。」

麻衣子「良いわね! うちの店に出したいくらいだわ!」

たまた「恐縮です!」

全員が百地家に到着した。

栄依子「凄い。日本家屋だ。」

花名「和風だね。」

侑李「和風ね。」

冠「和風。」

たまた「わっふっふっ！」

美鈴「わっふっふっ！」

栄依子「わっふっふっ！」

5人「わっふっふっ！」

花名「わっふっふっ！」

貴之「そんなマリオみたいな声はいいから。」

麻衣子「わっふっふっ！」

優輔「姉ちゃんもノリに乗んな。」



たまで「ただいまです〜！」

史生「おかえりなさいたまちちゃん。」

多佳子「お友達もようこそいらつしやいました。」

栄依子「初めまして。十倉栄依子です。たまちちゃんには何時も仲良くしていただきます。」

冠「千石冠です・・・」

侑李「億崎侑李です。」

美鈴「初めまして。松原美鈴です。」

貴之「浪江貴之です。」

優輔「佐野優輔です。初めまして。」

麻衣子「優輔の姉の麻衣子です。宜しくお願いします。」

花名「は、初めまして！い、一之瀬花名です！宜しくお願いします！」

多佳子「うふふ。此方こそ宜しくお願いします。」

史生「可愛い子ばっかりね。」

多佳子「本当ね〜。」

美鈴「可愛い子・・・！」

優輔・貴之「調子乗んな。」

たまた「そうでしょそうでしょ！私の友達は何がい子ばかりですから！」

麻衣子「何で東北方言？」

優輔「たまたは何時もこうだから。」

冠「選りすぐりの精鋭！」

栄依子「自分で言ってる。」

多佳子「たまちゃん、荷物置いたらお買い物に行くのよね？」

栄依子「あれ？そうなの？」

たまた「ちよいとそこまでお付き合いたいだけですか？」

荷物を部屋に置いた。

9人がお買い物に出発した。

優輔「夏の日差しが良いな。」

麻衣子「またロードバイクで走りたいわね。」

栄依子「こんな近くにスーパがあるの？」

たまた「ん、インディーズの八百屋さんって所でしょうか。」

花名「インディーズ？」

美鈴「ハリソン・フォード？」

優輔「それインディー・ジョーンズ。」

たまた「じゃーん！ここでーす！」

到着した場所は、農園だった。

栄依子「あゝ！直売所かゝ！」

冠「美味しそう。」

栄依子「かむ、近い近い。」

侑李「食べちゃダメよ？」

直売所にある野菜を見る。

花名「本当だねゝ！」

麻衣子「どれも新鮮ねゝ。」

おいさん「おおたまちゃん。おはよう。」

たまた「おいさん！おはようございますですよー！トマトーかご下さいな！」

おいさん「あいよ。おまけしとくからね。」

たまって「おお！ありがとうございます！」  
トマトを袋に入れる。

たまって「ここで1つ食べて行きますか？」

麻衣子「良いの？」

冠「うんうん。」

おいさん「水道使って良いよ。」

買ったトマトを皆で食べる。

花名「わあ〜ツヤツヤ〜！」

栄依子「何これ！すっごい甘い！」

トマトを食べた冠に猫耳が出た。

冠「美味しい！」

侑李「凄く美味しい！」

美鈴「甘くて美味しい！」

たまって「でしょでしょ！採れたてですから！」

優輔「甘いトマト久し振りに食ったな〜！」

貴之「美味え！」

麻衣子「ねえたまちゃん、このトマト少し貰って良いかしら？お爺ちゃん達のお土産にしたいの。」

たまた「はい！喜んで！」

栄依子「外で食べるのがまた気持ち良いわよね〜！」

たまた「開放感ありますよね〜！」

花名「・・・ぶふっ！」

噎せた花名。

栄依子「ああ花名！それやばい白ワンピ！シミになっちゃうー！」

美鈴「どうしたら良いの!？」

たまた「ほら！これで溢しませんよ！」

両耳に袋をぶら下げただけ。

花名「うん、溢れない。」

たまた「ですよね！」

花名「でもこれ、開放感とか全然無い・・・」

たまた「ですよね・・・」

優輔「ゲロを吐くみたいな感じになってるな……」

花名「皆は、どうして溢さずに食べられるの？」

たまた「ん〜、噛むのと同時に汁を吸っちゃう感じでしょうか？ガプーっとしてチューって。」

栄依子「ああ、そんな感じ。」

冠「無心で。」

花名「よーし……えい！」

噛んだ瞬間。

花名「ケホツケホツ！」

また噎せた。

優輔「また噎せた。」

貴之「吐血したみたいになってる。」

たまた「ああ、流石我らが四天王最弱の将……」

栄依子「何それ？」

麻衣子「花名ちゃん大丈夫？」

百地家に戻った。

栄依子「わあく！アクアパツアだ！」

花名「レストランみたい！」

冠「おかわり！」

侑李「もう？」

栄依子「まだ食べてないでしょ？」

麻衣子「私と優輔も手伝ったのよ？」

優輔「久し振りの調理だったな。」

全員「いただきます。」

栄依子「うくん、美味しい！」

花名「美味しいね〜！」

貴之「トマト料理美味え！」

冠「おかわり。」

美鈴「かむちゃん早い！」

花名「だ、大丈夫？夕方からお祭りだよ？」

麻衣子「そんなに食べて大丈夫なの？」

冠「余裕。」

たまた「流石かむちゃん！皆の衆もモリモリ食べて下さいね！」

栄依子「美味し過ぎて食べ過ぎちゃうわよ。後で帯締めるのに。」

花名「本当だよ。もおくたまちゃんつてば。」

たまた「えへへ。本当は魚の煮付けを拵えようと思つたのですが、老さんに沢山トマトおまけして貰つたので、イタリアーン！にしてみましたのですよ！」

栄依子「え？急にメニュー変えてこんな凄いのが出来ちゃうの？」

花名「凄いなたまちゃん！」

麻衣子「私はたまちゃんから誘われて一緒に作つたのよね。」

優輔「俺は流石に暇だったから、姉ちゃんに同行した。」

史生「凄いのよたまちゃんは。お料理の遣り繰りも上手だし。」

多佳子「お料理と言えば、たまちゃんが小学生の時のね。」

史生「ああ、あれは可笑しかったのよね。あのね。」

たまた「んぎゃあああああ!!!我が居城だと思つていたら敵地ですかここは————



!!!  
」

優輔「一体たまの小学校時代に何があつた？」

たまて「それ以上聞かないで下さーい!!!」

女性陣達が浴衣を着る。優輔と貴之は別室で待機。

史生「腰紐を2本使うと、お端折りの調節が楽なの。」

栄依子「成る程。勉強になります。」

たまて「浴衣や着物は体を平らにした方が綺麗に見えるのですよ？」

花名「だからタオルを巻くんだね。」

たまて「そう。つまり、このタオルは私には必要の無い物・・・」

侑李「急にネガティブになったわね。」

多佳子「たまちゃん、これからよ。これから。」

花名「あはは・・・」

栄依子「どうぞ。」

史生「ありがとう栄依子ちゃん。たまちゃんから聞いた通り、気が効くのね。」

栄依子「あら、そんな事言ってくれたの？」

たまで「うう……だって、本当の事じゃないですか。」

史生「冠ちゃんの事も、何時も可愛い可愛いって言ってるのよ?」

冠「う……」

史生「たまにはたまちゃんにも抱っこさせて頂戴ね冠ちゃん。」

冠「うん……」

たまで「普段家で言ってる言葉暴露されてるこの流れ……辱めしか無いのですが……」  
麻衣子「優輔からも話聞いているわよたまちゃん。かむちちゃんと一緒に居る事が多い  
て。」

たまで「うう……優輔君まで聞かれてしまうとは……」

花名（私の事はお家で何と言ってるのかな……?）

多佳子「花名ちゃんは。」

花名「ひ、ひゃい!」

多佳子「凄く面白い子だって聞いているわよ。」

花名「面白?」

栄依子・冠・侑李・美鈴「分かる。」

花名「分かるの!?!」

たまで「面白可愛いですね!花名ちゃんは!」

花名「……」

史生「後、凄く優しい子だつて。」

花名「っ……!」

たまた「にやああああ!!お婆ちやーん!!!」

史生「あら、言っちゃいけなかつた?」

たまた「い、いけなくないんですけど……これじゃあ丸で、良い噂を流す事で好感度を上げるタイプのギャルゲーみたいじゃないですかー!!!」

栄依子「たま、その例え分かんない。」

侑李「私も分かんない。」

美鈴「同じく。」

たまた「何と!」

冠「花名、顔溶けてる。」

褒められた花名の顔が笑顔になつてる。

麻衣子「花名ちゃん。」

花名「は、はい?」

麻衣子「優輔からも聞いてるわよ。誰にでも優しい子だつて。」

花名「優輔君が?」

麻衣子「ええ。志温からも聞いてるわよ。凄く可愛い子だつて。」

花名「か、可愛い・・・？」

麻衣子「志温ったら何時も花名ちゃんの事思ってるのよ？」

花名「志温ちゃん・・・」

夕方。女性陣が浴衣に着替え終えた。

たまた「サマー……フェスティバル……!!!夏祭りですよ……!!!」

栄依子「テンション更にながってるわね。」

たまた「天井知らずですよ……!!!」

美鈴「天井知らずのIT'S SHOW TIME。」

侑李「何でB，Z？」

冠「たこ焼き焼き鳥焼きとうもろこし。」

栄依子「かむ、呪文みたいになってるから。」

侑李「全部食べる気ね。」

たまた「御用の方！行きますぞ！いぎ、出陣!!」

5人「おー！」

花名「お、おー！」

神社の夏祭り。志温と大会が来てた。

大会「う、上手く擬態出来てますか・・・？」

志温「浴衣、良くお似合いですよ。」

大会「あ、ありがとうございます・・・浴衣を着て夏祭りに来るなんて・・・2度と無いような気がしてました・・・」

志温「万年さん。」

大会「来るまではただただ恐ろしかったのですが・・・やはりこの雰囲気、童心に帰ったようでワクワクしますな！」

志温「うふふ。今日は楽しみますよ？気分転換も大事ですから。」

大会「はい！」

志温「そうだ！折角だし、合格祈願して行きましよう？」

大会「え？」

志温「神様にも応援して貰えたら、心強いでしょ？」

合格祈願しに行く2人。

大会「大家さん・・・はい！」

一方その頃9人は。

栄依子「あはは！ハムスターみたい！」

侑李「ハムリね！」

貴之「何だよハムリって。」

花名「可愛いね〜！」

たまたで「でもこのハムリちゃん、熱々のたこ焼きを平気で2つも口に入れてるんですよ？」

栄依子「良く考えたらそうだわ！」

優輔「猫舌の奴ならまず不可能だな。」

花名「強いんだねハムリちゃん！」

冠「鋼の頬つぺた。」

麻衣子「そうだわ。ねえねえ優輔、私の浴衣姿どうかしら？」

優輔「ああ。似合ってるぜ。流石姉ちゃんだ。」

麻衣子「流石私の弟。」

美鈴「私の浴衣姿もどう？」

貴之「似合ってるぞ。」

???「おーい！」

9人「ん？」

クラスメイトの大谷周と小鹿野真秀とぼったり会った。

栄依子「周！真秀！」

優輔「大谷！小鹿野！」

侑李「2人共来てたんだ！」

真秀「わあく！皆浴衣だ！」

貴之「俺と優輔は普段着だけだな。」

真秀「良いなく。私達部活帰りでそのまま来ちゃって。」

花名「そっか。陸上部は夏休みも部活あるんだね。」

美鈴「お疲れ様ね。」

周「そうそう！だから何時でも見学に来て？マネージャーも募集中だからね。一之瀬さん！いや、花名ちゃん！」

花名「え？」

たまた「隙あらば勧誘してますな。」

貴之「本当に抜け目無いなく大谷と小鹿野は。」

真秀「だって、部員少ないから。」

麻衣子「優輔のクラスメイト？」

優輔「ああ。大谷周と小鹿野真秀。陸上部に入ってる。」

すると周が冠に近寄った。

周「わく・・・浴衣冠ちゃん可愛い。抱っこしても良い？ちゃんとシャワー浴びて来たから。」

冠「だ、ダメ・・・」

怯える冠。後ろから優輔と真秀が周を止めた。

優輔「おい大谷、冠が嫌がつてるだろ。事案起こす気かお前は？」

真秀「そうだよ！ダメだって！」



周「ダメか〜！」

栄依子「何で嬉しそうなの？」

周「そうだ！佐野君、陸上部に入ったら？部員募集中だよ？」

優輔「ん〜・・・考えとく。」

一方志温と大会は。

志温「えい！」

祭りを堪能していた。ボールを投げてぬいぐるみをゲットしようとするが、どれも外れ。

大会「でや!!」

しかし大会がうさぎのぬいぐるみにボールを当ててゲットした。

大会「やった！やりましたよ大家さん!!奴の土手っ腹に風穴を空けましたよ！」

志温「じゃあ、隣のぬいぐるみも良いかしら？」

大会「おまかせあれ！」

一方9人は。

たまた「ばんびちゃん！」

美鈴「ばんびちゃん！」

ばんび「たまちゃん！美鈴ちゃん！」

3人「イエーイ！」

他のクラスメイト達と偶然会った。

菜々恵「あのね、花壇のミニひまわりがもうちよつとで満開なの。今度見に来てね？」

花名「も、勿論！」

菜々恵「あ、可愛いね。そのブローチ。」

浴衣に付いてるブローチを見付けた。

菜々恵「似合ってる。一之瀬さんに。」

花名「あ、ありがとう。」

優輔「クラスメイト達と次々会っていくな。」

貴之「皆夏祭りが楽しみなんだろうな。」

麻衣子「良いわね。高校時代の青春を思い出すわね。」

その後も夏祭りを堪能する。

たまた「そろそろレクリエーションも入れたい所ですな。」

花名「レクリエーション？」

たまた「金魚すくいや射的をする前に、まずはお待ち兼ねのデザートタイムですよ！  
甘味スイーツですよ！」

花名「ただただ甘そう……」

貴之「胸焼けするわ……」

冠「たま策士。」

たまた「名遇しとお呼び下さいな！」

優輔「ん？椿森？岩崎？」

栄依子「え？敬、幸。」

クラスメイトの椿森幸と岩崎敬と会った。

栄依子「大丈夫？」

幸「栄依子ちゃん……」

敬「つばきちの下駄の鼻緒を切れちゃってさ。千尋にサンダル買いに行ってもらってるんだけど。」

貴之「今井も来てるのか？」

敬「うん。」

すると栄依子が幸の腕を持った。

栄依子「大丈夫？怪我してない？」

幸「あ……ありがとう……」

たまた「じゃじゃーん！応急処置してみました！」

ハンカチと5円玉を使って下駄の応急処置をしたたまた。

貴之「凄っ！」

たまた「私のハンカチで申し訳無いのですが、どうぞ！」

幸「でも、汚したらいけないから。」

たまた「お気になさらずですよ！こう言う時の為に持ってきたのですから！」

幸「だ、大丈夫……」

たまた「でも……」

幸「いいから！」

たまた「あ、はい……」

貴之「椿森怖え……」

麻衣子（あの子どうしたの？）

優輔（椿森幸は栄依子にしか目が無いんだ。）

この夏祭りには、榎並先生も来ていた。かき氷を食べてる。

栄依子「先生！」

榎並先生「お前らか。」

侑李「ヤッホー先生！会っちゃったね！」

たまた「流石の榎並先生さんも遊びに来ちゃうんですね！お祭りって！」

榎並先生「遊びじゃねえ。仕事だ。」

かき氷を後ろに隠してる。

榎並先生「こう言う地域のイベントって事は、教師が見回る事になってんだよ。」

たまた「先生は一人で見回ってるんですか？」

榎並先生「学年主任と一緒に来たんだがな、逸れたフリをして置いて来た。」

貴之「可哀想じゃないですかそれ……」

栄依子「そう言う事をするから怒られるんですよ。」

榎並先生「五月蠅え。」

麻衣子「優輔の先生？」

優輔「ああ、榎並清瀬先生。俺達のクラスの担任だ。」

麻衣子「初めまして先生。佐野優輔の姉の佐野麻衣子です。」

榎並先生「ああ、佐野のお姉さんですか。お世話になっております。佐野、良いお姉さんを持ったな。」

優輔「ありがとうございます。」

栄依子「もう一層、浴衣で来れば良かったのに。」

侑李「そうだよ先生。浴衣姿で来れば雰囲気変わるよ？」

榎並先生「仕事だっつんでんだろ。お前ら、祭りだからってハメ外して悪さしてないだろうな？」

たまた「悪さ？」

美鈴「何の悪さ？」

冠「西日本に、東日本の蟬を解き放って生態系を破壊したり。」

たまた「人の折り紙の金色を躊躇無く使ったり。」

榎並先生「極悪だな。」

優輔「何ちゆう悪さだ。」

美鈴「ワルサーP38。」

侑李「ルパン三世？」

栄依子「まあまあ先生。一口どうぞ。」

榎並先生「っ……」

ソフトクリーム一口食べた。

栄依子「美味しいですか？」

たまた「教師を餌付けする女子高生……」

優輔「何だこの光景……」

榎並先生「ソフトクリームって感じの味だな。」

貴之「まんまじゃないですか。」

栄依子「まあソフトクリームですから。あ、先生付いてますよ？」

口の周りに付いてるクリームを指で取った瞬間。榎並先生がそのクリームを食べた。

栄依子「え!？」

榎並先生「ああ悪い。つい。」

栄依子「……」

たまた 「お盛んですな〜。」

麻衣子 「面白い先生ね・・・」

花名 「な、何が起こったの!？」

たまた 「っ!？」

後ろから気配を感じたたまたまが振り向いたが、何も無かった。

ヨーヨー釣り、射的、ひよこすくい、綿あめ、くじで花火を手に入れたり、りんご飴を買ったりもした。

神社の方へ向かった9人。そこでお参りをする。

栄依子 「これからどうする？」

たまた 「さつきくじで当たった花火やりに行きませんか？」



一方志温と大会は。

大会「今日は本当にありがとうございます。大家さん。」

志温「良い気分転換になったかしら？」

大会「はい。それはもう。」

彼女の手には学業成就のお守りがあつた。

大会「私はこんな時、花名ちゃんや大家さんに背中を押してもらつてるばかりで：このご恩は、必ずや夏期講習無遅刻無結成でお返しします！キラキラピチピチになりするものぞ!!」

志温「わ〜。」

一方9人は、近くの河川敷で花火をしていた。

花名「わ〜！」

栄依子「花火とか久し振り〜！」

花名「私も！」

優輔「花火をやると童心に帰るな！喰らえ!!」

貴之「その気持ち分かるぜ！おっと!!」

手持ち花火でバトルをしてる2人。

麻衣子「こくら危ないでしょ？」

たまた「私も超久し振りですよ〜！」

火の玉を持つてるたまた。

花名・冠・美鈴「わあああああ!!!」

冠「お化け怖い・・・！」

美鈴「誰か助けて・・・！」

花名「か、神様にお祈りした後だから大丈夫だよ・・・！」

たまた「あ、これこう言う花火ですよ？」

侑李「面白い花火ね。」

たまた「皆の衆はさっきの神社で何をお願いしたんですか？」

栄依子「たまは？」

たまた「世界が平和になりますように！お野菜の値段が高騰しませんように！限定ラ  
イブ当たりますように！これからも皆で楽しく宜しくやれますように！」

栄依子「多いな〜・・・」

侑李「でも野菜の値段は大事よね。」

たまた「美鈴ちゃんは何をお願いしたんです？」

美鈴「私は・・・素敵な子と出会えますように！」

貴之「それかよ・・・」

たまた「貴之君は？」

貴之「俺は普通に健康でいられますようにだ。優輔は？」

優輔「俺はそうだな・・・良い将来が見付かりますようにだ。それと、姉ちゃんに幸せが訪れますようにだ。」

麻衣子「ありがとう優輔。」

優輔「姉ちゃんは？」

麻衣子「私は家がこれからも繁盛しますように。そして、お爺ちゃんとお婆ちゃんが元気でいられますように。」

優輔「本当に爺ちゃんと婆ちゃんが好きなんだな。」

麻衣子「当たり前よ。2人に恩返ししないなんてつまんないんだもん。」

たまた「栄依子ちゃんは何をお願いしたんです？」

栄依子「秘密。だって、口に出すと叶わないって言うじゃない。」

たまた「えー!? 神様はそこまでケチじゃないですよ！」

冠「じゃあ、私も秘密。」

侑李「私も同じく。」

たまた「えー!?!は、花名ちゃんは？花名ちゃんは教えてくれますよね．．．?」

花名「うん。あ、でも、お願い事はしてないって言うか．．．」

たまた「してない？」

冠「無欲？」

花名「お礼したの。ありがとうございますって。今の学校で、皆と友達になれて、毎

日楽しいから！」

たまた「花名ちゃん．．．」

美鈴「もう花名ちゃん天使．．．」

冠「私もお礼する。」

たまた「私も行きます！」

栄依子「私も！」

侑李「私も行く！」

美鈴「私も私も！」

花名「え、ええ!?!今行くの!?!」

優輔「おい待てよお前ら！」

すると花火が空に舞い上がった。

花名「わあ〜！」

貴之「綺麗な花火だ！」

たまた「見事ですな〜！」

栄依子「た〜まや〜！」

侑李「か〜ぎや〜！」

冠「た〜まて〜！」

たまた「は〜い！」

志温や大会、更に榎並先生も花火を見てる。

たまた「いやあ〜、我々の夏休みを祝うような花火ですね！」

栄依子「そうね。」

たまた「夏休みは始まったばかりですからね！これから楽しい事がいっぱいありますね！」

花名「あ。」

ピンク色の花火を見て、花名は入学式の頃を思い出した。

栄依子『遠回りして良かったでしょ？』

花名（うん、良かった。遠回りして良かったよ！）

たまた「こうしちゃいられません！我々も対抗しましょう!!」

打ち上げ花火とヘビ花火を大量に持って来た。

花名「か、冠ちゃん!? どうしてそんなに打ち上げ花火持ってるの!?!」

冠「でっかい花火、打ち上げようぜ。」

優輔「急にイケボ!？」

栄依子「かむの方が飛んで行っちゃいそうだけど。」

花名「・・・うふふ。」

へび花火を着火。みるみる伸びる。

花名「ねえ冠ちゃん。」

冠「ん？」

花名「これのでっかい花火なの？」

冠「おーよ！」

優輔・貴之「ちっちゃいでかい花火だな。」

麻衣子「どっち？」

こうして夏祭りを楽しんだ花名達であった。

「END」

## LASTSTEP 「スロウのスタート」

夏休みの登校日の朝。冠が1匹の猫を見付けて後を追っていた。猫が止まると冠が止まる。猫が走り出すと冠も走り出す。猫が路地へ逃げた。冠も路地へ行く。

たまた「かむちゃんゲツトです〜！ああ夢にまで見たかむちゃんが遂に我が手にも離さない！愛してる！」

何故かたまたが待ち伏せして、冠をギユツと抱き締めた。しかし冠が引き離れた。

冠「そんな簡単にはいかない！」

たまた「ほらほらかむちゃん。お菓子でちゅよ〜。」

カバンからうまい棒を出した。冠は抵抗したが、我慢が抑え切れずにうまい棒を食べた。

たまた「にやは〜！」

1年2組。



栄依子「ああ。それでかむはお菓子食べてるのね。」

貴之「どんだけお菓子に目が無いんだよ冠は。」

たまて「一本釣り出来ました〜！」

優輔「10円で一本釣りって何か凄えな・・・」

冠「次は釣られない。」

美鈴「頑張つて冠ちゃん。」

たまて「次はかむちゃんの好みをリサーチした完璧なえ付けをしてみせますよ！」

侑李「と、たまが仰ってますけど？」

冠「そんなに安くない！」

栄依子「爆釣りだ〜。」

侑李「爆釣りね〜。」

花名「おはよう。」

たまて「あ！花名ちゃん！おはようございますよー！」

優輔「よう花名。おはよう。」

栄依子「おはよう花名。」

冠「おはよう花名。」

侑李「花名おはよう。」

貴之「花名おはようさん。」

美鈴「おはよう花名ちゃん！」

たまた「それにしても登校日って授業無くて最高ですね！普段も集まって話して解散  
だったらどんなに良い事か！」

美鈴「私もそれ思ってた！」

栄依子「寄合所だそれ。」

冠「お弁当も無い。」

優輔「確かにそうだな。」

栄依子「午前中で解散だもんね。何処か食べに行く？」

たまた「良いですな〜！」

優輔「じゃあ俺の家へ来るか？」

栄依子「え？良いの？」

優輔「折角だし寄ってくれ。サービスしてやる。」

侑李「ありがとう優輔！」

花名「……………」

栄依子「花名？」

花名「え？ああごめん・・・」

たまた「どうしたんですか花名ちゃん？もしかして、花名ちゃんもお腹空きました!？」

美鈴「私も絶賛空腹中！」

優輔・貴之「お前に聞いてねえよ。」

花名「・・・高校生にもなつてお母さんが選んだお洋服着てるつて変なのかな・・・」

たまた「花名ちゃんのお洋服はお母さんセレクトでしたかく！」

花名「うん。でも今度は自分で選んでみなさいつて。」

栄依子「私たまに母親に服作つて貰つてるけど。」

花名「え!? そうなの!？」

美鈴「え!?!お母さんの手作り!？」

たまた「私はおばあちゃんのお着物お直しして貰つて着てますよ。」

優輔「凄え！」

栄依子「かむもお母さんが選んだ洋服よね基本。」

冠「ん。でもひらひらひらひらひらしてて。」

栄依子「ひらひら1つくらい減らしてもらいたいわよね。」

たまた「まあ自分で選んだりもしてますけど別に変じゃないですよ。」

花名「そ……そっか。」

優輔（さつきから椿森の視線が……）

ずつと椿森幸の視線を気にしてる優輔だった。

栄依子「良い機会じゃない。皆で服を買いに行かない？ 私も新しいの買いたかったのよね。」

たまた「良いですね！ 花名ちゃんに似合うのを皆で選びましょう！ 花名ちゃんにはもつと過激なのも行けると思うんですよ！」

冠「全裸とか。」

優輔・貴之「ブツ！」

栄依子「それだと服いらないうね。」

侑李「服着なさいよ。」

花名「自分で選ぼうとすると難しいな……大会さんの気持ちがあつたかも。」

たまた「花名ちゃん。そう言えば万年お姉さんはお元気ですか？」

花名「あ、うん。この前のお祭りも志温ちゃんで行つてみたい。」

栄依子「へーそうなんだ。会いたかつたな。」

侑李「また色々いじる気なのあなたは？」

たまた「お祭りに行けるならもうコンビも余裕ですね！」

花名「最近は10km先のコンビニでも余裕だつて言つてたよ。」

美鈴「何でコンビニに拘るの？」

栄依子「そんなに縄張り広げてどうするのかな。」

優輔「もう寧ろ大型パートでも行けるんじゃないの？」

たまた「じゃあ我々も縄張り広げますか。花名ちゃんにお似合いの洋服屋さんマツ  
プも！」

貴之「張り合つてどうする。」

栄依子「そうね。じゃあ明日で大丈夫？」

たまた「流石栄依子ちゃん！行動早い！私も良いですよ。花名ちゃんは大丈夫ですか  
？」

花名「う・・・うん。大丈夫。ありがとう。」

たまた「よし！花名ちゃんに似合う花名ちゃんらしいお洋服見付けちゃいませよー  
！」

花名「私らしい？」

美鈴「花名ちゃんらしい可愛い服を探そうね。」

冠「その後で皆でパフェ食べたい。」

たまた「良いですねー！花名ちゃんのお洋服選びからのパフェコース！およパフェ

！」

冠「およ。パフェ。」

たまた「パーフェクトなお洋服と言う意味でもあります！」

花名「およ。パフェ・・・」

冠「およ。パフェ。」

優輔「女子高生が使いそうな言葉が出たな。（つてか椿森、栄依子ばつか見てるやんけ・・・）」

榎並先生「お前ら何時も元気だなあ。」

栄依子「おはようございます先生！」

侑李「おつはよー先生！」

たまた「おはようございますですよ！先生も元気いっぱい頑張りましょう！」

榎並先生「そう言うのはお前らに任すわ。」

たまた「任されました！」

優輔・貴之・美鈴「任されちゃったよ。」

榎並先生「まっ、取り敢えずホームルーム始めるぞ。」

放課後の廊下。

栄依子「先生お疲れ様でした。」

榎並先生「おう。」

栄依子「今日はこれで終わりですよね？」

榎並先生「ん？ そうだな。全く：：何で夏休みなのに学校に来ないといけないんだ。」

栄依子「先生飴食べます？ 美味しいんですよこれ。」

榎並先生「お。知ってる。美味しいよなこれ。」

栄依子「じゃあはい。どうぞ。」

榎並先生「サンキュ。」

飴を貰って食べる。すると後ろから。

学年主任「榎並先生。至急こちらに来て下さい。」

呼び出された。

栄依子「お説教ですか？」

榎並先生「五月蠅え……」

栄依子「うふふ。」

榎並先生「ほら。ちよつとこれ預かってろ。」

何と飴を栄依子の口に入れた。

栄依子「っ!？」

榎並先生「はい。何でしょうか。」

栄依子「預かってろ……とは。それはつまり……甘……」

数分後。栄依子が外を眺めると。

榎並先生「ああ疲れた……」

栄依子「ご苦労様です。」

榎並先生「飴は？」

栄依子「終わっちゃいましたよそんなの。」



榎並先生「何だと・・・？」

栄依子「戻って来るの遅いんですもん。」

榎並先生「仕方無いだろ。学年主任の説教が長いんだし。」

栄依子「あは。やつぱりお説教だったんだ。」

榎並先生「五月蠅え。もう・・・持つてないのか？ 飴。」

栄依子「いや〜あれが最後でした。」

榎並先生「マジか・・・くっそ〜。」

栄依子「まだ・・・味、残ってますけど？」

榎並先生「何言ってるんだ馬鹿。」

出席簿で栄依子を叩いた。

栄依子「痛った〜い。」

榎並先生「痛くないように叩いてるだろ。」

栄依子「確かに全然痛くないですけど・・・」

榎並先生「さっさと帰れよ。」

去って行く榎並先生。栄依子はポケットからあの飴を取り出した。

栄依子（甘い・・・けど期待してた甘さとは違うのでした。なくんで。）

たまたま「もう1個持つてるじゃないですかー!」

冠「沢山持つて来てた。」

花名「私さつき貰ったよ・・・」

優輔「しかし何だ?生徒と先生の禁断の恋的な感じは。」

貴之「にしても栄依子、榎並先生を煽ってたな。」

美鈴「凄いね栄依子ちゃん。」

侑李「相変わらずね栄依子は。」

2人のやり取りを彼女達がこっそり覗いてた。そしてもう1人。

幸「栄依子ちゃん栄依子ちゃん栄依子ちゃん栄依子ちゃん栄依子ちゃん・・・」

その後花名がアパートに帰ると。

大会「あ!花名ちゃんおかえり〜!」

花名「え!?!」

何と志温と大会が制服姿になっていた。

志温 「花名ちゃんおかえりなさい！」

花名 「ど．．．どうしちやったの？ 2人共その服．．．」

大会 「聞いてくれるか花名ちゃん!？」

志温 「聞いて欲しくてここで2人で待つてたのよね。」

大会 「実は！先日申し込んであつた夏期講習がついに明日から始まるのだが！浪人だと気取られるぬように大家さんの助言で高校の制服を着用していこうかと思つてな。ちよつと試着していたのだ！」

花名 「わ．．．わ．．．」

志温 「可愛いですよ万年さん。」

花名 「大会さんはまだしも．．．志温ちゃんまでどうして制服なの？」

志温 「ノリで！」

大会 「え？ノリ．．．？」

花名 「ノリで．．．？」

大会 「ま．．．まあこの作戦はいかがだろうか花名ちゃん？」

花名 「あの．．．もう夏休みだから制服で来る人はあんまり居ないと思う．．．」

大会 「．．．はっ！」

冷静なツツコミ。

部屋に戻ると、この前貰った封筒がテーブルの上にあった。

花名「私らしい服って・・・どんなだろう。」

満月が浮かぶ謎の森の中。

花名「ここは・・・あれ？何でパジャマ？」

大会「花名ちゃんも夏期講習に参加するのわ！」

木の後ろに隠れてる大会を見付けた。

花名「え？わ・・・私は・・・大会さんまたスウェットに戻ってますよ。」

大会「自分らしさを追求した結果こうなったのだ！花名ちゃんもお揃いだ！」

花名「え!? 本当だ！スウェットになってる・・・」

パジャマから何時の間にかスウェットになっていた。

大会「おっと！講習に遅刻してしまう！またな花名ちゃん！」

猛ダツシユで去って行った。

花名「え!? ひ・・・大会さん! き、気を付けて・・・」

森の中を進むと。

花名「ん? 何? 泉?」

青く光つてる泉を発見した。その中から志温が出て来た。

花名「志温ちゃん!」

志温「あなたの落としたのは、この金のたまちゃんでしょうか? それとも銀のたまちゃんでしょうか?」

両手に金色と銀色に輝く2人のたまてがあつた。

花名「志温ちゃん何を・・・」

志温「今は泉の精よ。遂に就職が決まったの。」

花名「ええ・・・?」

遂に志温が就職決定した?

志温「あなたが突き落としたのはどちらのたまちゃんでしょうか?」

花名「どっちも突き落としたりしてないよ!」

志温「正直者のあなたにはこの金のたまちゃんを授けましょう。銀なら3人分よ。」

花名「あ……ありがとうございます。」

たまた「助けてくれたお礼に秘密をお話しします。花名ちゃん。実は私浪人してたんです。」

花名「ええ!？」

冠「私も。」

花名「冠ちゃんも!？」

優輔「俺も浪人。」

貴之「右に同じく。」

美鈴「同じく!」

花名「ええ!？」

栄依子「私なんて浪人しまくりでもう20歳なの。」

侑李「私ももう20歳。時が経つの早いよね。」

花名「通りで大人っぽいと思ってたけど……じ……実は私も浪人してて……」

たまた「あらー!花名ちゃんもでしたか!」

花名「なーんだ。みんなも同じだったんだね。安心しちゃった!」

すると目覚ましが鳴った。花名は起きてすぐに止めた。因みに先程の出来事は花名の夢の中だった。

花名「ごめん……皆。特に栄依子ちゃん、侑李ちゃんがくっ。」

納得してしまった事を反省した。

軽井沢アウトレットパーク。

侑李「花名ー！」

たまた「花名ちゃん花名ちゃん！こっちですよ！」

花名「うん……やっぱり何買って良いか分からないよ……」

栄依子「無理に今日買わなくても良いんだし、似合ってる服をゆっくり探していこう？」

花名「う、うん。」

冠「素材が良い。」

花名「え？」

冠「花名は何でも似合うと思う。」

たまた「そうでしょう。花名ちゃんはかむちちゃんと同じで最高の素材ですからね！」

花名「素材って……」

店員「ただいまよりマグロの解体ショーを始めます！皆様見学して下さい！」

たまた「かむちちゃん聞きましたか!?これは是非参加しなくては！」

冠「合点承知！」

美鈴「私も行くよ！」

たまた「と言う訳でちよいと失礼します！」

全力ダツシユでマグロの解体ショーを見に向かった。

花名「ああ！たまちゃん！冠ちゃん！美鈴ちゃん！」

栄依子「先に行ってるからねー！」

侑李「早く来てねー！」



貴之「マグロの解体ショーか。」

優輔「最近見たな俺。」

栄依子「花名、取り敢えず5人でお店に行くよ。」

花名「う、うん。」

服の店に来店。

花名（お母さんの選ぶ服って可愛いなっと思うけど時々子供っぽいなと思う事もあつて……じゃあ大人っぽい服をと思ったたらなんかまだ私には似合っていない気がして……）  
 栄依子「ゆつくりで良いんじゃないかな？素直に今の花名が好きな物を着たら良いと思うわよ。無理に何時もと違う服を着てるのも花名らしくないしね。それはそれで可愛いと思うけど。」

侑李「そうね。今の花名も可愛いわよ。」

優輔「まあ一理あるな。今のお前も花名らしいしな。」

貴之「だが無理はするなよ。」

花名「栄依子ちゃん……侑李ちゃん……優輔君……貴之君……やっぱ  
 りこれが良いかも……」

栄依子「それ花名らしいわよ。」

花名「え・・・？私らしい・・・？」

栄依子「うん。とつても素直な可愛い服よ。じゃあさっそく試着しましょうね。」

花名「え!!も、もう!!」

栄依子「すみませーん店員さん試着室借りますね。」

花名「え、栄依子ちゃん!!」

試着する花名。栄依子と侑李と優輔と貴之は待つてる。

花名「(栄依子ちゃんは凄いな・・・てきぱきして落ち着いてるし。自分で自分に似合うの見付けられるなんて・・・もしかして本当に20歳?)この服似合ってるのかな・・・私なんだかちよつとだけ大人っぽくなった気がする・・・ん?」

栄依子「どう?」

覗いてる栄依子。

花名「栄依子ちゃん!」

栄依子「わく。良いじゃない。凄く似合ってる。」

侑李「本当だ!花名可愛い!」

花名「ゆ、侑李ちゃん！」

栄依子「・・・」

花名「どうしたの・・・？」

栄依子「花名、なんか大人っぽくなったかもって思ってた。」

花名「止めて止めて！気遣いなど無用です！」

栄依子「何で敬語・・・？」

侑李「またペンギンになってる。」

花名「大人っぽくなったというか少し成長したのかも・・・」

栄依子「胸とか？」

花名「う・・・うん。実は下着のサイズも合わなくなってる・・・」

栄依子「それも付き合おっか？」

花名「え？良いの？」

栄依子「良かったらお供します。」

侑李「私もお供するわ。」

花名「良かった：志温ちゃんと一緒に来てってお願いしようと思ってたんだけど：志温ちゃんからしたら私の胸の増減なんてアリンコが止まったくらいのもだろうなって。」

優輔「確かに、志温さんの胸でかかったな……」

貴之「どうやったたらあんなにでかくなるんだよ……」

栄依子「あはは。志温さんから見たらみーんなアリンコかも。どうする？服買った後で行く？」

花名「あの……出来たら下着買う時は3人だけの時が……」

侑李「私と栄依子と？」

栄依子「そうなの？たまやかむはからかつたりしないと思うわよ。」

花名「うん……それは分かってるんだけど……」

栄依子「ぐっ!?かむ!？」

戻って来た冠に抱き着かれた。

侑李「もう戻って来たの!？」

たまた「いや〜!凄かったですよ解体ショー!」

冠「堪能した。味見もした。」

美鈴「また見たいなー!」

優輔「そのTシャツは何だ？」

貴之「赤身にまぐるに大トロって。」

栄依子「すっかりマグロに魅せられちゃって。」

冠 「これからはマグロの時代来る！」

たまた 「花名ちゃん！そのお洋服凄く似合ってますよ！めんこいですよ！このTシャツと良い勝負ですよ！」

美鈴 「本当だ！花名ちゃん可愛いー！」

冠 「マグロの輝きと良い勝負。」

優輔 「マグロで張り合うな。」

花名 「意味は分からないけど褒められてる？」

栄依子 「意味は分からないけど絶賛よ！」

その後雑貨屋に来た。

栄依子 「ここは一点ものも多いから楽しいのよね。」

冠 「前花名とたまの誕生日の時に送ったプレゼントもここで買った。」

花名 「本当だ〜！」

たまた 「そう言えば今日は栄依子ちゃんとかむちゃんの誕生日の間の日じゃないですか!？」

栄依子 「確かにそうね。」

侑李「2人共誕生日おめでとう。」

栄依子「ありがとう侑李。」

冠「侑李感謝。」

花名「だったら栄依子ちゃんと冠ちゃんの分のぬいぐるみを買うのはどうかかな？」

たまた「じゃあ花名ちゃんは栄依子ちゃんの分をお願いします！私がかむちゃんの分を買うですよ！」

栄依子「良いわね！皆でお揃い！」

冠「統一感大事。」

たまた「四天王く爆誕です！」

美鈴「四天王って、私達はどうなるんだろう？」

侑李「部下で良いんじゃない？」

美鈴「ええ!？」

優輔「四天王は花名達で十分だろ。」

貴之「俺達は四天王に仕える部下として。」

花名「栄依子ちゃん冠ちゃん。何色が良いかな？」

たまた「選んで下さいさあさあ！」

栄依子「んゝ・・・じゃあお言葉に甘えて。私はこの子かな。」

冠「この子が呼んでる。」

たまた「了解！」

栄依子「それでこのぬいぐるみはたまと花名のと一緒に飾ってくれない？」

冠「私と栄依子も花名やたまと一緒に居たい。」

たまた「なんて良え子やく！女手一つでよくここまで育てはったな栄依子はん！」

嬉しくなつて冠を抱き締めた。

冠「ふん！」

栄依子「たまた、かむの捕獲テクニク上がつてない？」

美鈴「良え子ね。栄依子ちゃんだけに。」

優輔「・・・」

貴之「・・・」

侑李「・・・」

美鈴「あ、あれ？」

栄依子「で、花名。お願い出来る？」

花名「勿論だよ！」

たまた「これで何時も一緒ですね！」

花名「たまちゃん！」

たまた「花名ちゃん！」

花名「たまちゃん！」

冠「パフェ！」

花名「パフェ！」

たまた「そうでしたーパフェー！クマとマグロの気まぐれパフェー！」

栄依子「気まぐれが過ぎるなあ・・・」

冠「普通が良い。」

花名「あははは。」

夕方。軽井沢駅。

花名「今日はありがとう。お陰で素敵な服が選べたと思う！」



たまた「今度それ着てお出掛けしましよ〜！」  
花名「うん！」

冠「その服でパフェ食べに行ったり、お寿司食べに行ったり、かつ丼食べに行ったりしたい。」

栄依子「どんどん服がメインから外れていくなあ。」

冠「後優輔のお店へ食べに行ったりもしたい。」

優輔「何時もで来てくれ。歓迎するぜ。」

たまた「じゃあ花名ちゃんまた学校で！」

栄依子「またね。」

冠「また。」

侑李「またね花名。」

一方大会は、予備校の前に立っていた。

大会（今日は止めてまた明日にしようか・・・いや、明日は雨な気がするから明後日にしよう・・・きよ・・・今日は仏滅だった気がする・・・）

彼女は勇気を出して予備校へ進んだ。

一方優輔は、部屋でゲームをしていた。

麻衣子「優輔、ご飯よ。」

優輔「おう。今日のメニューは？」

麻衣子「今日はマグロ祭りだよ！」

優輔「マグロ!? マジかよ！」

麻衣子「どうする? 海鮮丼にする?」

優輔「海鮮丼食いたい！」

麻衣子「OK！」

そしてアパートでは。

志温「今日はお魚が安かったからお刺身にしてみたのよ。」

花名「美味しそう！もうお腹空いちやっただけ！」

志温「それでね。あまりにも良い素材だったから兜煮を作ってみたの。」  
マグロの兜煮を見せた。

花名「素材!?!兜煮!?!」

志温「目玉にはDHAが沢山含まれてるのよ。」

マグロの目玉は非常に栄養価が高い。記憶力の向上、学習能力の向上、頭の回転が良くなる、視力低下の予防の効果がある。

花名「志温ちゃん！」

志温「ん？どうしたの？」

花名「ご飯食べたからお願いがあるんだけど……」

志温「またお風呂で一緒に頭洗って欲しいとか？」

花名「そ……そんな事じゃないよ！お母さんに渡されたお金で洋服買って来たんだけど……良かったら写真……撮ってくれないかな？それをお母さん達に送りたいんだけど。」

志温「良いわよ。葉月さんに見せてあげましょう。ちゃんとセットや小物も用意しないかね。」

謎のトロフィーを出した。

花名「ええ!?!別にそれはいいよ!」

買った服を着て志温の元へ。

花名「志温ちゃ・・・」

志温「じゃーん!」

また制服姿になっていた。

花名「志温ちゃん!?!」

志温「折角なんだし2人で撮りましょう。」

花名「ええく!?!」

志温「その服凄く可愛いわね。」

花名「そ・・・そうかな・・・」

志温「花名ちゃんに似合ってるわ。」

花名「ありがとう志温ちゃん。」

2人で撮る事に。

花名「いきなり写真送ってびっくりしないかな・・・」

志温「絶対喜ぶわよ。葉月さんも制服姿送ってくれないかしら。」

花名「それは流石にお父さんが止めると思うよ・・・」

一眼レフの前に立つ。

志温「さあ花名ちゃん、並んで並んで。」

花名「うん。」

志温「花名ちゃん。高校生っぽくなったわね。」

花名「え!?!」

驚いて志温に向いた瞬間、シャッターが切られた。

花名「あ・・・」

志温「ちゃんと前向いておかないと。」

花名「だって志温ちゃんが変な事言うから・・・」

志温「あ!サメのパジャマ姿も送りましょう。」

花名「志温ちゃん!あれは駄目だよ!」

『一之瀬花名、17歳。まだ友達に秘密は言えてないけど何時かは自分の口からちゃんと言えたら良いな・・・遠回りになったけど私の幸せはゆっくり始まる・・・』

何時かは皆に自分の秘密を言えるように努力する花名であった。彼女の幸せはこれから続く。

「THE END」